『それは話ではわからないわねえ！　自身でやつて見なくつちや……自身でその巴渦の中に入つて見なくつちや――。自分たちの生活だ！　なんて、立派さうなことを現に私も言つてゐたし、それを實行もして來たし、これからも實行して行かうとしてゐるんですけどね。それは私だちが二三年前に考へたやうな、そんな抽象的な、感情的なことぢやないんですからね……。それこそひとつひとつ嚴かな事實となつて眼の前にせまつて來るんですからね。樂しいファンダジイや何かではないんですから。何んなことでもして、それをつきぬけて行かなければならないんですから……。私、それを考へて、幾晩も幾晩も眠られないやうなことがありましたのよ。親と子との爭ひなんか、それから比べると何でもないッていふ氣がしますよ』

四一

二人の生活が思つたやうなものでないことを、木村が今だにどこにもつとめずにぶら〳〵してゐるといふことを、別に女があるといふほどではないにしても兎に角さうした關係を常に起し易いのでそのためにも雪子が始終苦しんでゐるといふことを、母親が父親に内所で訪ねて來て呉れるばかりでなく、月月の會計のことなどにもきまつた金を出して呉れるのでそれでかうして暮してゐられるのであるといふことを幸子はやがてそこに發見した。勿論それはさうはつきりと詳しく話してきかせたといふわけでは

なかつた。たゞ話してゐる中にさうしたことがひとり手にわかつて來たのだつた。

兩親の生活にはとても眼をつぶつてついて行くことが出來なかつたと一方では言つてゐながら、一方ではやつぱり兩親でなければ本當のことはわかつて貰へないといふやうな言ひ方を雪子はした。

『戀愛生活といふものはかう言ふものなんでせうね。爭ひに爭ひをつゞけた上にやつとさうした生活らしい空氣が出來て行くんぢやないかと思ふの。やつぱりひとつの受難ね』こんなことを言つて雪子は例のいつものの口を曲げるやうにした。

『でもさういふものの上に築き上げた生活でなくつては、本當に新しい生活とは言へないんぢやないでせうか？』

『それはさうかも知れませんわ……』

『でも、變ね、私、變な氣がするわ』幸子はちよつとだまつて雪子の顔を見つめてゐたが、思ひ切つたといふやうにして、

『だつて雪子さんの口からそんな言葉をきかうとは思ひもかけなかつたんですもの……。何んな生活でも自分で打ち立てた生活！　さうぢやないんですか？』

雪子はかう一歩突込まれて、

『それはさうよ。今だつて、私、さう考へてゐないことはないのよ……。しかし、世の中に出たと出

ないのとでは違ふわねえ。かうも違ふものかと思ふくらゐよ。天と地くらゐ違ふわねえ！』

『さうですかね――』

點頭きかねるといふやうにして幸子は言ふのだつた。

雪子の話では、いかにもその生活は難かしいやうに見えた。とても昔考へてゐたやうなものではないやうに。何うなつて行くかその身にもわからないやうに。ちよつとしたこと、たとへば右のものを左に移すと言つたやうなことでもこの世の中では容易でないといふやうに。今ではたゞ目前のものに捉えられて日を送つてゐるといふやうに。それは兩親の言ふやうに親の手からすぐに因襲的に夫の手に移つて行つた方が好いとは今でも思つてゐないけれども、若さに動かされて單純に動くのはあまり好いことではないといふやうに。

『中でも私母にそむき切れないことが一番悲しい。これがわけなく何うにかなれば好いんですけど――。父のやうにさつぱりしてゐれば好いんですけども、さうは行かないんですもの……。何うしてさう母は捨てゝ呉れないだらう。私のやうな不孝な娘は捨てゝ捨てゝ捨てゝ了つて呉れれば好いのに、何うして捨てゝ呉れないのだらう？　かう思つて何遍泣いたか知れませんからね。それに、もつとわるいことは、母は私に非常に重いのぞみをかけてゐたんですもの……。私がこんな風になつて了つたといふことは、母の一生の致命傷なんですもの……。だつて、家風といふものゝこれまでの不滿とか、父の平

生の行爲に對する苦しみとか、さういふものを母は皆私に對する希望の中にくつつけて置いたんですからねえ――。その苦しさやらさびしさやらを私で恢復しやうとしてゐたんですからねえ――。だから母のことを考へるとたまらなくなるんですの』といふやうに。

四二

話してゐる中に、またひとつ疑ひを挾まずにはゐられないやうなことが雪子の口から洩れた。さうぢやないかといふやうな感じがした。

それは他でもなかつた。政子のことだつた。幸子はその人にはぢかに逢つたことはなかつたけれども、間接に雪子から聞いていろいろなことを知つてゐた。木村とも關係があつたかなかつたかはそれはつきりしてゐなかつたけれども、それがために雪子は一層わるものゝやうに言はれて――從妹の戀を横から來てひよいとさらつて行つたやうに言はれて、新聞にもそれがちよいとにほはせて書いてあつたのを記憶してゐる。しかし幸子は別にそれに觸れて見るといふ氣でもなかつた。たゞこの間ある雜誌でその記事を見て何となしに、『政子さんはもうおかたづきになつたんですね？』と輕い調子で訊いた。

『え……』

雪子の返事は何だか煮え切らなかつた。

『何でもフランス語の先生ださうですね……』

『え……』雪子は成るたけそれに觸つて貰ひたくないといふやうだつたが、やがて聲を低くして、『やつぱりうまく行かないんですよ……。歸つてゐるんですよ』

『まア』

『……』何か口まで出かゝつたのを雪子は急に引込めて了つた。

しかし此處まで入つて來た以上、そのまゝであとをきかずにその話をやめて了ふのはかへつて變だつた。

『さうですか。私はまた幸福でいらつしやるんだとばかり思つてゐました。いつおもどりになつたんですの？』

『ついまだこの間ですのよ……』間を置いて、『あの人もあのことでいろいろ、ごたごたして了ひましてね……。私ばかりうらまれてゐるんですの』

『やつぱりあのことにいくらかつづいてゐるんですか？』

『さういふわけでもないんですけども、今度もどつて來たのは何ういふわけだか本當には知らないんですけども……。皆なあの人の幸福を私が壞して了つたやうに、伯母をはじめ親類の人だちが皆な思つてゐるんで困つてゐるんですの……。私ばかりわるものにされてゐるんですもの……』

『まアねえ』

『だつてさういふことは何うも爲方がありませんものねえ。それはいくらか木村もわるかつたかも知れないけども……。今でもまだそんなことを言つてゐるんですからね……』

『さうですか？　まだそんな風に思はれてゐるんですか？』かうは言つたものの、幸子の心はもつと先きの先まで入つて行かずにはゐなかつた。かの女はその底にまだいろいろな巴渦が人知らず蟠まつてゐるのを想像した。

『だからきつと私たちの生活は、從妹や伯母などにはひどく呪はれてゐるんでせう……。木村なんかだつて、正しい人間のやうには思はれてゐないんですもの……』

『それだけやつぱりそれがつゞいてゐるんですのね？』

『間接にはね……』

それ以上幸子には入つて行くことは出來なかつた。しかしいろいろなことがそこから覗かれるやうな氣はした。實際のことは、世間で思つてゐるやうなものでなしに——さう簡單にきまりがついて了つてゐるものではなしに、それからそれへと底深く續いて行つてゐるらしかつた。木村と政子との間のこと、そこにも今だに一つの渦が卷いてゐること、或は今でも政子の心が木村にあるのではないかといふこと、それでその緣にも落附けなかつたのではないかといふこと、さうしたことが筧との今の戀愛生活

とひとつになつて混雜とかの女の頭を通つて行つた。

四三

もうひとつ幸子の心を動かしたものは、それは他でもなかつた。雪子の父親のことだつた。父親は今でも女には目がなくつて、金のあるにまかせて、いろいろなことをしてゐるといふのであつた。それも藝者とか何とかなら、金でゞきるから、一人や二人あつても何も面倒なことは起らないけれども、さういふ人だちは商賣といふ型にはまつてゐて面白くないと見えて、兎角家にゐる女中に手をつけたがるのが困るといふのだつた。此間も相手にした女に、かけに惡いやつがついてゐて、新聞に出すとか何とか脅かされて、かなりに大きな金を取られたといふのだつた。

『母が此間もそれで來ましてね。お父さんももう七十にも近いのだから、あのわるい癖だけはよして下さると好いんだけれど……つて泣いてゐましたよ。實際、それを考へると、母が氣の毒でしてね。私にのみ希望をかけてゐた心持がよくわかるんですの……。それも弟がもう少し大きくなつてゐると好いんですけども、まだ中學に入つたばかりでせう。その間に妹がゐても、あれは母のお中をいためた子ぢやないんですから、そんなに可愛くないんですの……。實際、母のことを考へると、女ッていふものは可哀相なもんだと思ひますのね。此頃では人生に對する母の考へ方なぞもずつと變つて了ひました。だつて

もう子供にも重きを置かない、弟だッて、今でこそ自由になるけれども、もう二三年もしたら、何うなるかわからない……。一體、親が子供にのぞみをかけすぎるからいけないのだ。もう私も長い間苦勞して、いろいろなものを捨てゝ、捨てゝ來たけれども、今になつて子供までかうして捨てゝ來なければならないと思ふと悲しいッて泣くんですの……。そしてもうこれからは爲方がないから、自分ひとりのことをする……。父でも誰でも勝手に思つたまゝのことをするが好い。私は知らない。私は知らない。私は私でひとりで死ぬしたくをしなくつてはならないつてかう言ふんですの。それを思ふと、私、母が可哀相になつて爲方がないんですの……』それも雪子は曾ては、日本の家庭といふものがわるいからそれでさういふ風になつて行くのだと思つてゐたのであつたが、此頃ではもはやさうばかりは言つてゐられないといふのだつた。その悲劇の根本は、さうした制度とか習慣とかいふものよりも、もつと底の底の深い所に横たはつてゐるらしいと言ふのだつた。『それは私なんかまだ二三年しか生活をやつて來てゐないんですから、大きなことは言へませんけどもね……。考へてゐたことは皆な外れて行つて了ひましたね。ひとつとして思ふやうになつて行つたことなんかありませんね。男といふものだつてさうですね。女が思つてゐたやうなものぢやないんですものね……。男は男ですもの……。二人して理想的に暮すんだなんて言ふけれども、いざとなれば離れ離れのものなんですもの……。男はかけでいくらでも勝手なことが出來ますからね。いくら勝手をして、自分の妻を辱かしめるやうなことをしてもそれで通つて行

くんですからね……』それは雪子は曾て舊式として、自分だちだけはもつと本當の二人の生活をすると言つたのだけれど、いざ入つて來て見てはとてもそんなことは望めないといふのだつた。『だつて、父母のことなんか考へてごらんなさい。あゝまでなつて、ひとつの家の中に一緒にゐなくつても好ささうなものだと思ふのに、やつぱりあゝして顏を見合せてゐるんですからね……。仇敵よりも憎い男と時には笑つて話をしたりなんかしてゐるんですからね……。本當にわからなくなつて了ふわ』

四四

『あとがお出來になるんですね？　おめでたいわ』

觸れないわけにも行かないので幸子がちよつとかういふと、

『おめでたいどころではないわ……。何うしてかう物事は皮肉なんだらうッて言つてゐるくらゐなんですもの……』

『でもね』

いろいろな意味をこめたといふやうにして幸子はにこ〳〵しながら言つた。

『女が子供を生ませらるゝ苦しみなんて、昔よく口にしたもんだつたわねえ……。しかしこれもやつぱり打突つて見なければ本當のことはわからないわねえ！』

『やつぱり轍の中からは一足だつて踏み出せないつていふことね？』

『まア、さう言つても好いかも知れないのね……』

幸子にしてはもつといろいろなことを雪子に期待してそして此處にやつて來たのであるが、その八分通りは裏切られて、あのやうに新しがつた人にも似合はしくないやうなものばかりをそこに見出さなければならなかつた。かの女は一種言ふに言はれないさびしさを感じた。出來るなら、自分の今の境涯も打明けたい。教へられるとまでは行かないまでにも、いろいろな暗示をも得たい。ことに、同じ境涯にならないとも限らぬその身の今の戀愛狀態についての力强い共鳴をも得たい。かう思つてやつて來たのであつたが、とてもさうした氣分にはなり得なかつたことをさびしく心の中にくり返した。

いつまでゐても爲方がないので――子供が難かつたりして、單にそれだけの話をするのさへ何遍も何遍も中途で途切れたりするといふ風なので、たうとう思ひ切つて暇を告げることにした。

『まア、好いぢやありませんか？』

『でも、あまりおそくなつても叱られますから……』

『木村ももう歸つて來なくつてはならない筈なんですけどもね……』雪子はあたりを見廻すやうにして、『歸つて來たら、何かお構ひしやうと思つてゐたんですけど……。さう、折角來て下すつたのに、こんなところで、お茶も碌々上げられなくつて……。こりてお了ひでせう？』

『いゝえ……』

『ぢや、また來て下さいね……。こんなことばかりぢやないと思ひますから』

かう言つて、雪子はそこまでと言つて子供を伴れて出て來た。

停留場まで送つて行くといふのを強ひてことはつて、幸子は徐かにさびしい街道を歩いて行つた。かの女は輕い失望と佗しさを感じた。『やつぱり父と母とはさういふものなのかしら？　ぴつたり一緒になつて樂しく暮してゐるやうに見えても、底ではさうでないものなのかしら、いろいろなことがあるものなのかしら？　さう言へばたしかにさういふところがある。たしかに父にはお弓の他にまだ別に女がある……ハイカラな手紙を書く女がある。思ひ切つて新しい文句を書いてよこす女がある。……さう春子――。それはそんなに若い人とは思へないけども、たしかに春子――。母はまだ知らないのかしら？それとも、知つてゐても、子供の見せしめにならないと思つて、知らぬ顔をしてゐたのかしら？』こんなことを頭の中にくり返してかなりに此方までぼんやりと歩いて來たが、ふと氣がついて振返ると、まだその通の角のところに子供を伴れて雪子がさびしさうに立つて此方を見てゐるのを目にした。幸子は丁寧に頭を下げた。雪子もそれをかへした。野では電車の通る響が林に響きわたるやうにきこえた。

ある時筧は幸子に言つた。

『それで、結局何うなるのかしら？』

『それは私にもわからない……』

『……？』

筧はぢつと考へ込むやうにして、『しかしフロホウサルをしたところで、とてもうまく行きさうにもないな……』

『しかしこのまゝいつまでもかうしてゐるツていふわけにも行かないぢやないの？』

『それもさうだけど……』

幸子の兩親とも滿更知らぬ間柄でもないだけに、うまく行けば二重に好いけれども、まづく行つた曉には一層わるくならなければならなかつた。

しかしその話はいつも同じやうな形式で始められて、また同じやうな形式で終るのが常だつた。『誰か好い人がないかしら？』『Aさんに頼まうかしら？』『Aさんなら好いと思ふけども、さうかと言つてめつたに話せないわ……』さうした言葉が同じやうに繰返されるだけであとはまた深い沈默に落ちて了ふのだつた。

かれ等のゐる一室からは大きな社のある森が見えて、そこには杉の黑い色の中に、新しい若い綠が毬

でも重ねられたやうに層を成してゐるのが眼に入つた。何うかすると、その梢の上に鳶などが舞うてゐる。演習の兵隊が斥候任務に服してでもゐるかのやうに、その森の縁についてゐる赤ちやけた路を身を縮こめて通つて行くのが見える。そしてその此方にはずつと先の方にある水車の落尻の水が曲りくねつて流れて來てゐて、それがところどころにさゝやかな水の音を立てゝゐたりなどした。『蛙の音がのんきね。夜は好いでせう！』つい此間も幸子はそこでこんなことを言つた。幸子は去年のもう年の暮に近い頃に、半分は好奇心で寛にそこに誘はれて來たことを今でもをりをり頭に浮べた。かの女は別にその時のことを後悔してゐるのでも何でもなかつたけれども、しかもあの時を境にして、もはやひとりの自由な體ではなくなつて了つたことを、きはめて自然ではあるがしかも何處か不思議なやうな心持でぢつと見守つた。かの女は省線の停留場を下りて、小さな巴渦を卷いてゐるやうな街を通つて、汽車のレイルを越して、それから草原のやうになつてゐるところをずつと此方へと入つて來るのだつた。何うにもならない力に引摺られでもするかのやうに——。寛のゐる素人下宿では、何事にも無關心でありさうな五十先の眼のしよぼしよぼした上さんがいつも出て來た。

『あの上さん、何かいふ？』

ある時幸子は訊いて見た。

『何うして？』

『だつて、何だか變な氣がするんですもの……。氣味がわるいやうな……。あなたはさうは思はない？』

『何でもないんだよ。さア、さういへば、いくらか低能かも知れないな……』

『あれでも何か話しなんかすることがあるの？』

『いつだつてあれだけよ。何とも思つてゐやしませんよ。さういふことはちつとも心配がない——』

それでもその二階の一室には、クッションの安樂椅子が寢臺代りに置いてあつて、そこで毛布をかけたまゝ夜寢て了ふことなどがをり〳〵あるなどと寛は言つた。壁にはかれの友だちだといふ學校上りの青年洋畫家の油繪が二三面かゝつてゐて、中でも丘の側の褐色の路を描いた畫がいつもかの女の前に幅をしてかゝつてゐた。彼等はいつもそこで二三時間話した。

四六

『私としては母に縋るより他に爲方がないのね……』

『それはさうだらうな』

『母さへ承知して呉れゝば、少しぐらゐ何うかなつても大丈夫だと思ふけども……それが何うかしらと思ふのよ』

『むづかしいかな？』

『でも、何うなるかわからないわ。打突かつて見なくては……？　存外案じたほどではないかも知れないけど――』

『何かそんな話でも出るやうなことはない？』

『あなたの話？』

『いや、僕のことぢやなく、他に結婚の話やなんか……』

『別にきまつた話なんかないけども、もうそろそろ支度しなくつてはなんて思つてゐるらしいわね。この間も、母が怒つたやうなことを茶の間で父に言つてゐるから、何うしたのかと思つたら、嫁入ざかりの娘を持つてゐながら、そんなことちつとも構はないでそんな眞似ばかりしてゐてはこまるぢやありませんかなんて言つてゐましたよ』

『そら、僕がこの間きいて來た話だらう？　春子ッていふ……』

『あの人のことだか何うだかわからないけども、そんなことを言つてゐましたよ。父も隨分らしいのね』

『それはその點でも、かなり評判になつてゐるらしいな！』

その身のこともあるが、父親のことも氣になるといふ風で、

『一體、何ういふことなの？』

『僕もよく知つてゐるわけぢやないんだけどもね……。何でも春子ッていふ人を知つてゐるものがあつてね、そのためだか何だか知らないけども結局離緣になるとか何とか言ふ話なんだよ。そしてその女の人の鼻息のつよいのは、あなたのおとうさんがゐるからだつていふ話なんですよ』

『本當かしら？』

『尠くともあなたのファザアがその女の人と一緒に銀ぶらなどをやつてゐることは事實ね……』

『人ちがひぢやない？』

『それはたしからしい……』

『だつて、父さんは內所ではするかも知れないけども、銀座なんか一緒に歩いたなんてうそらしいわね。よく父さんは人違ひされるんですもの……。ちよつと肥つてゐたり何かして、あゝいふ感じの人がよくあるので、それで間違えられたのぢやなくつて？　此間も、馬鹿にしてゐるなんて笑つてゐましたよ。何でも本牧か何かの方にさういふところがあるさうですね。そこで父がモダンガール見たいなものと一緒に歩いてゐたのを見たものがあつたつて言ふんですつて。弱つちやうな、この頃本牧なんかに行つたことなんかありやしない……。肥つてさへゐるとすぐさう思つて了うんだなんて言つてゐましたよ。それに、名をかたる人もあるかも知れないつて言つてゐたわ』

『それは知らんが、銀座は人ちがひぢやないらしいね？』

『さうかしら？』

『兎に角、さういふことはある一部の人たちの中である程度評判になつてゐるらしいね？』

『でも、フアザアはそんなに評判ほどぢやないのよ。世間で誤解してゐるやうなところがあると思ふわ』

『……』

筧は何か言はうとして止して了つた。

四七

『まア、そんなことは何うでも好いとして、もしうまく行かなかつた時でも、駄目になるやうなことはないんですね？』

『……』

『僕ひとりが放り出されるやうなことはないでせうね？　それはたしかでせうね？』

筧は眼に笑ひを見せながら半ば戯談のやうにして言つた。

『大丈夫よ……』幸子はそれを長く引つ張るやうにして言つて笑つて、『でも成るたけうまく行くやう

にしたいのね。母には叛きたくないと思ひますからね……』

『それはさうさ……。好んで打壞すものもないんだけども、何うもうまく行かないやうな場合が多いやうだね。やつぱり親と子との時代の相違なんていふこともあるらしいね……。だつて何處へ行つたつて、さういふ話しが澤山あるぢやないか……』

『本當ね』

『だから、しつかりしてゐて呉れなくつては困るッていふんです』

『私は何うだか知らないことよ……』

かう言つてかれ等はいきなり兩方から口を寄せた。

ある時は幸子が言つた。『私、あのくらゐびつくりしたことはなかつた……。だつて、私、ついそこを歩いて行くと、後から誰かバタバタと傍に寄つて來るものがあるから、誰かと思つたら、母ぢやないの……。私、その時ぐらゐ胸がドキドキしたことはないわ。もうこれはてつきり知れたと思つたわ。私、きつと眞赤な顏になつたでせうよ。爲方がないから、知れたら知れた時と思つて度胸をきめてゐたのよ……。ところが好い鹽梅に母はのんきなのよ。何處に行つたの？　Kさんの許？　なんて言つてゐるのよ……。それでまアほつと胸をなで下したけども、あんなにびつくりしたことはない』かう言つてちよつと間を置いて、『でもいやなものね、母を欺いてゐると思ふと、何とも言はれないやうな氣がした

わ。一刻も早く話して了ふ方が好くはないかと思つたわ』

（でも、もう少し待つてゐて貰ふ方が好いな。さうならさうでいけなかつた時の支度をして置かなくてはならないから……）筧はかうきつぱりとは言はなかつたけれども、それでもいつもそれに近いところまで行つてかれ等は突きあたるのだつた。かれ等は寒い風の吹く時分から、春が來て垣の梅が咲いて、鶯が啼いて、花から若葉になつて行つても、それでもその話はふたりの胸に深く深く藏されてあるばかりだつた。幸子はいつも生花を習ひに行くと言つては、居間の隅に置かれてある鏡臺に帶のうしろの格好などを映しながら母に勸づかれはしないかと絶えず胸を痛めながら出て來た。

二階にゐる筧にも、幸子がやつて來るのはよくわかつた。フエルトをいくらか引摺り加減にぺたぺたと音を立てゝ歩いて來て、がらりと心持音高く格子が明いて、上さんが出て行つたと思ふと、その時でなければ出ないやうな一種異樣の笑ひがすぐ下からきこえて來た。と、筧は何んなにさしせまつた原稿を書いてゐる時でも、また何んなに面白いものに讀み耽つてゐるときでも、すつと机の傍から立つて、安樂椅子の傍を通つて、勾配の急な、古ぼけた階段の危くないやうにその三方を取卷いた欄干に身を半ば凭らせるやうにして、何のことはない、深い穴でも覗くやうに、そこから一段々々はしごをのぼつて來る女の白い顏と何方かと言へば派手づくりな着物とを覗いた。

四八

『昨日來ませんでしたね？』

かう言つてそこに上つて來たばかりの幸子を引寄せて強いて口を當てやうとした。

『だつてわかりさうでしやうがないんですもの？』

『……』

何も言はずに筧の寄せて來る唇を幸子は拒むことは出來なかつた。

ふたりは暫くそのまゝにしてゐた。渴したものが思ふさま水を飲んで了ふまではそこから口を離すことが出來ないといふやうに。

暫くした後にはかれ等はこつちの机の方へと來てゐた。

『わかりさうツて何うしたの？』

『別に何うツていふこともないんですけどもね。變なのよ、此頃は――？　ひよつとかすると、こつちがさう思つてゐるせいかも知れないけども、思ひ當るやうなことばかり言ふのよ』

『何んなこと？』

『何んなことツて？　お前が總領だからしつかりして貰はなくちや困るの、父さんがあんな風だから

お前ばかりが頼りだのツて言ふのよ。それはこれまでにもいつも言つたことなんだけれども、わるく身に響いてきかれるやうな氣がするのよ。若い娘がそのために一生をあやまるなんて、よく口癖のやうに言ふのよ……。それに、この頃、少し出て來やうが多いのよ』

『それで昨日も待ちぼけを喰つたわけなんだね』

『昨日はさうぢやないの。神奈川の從妹が來たの……。私、困つたと思つたけれど、遠くから來たのに、まさか用があるつて置いて出て來るわけには行かなかつたんですもの……。私だつて、あなたが待つてゐらつしやるだらうと思つて、氣が氣ぢやなかつたんですけれどね？』

『その從妹ッて？　あの常子ッていふ人ぢやないの？』

『あれとは丸で違ふの……。あの人は父さんの方の從姉だけども、昨日來たのは母の方の從妹？』

『もう歸つたの？』

『え、さつき歸つたわ。私、一緒に三越まで行つて見るつて出て來たのよ。その歸りなのよ。もつとあちこち遊んで行かうつていふのを、用があるからつて、無理矢理別れて來ちやつたのよ……』

『あゝ、それでわかつた。いやに今日はしやれてゐると思つた……』いかにも好ましいといふやうに、いつもと違つて、際立つて美しく見えるといふやうに、じつと幸子の顔を筧は見つめた。否、それぱかりでは滿足してゐることが出來ないといふやうに、またその身を寄せて來た。

『何うかしなければ本當にダメね』

『その中何うかするサ……いつまでこんな不十分な狀態でラバアがゐられるもんですか？　昨日一日待ちぼけを食つただけでも、勉强も何もしないで、いろいろと不吉なことばかり考へてゐて、物も碌々咽喉へ通らないんだもの……。とても長くはこんなことをしてゐられやしないよ……。昨日なんか、もし、ひよつとかして知れるか何うかして、それで來られなくなつたんぢやないかな。さうしたら、何うしたら好いだらう。出かけて行つたつてダメだし、そつちだつて出て來ることは出來ないし、それこそ何うしたら好いだらうなんて、際限なく考へ込んぢやつたね……。一日で體がすつかり痩せたやうな氣がした……』

『大丈夫よ』

四九

ある日幸子は言つた。

『當分、私、來ない方が好くはないかと思ふの？』

『何うして？』

『だつて、母のことを考へると、氣の毒になつて了ふんですもの』

筧はだまつてゐたが、暫くしてから、『だからマザアの心持を十分尊重すれば好いわけぢやないか…。マザアの力になつてあげれば好い……』

『だから、私、母の顔を見てゐて心が咎めて咎めてしやうがないことがあるんですの……。欺くといふわけぢやないんだけども、ひとり手にさうなつて行くんですもの……。だから裁縫なんかしてひとりで坐つてゐると、いつまでもかうして母を欺いてゐることは出來ないやうな氣がするの……。それに、母だつて注意してゐますからね……。もういくらか變だぐらゐに思つてゐはしないかと思ふの……』

『何か言つた……?』

『何うしてさうS子さんの家にばかり行くのなんて始終言つてゐるんですもの……。私、もう餘程言つて了はうかと思つたことがあるのよ』

『でも、まア、もう少しそつとして置いてくれなくちや——その内好い機會が出來て來るから……』

『好い機會、好い機會ッて、もう隨分待つたわね』

『だつて、うまく行けば好いけれど、場合によると、打壞しになつて了ふんだからね……。それでも好い?』

『好くはないけども……』

『まア、もう少し考へさせて置いておくれ!』

『まだ待つの……』

『だつて、そのために逢はれなくなつたりするやうなことはよくあることだからね』

『……』

さう言はれれば、幸子にしてもそれを强ゐるわけには行かないのだつた。幸子のことには母親が着物を買つたり指環をつくつて呉れたり今までになくその身の機嫌を取るやらしたりするさまがそれとなく映つて見えた。さうかと思ふと、『またお出かけ? それはたまには好いけれどね……あんまりお邪魔をすると、向さまだつて、しまひにはイヤになるからね』それとは知らずにS子の家に行くものとばかり思つて、鏡に帶を映してゐるその後の形をあまり下品でないやうになどと直して呉れたりしたことを思ひ起した。また向うから丘を越して此方へ出て來る路で、ちよつと林の疎らに切り殘されたところがあるが、そこでひよつくり昔の女學校時代の友達に逢つたりしたことを思ひ起した。初めは筧がさういふ風に話を進めることをしないのを——いや敢て進めないやうにするわけではないであらうが、その日その日とのばして行くやうな形があるのをいくらか疑つて見たやうな形もあつたけれども、今ではそれはさうではなくてひとり手にお互にさういふ風になつて行くのであるといふことが幸子にもいくらか飲み込めないではなかつた。幸子にしても、内所にして置くといふことの上に一種の興味を感じないでもなかつた。たゞ母親の眼に到るところでぶつかることがつらかつた。つゞいてかういふ不定の狀態にいつま

でもゐるといふことがつらかつた。

五〇

父親が歸つて來ないやうなことは、これまでにも度々あるので、朝起きた時それとわかつても、幸子の心は別にそれがために亂されるといふやうなことはなかつた。たゞし何處かでそつと母親の顏が覗かれるやうな氣はした。默つて不機嫌でゐるのも、勝手元には出ても女中とは口もきかずに自分でやることだけをせつせとしてゐるのも、弟や妹の學校へ行く辨當を拵へるにも、そこらにあり合はせたもので間に合はせてすまして了ふのも皆なそのためであるのがこの頃ではいくらかわかるやうな氣がした。從つてさういふ朝は食事も極めて靜かであつた。弟と妹とが何か口爭ひなどをすることがあつても、母親は仲裁にも入らずに、だまつて肥つた白い顏をあたりの朝の空氣に際立たせてゐた。さうかと言つて別にその心の中の悶えをおもてにあらはすといふでもなく、其日しなければならない裁縫の小ぎれを、幸子のために何彼と搜して呉れたりなどした。『父さん、何うしたんでせうね……』やつぱり幸子にも心配でないことはないので、さうした言葉が口まで出かゝつて來るのだけれども、曾て一度それを言つて、『何うだつて好いぢやないか。娘の内はまだそんなことをきくものぢやないよ。父さんだつて、いろいろ御用があるんだからね……。おそくなればとまつて來なければならないやうなこともあるんだよ』と

張詰めたまじめな調子で叱られたことがあるので、それからは幸子はいつもそれを押へた。

幸子は茶を飲んで、髪を直してそれから大抵は裁縫に向つたが、その間かの女は父母のことを考へたり、雪子の生活を考へたり、また雪子の父母のことを自分の父母に比べて考へたりした。否、いつもそれからつゞいて篤と自分のことにその考へが落ちて行くのだつた。その時分にはもはや午前の日影が庭の樹の影をかなりに小さくして、近所のつとめ人が背廣と中折といふ恰好で向うを通つて出かけて行くのが見えた。かの女は針を運んではやめ、やめてはまた運んだ。

もはやその時分には學校に行くものは行つて了つて、家の内は靜かだつた。と、風呂場の方で水を使ふ氣勢がきこえて、つゞいて、ごしごしとよごれた物を洗濯板に押あてゝゐる音がした。これはいつも は女中がやるのであるが——奥さんの手まで煩はすことはなくて好いのであるが、しかも父親の歸つて來ない朝に限つて、母親はきまつてそこへと下りて行つて、襷をかけて、『奥さん、私が致しますから』と女中がいふのにも頓着せず、さつさと水を水道から出してその汚れたものの洗濯へと取りかゝるのだつた。そしてそれはさうでもしなければその朝の苦しみをまぎらせることが出來ないものか何かのやうに見えた。また『他は他で何うでもするが好い。そんなことまで氣にはしてはゐられない……。自分は自分でやらなければならないことをしさへすればそれで好い……』とでも言つてゐるやうに見えた。そしてその洗つたものを、女中の手も借りずに神經性の顏の表情をあたりに際立たせながら物干の棹へと

かけつらねるのだつた。そしてそれがすんで了ふと、今度は瓦斯で湯を沸して、それを金盥にあけて、新しい手拭ひを六つに折つて浸して、長い鏡臺の前に新聞紙を敷いてそれを置いて、寒い冬の日でもはだぬぎになつて、その眞白な肌をあたりに見せながら、徐にお化粧に取懸るのだつた。

五一

父親が三日も家を明けてやつと戻つて來た時にも、母親は別に苦情らしい苦情も言はずに、機嫌よくその着物を疊んだり、留守中のことを何彼と話したりしてゐるのを幸子は見た。しかし全く嵐がないわけでもなかつた。茶の間の方から、『それは私は構はないけども、それでは家庭といふものが出來て行きませんからね』といふまじめな母親の聲がきこえて來た。

『お弓さんが昨日來ましたよ』

つゞけて母親は笑ひもせずにこんなことを言つた。そのお弓は幸子もよく知つてゐた。幼い頃から知つてゐるばかりではなく、時には一緒に芝居などに伴れて行つて貰つたこともあるので、そのやさしい靜かな聲にも、その表情に富んだ粹な眼にも幸子はよく熟してゐた。勿論さう度々やつて來るのではなかつた。盆だとか正月だとかまたは花の咲く時分とかにやつて來た。此間やつて來たのは別に用事があるのでもなく、しばらく小鹿野が姿を見せないので、内々それをさぐりにやつて來たのらしかつた。母親

はそのお弓の歸つたあとで、『父さん、何處へ行つてゐるのかしら？　あそこにも行つてゐないんだとサ』といくらか心配さうに幸子に言つた。お弓は幸子にと言つて綺麗な女持の財布などを持つて來て呉れた。居間で裁縫してゐる幸子の耳にも、ある時はこんなことがきこえて來た。

『まア、好いから……。お前なんかの關係したことぢやないんだよ。お前は家庭を守つてさへすれば好いんだよ……。男は女とは違ふからな――』

『それは好いですけどもね。何か事でも起ると大變ですからね。それが心配なんですよ……』

『大丈夫だよ』

『あの人、何うしてるんです？　この頃ちつとも來ませんね？』

父親が何か言つたけれども、それは幸子のゐる方まではきこえて來なかつた。

『もう木川田さんと一緒にゐないツていふ話ですね？』

『そんなこと知らんよ』

『……』

それについて母親も何か言つたが、それもきこえて來なかつた。

『まア、好い加減な想像はよす方が好いな。世間の人はいろいろなことを言ふからな……。そんなことを一々取上げてゐた日には、とてもこの世の中はわたつて行かれないからな……』

『何が何だかわかりやしない……』

こんなことを言つてゐたが、その中に、低い壓しつけられるやうな母親の聲があたりにくどくどときこえて、いつかそれがすゝり泣くやうな嗚咽に變つて行つた。それと知ると、幸子の體は急に一種の波動を受けた。その母親の嗚咽はそのまゝかの女のやつてゐることにつゞいてゐるやうな氣がした。そしてもしそれが知れた時には、いや應なしにあの悲しげな、身も滅ぼされて行くやうな、自分もともにすすりあげずにはゐられないやうなハメに墜ちなければならないのであつた。幸子は母親の心のさびしさを十分に知りぬいてゐるだけに、一層それが身に響いた。

五二

父母の狀態がもう少し圓滿であつたならば、幸子はその身の秘密をも比較的容易に母親に打明けることが出來たであらうが、それを耳にした時の母親の失望や悲哀が氣になつて、一方では筧にそのフロホオザルを一刻も早くして貰ふことを逼りながら、一方では自分から母親にぢかに打明けて話す氣には何うしてもなれなかつたのであつた。從つてその結果は互にその心の底にひとつの線の連絡を續けながら、何うにもならずにそのまゝ無事な月日を續けて行くこととなつた。

無論幸子は父のやつてゐること――筧から話されたやうなこと、(あなたのおとうさんだつて、そんな

に嚴格にばかりしてゐる資格はない)と筧が思つてゐるやうなこと、そのことについて別に何うの彼うのと深く考へてゐるのではなかつた。もし本當だとしたら、母が氣の毒だくらゐにしか思つてゐなかつたのであつたが――とてもそれを責めるなどといふ氣にはなれなかつたのであつたが、しかもそれが微妙に二人の上にも響いて傳はつて來てゐるのを感ぜずにはゐられなかつた。

幸子の出かけて行く路と父親の出かけて行く路とが、少し先のところで一緒になつてゐるので、何うかすると、そこで一二度落合つたことなどもあつた。そこには汚い黑い溝が流れてゐて、草の兩側に生えた土橋を渡るまでは、郊外の新開町らしい店屋がずつと續いて並んでゐるやうなところだつた。

その橋の此方から幸子が行くと坂の上から父親が下りて來たり、また父親が此方から行くと、幸子が向うからもどつて來たりした。

『今、歸るの?』

『え……』

『お花の先生つていふのは、これからまだずつと向うの方?』

『え、まだずつと向うよ……』

『以前に、琴を習ひに行つたところよりも、もつと先かえ?』

『あれよりずつと先……』

父親にしても、幸子にしても、何となく心がそぐはないやうな調子で、この頃新たに出來た郊外電車の陸橋の下のところを並んで歩いて行つた。

父親はだしぬけに訊いた。

『あの山瀬の娘は何うしたえ？』

『別に……』幸子は輕く受けて、

『やつぱりあの向うにゐらつしやるんでせう？……』

『お前、この頃も行つたり來たりしてゐないかえ？』

『別に……』

幸子は言ひ淀んだ。

『もう、子供があるんだらう？』

『え……』

何かつゞけて言ひたいことが父親にはあるらしかつたが、そのままだまつてあまり人通のない通りを徐かに歩いて行つた。

突當つて曲つた。父親はまた訊いた。

『お前はあの山瀬の娘の從妹に當る人を知つてゐるかえ？』

『政子さんといふんでせう？』

『さうさう……』

『逢つたことはないけども、さういふ人のゐる事は知つてゐるわ』

『何でも、このごろ一さわぎ持上がつてゐるんださうだな？』

『その政子さんと――』

『さういふ話をあるところで聞いた……。男がわりいんだつてな？』

『さうですかね』幸子は別に深く立入つてきくわけにも行かなかつた。

五三

『何でもえらいことが起つてゐるツて言ふ話だね』

父親はさつきあるところで聞いたばかりなので、興味があるといふ形で猶そのことを話しつゞけた。

『えらいことツて何う？　別に大したことぢやないんでせう？　あの雪子さんの今の旦那とその政子さんとのことでせう？』

『ところが、その政子といふ人とその男とが身をかくして了つたんだつて……』

『まア、ほんと？』

幸子は思はず聲を立てた。

『何でもその前にもいろ〳〵なことがあつたらしいんだ……。その政子といふ人がつい此間、お嫁に行つたんださうだけども、落附いてゐられなくつて出て來たんださうだが……』

『さうよ、それは知つてるわ』

『やつぱりいろんなことがあつたんださうだ……』

『まア、さうなの。それぢや雪子さん、隨分心配してるでせうね？　去年逢つた時にもお中が大きかつたんですから……』

『何でも、その男がわるなんだッて言つてゐたよ。のらくらして、山瀨の方から金なんか貢がれてゐたんだつて言ふからね』

『その話、聞いたわ』幸子は二三歩歩きながら、『それで、その話いつのことなの？』

『何でも姿をかくしたのは、今から二月も前ださうだけども、今だに何處に行つてゐるかわからないので困つてゐるんださうだ……。まさかに何うの彼うのつて言ふこともないだらうけども、放つて置くわけにも行かないし、さうかと言つてまた新聞記者にでも知れて書かれると困るしつて……』

『さうね』

『お前はその男の人に逢つたことはあるの？』父親の敏感さが電氣のやうに幸子にも傳つて來た。

『去年行つた時には、旦那さんはゐなかつたから逢はなかつたけども、ずつと前には一二度逢つたことはあるわ』

『それはまだお前が學校に行つてゐた時分だね？』

『さう……』

小鹿野はその時のことにくつつけて娘の身の周圍をぢつと見詰めるやうな態度になつた。親と子とはまただまつて歩いた。小鹿野は春子と昨日あるところで逢つてそれからお弓の家で一夜とまつて來たことを考へ、幸子は幸子で、甘い男のくちづけがいまだにその唇の上に燃えてゐるやうなのを感じてゐた。否、それからつゞいて雪子はどんなに困つてゐるだらうといふことを一方で考へると共に、一方では何も彼も皆な思つたこととは別に、別になつて行くものだといふことを感慨深くくり返した。（自分のことだつて、何うなつて行くかわかりやしない……。それこそ一寸先は闇だ。だつて雪子さんの身の上にすら、そんなことが起つて來るんだもの……。それにしても、あの木村ッていふ人は本當にそんな人なのかしら？　それにはさうなるわけがあるんだらうと思ふけども……。それとも男ッていふものは、さういふものなのかしら？　二人も子供が出來てゐながら、そんなことが出來るもんかしら？）そんなことを考へながらかの女は徐かに歩を運んだ。

垣根に添つたやうなところが暫しつゞいて、それから貸家札の斜めに張つてある二階家の傍などを通

つて行くやうにその路はなつてゐた。雪子の母親のことなどがひよつこり胸に浮んで來たりした。

ずつと通りの方まで來てもかれ等親子はそれ以上言葉を交さなかつた。やがてその家のところへと來た。門をあけて入つて行く父親のあとから幸子が續いた。

五四

雪子のことが心配になるので幸子は手紙を出さうとしたけれども、自分のことにかまけてそれもせずに、その日その日が經つて行つた。庭の綠樹に雨がザンザン降つて、とても出て行けないので――出て行く口實が出來ないので、約束した日を佗しく裁縫に向つて日暮まで坐つてゐたりなどした。時には母親との感情がわるくもつれて、兩方で腹の中でいろいろなことを思ひながら、ふつつり口もきかずに一日暮して了ふことなどもあつた。父親が歸つて來ないやうな夜が幾夜か續いた。

（まア、昨夜も歸つて來ない……）幸子は朝起きて一番先に先づかう吐胸をつくのが例だつた。しかしかの女はそれを口に出しては言はなかつた。口に出せばそれ以上に母親を苦しめることをかの女はよく知つてゐた。

時にはかの女はかうした壓しつけられたやうな空氣の中にゐる身のつらさをひし〳〵と感じた。また時には巢立すべく已に十分に大きくなつた鳥がいつまでもそこにうづくまつてゐなければならない苦し

さを感じた。出來ることなら早く青空に向つて飛びたいと願つた。

『一體、今の娘はお轉婆すぎるから、さういふ間違ひが起るんだねえ……。そのための親なんだから、親は十分に子供のことを見てゐるんだから、そこを考へて貰うと、物事がすべて素直に運んで行くんだけども……。今の教育が間違つてゐるのかも知れないねえ……。私の大きくなる時分には、まだそんな風なのは澤山にはゐなかつたし、少しはゐたにしても、今のやうに幅ではやらなかつたけども……』

何かの時に母はひとり言のやうにこんなことを言つた。

裁縫にこてを當て茶の間の方へと行つた時には、母親はいかに思ひ屈したと言はぬばかりに、半ば喪心したやうにぐつたりとしてそこに坐つてゐたが、幸子の入つて來たのを見ると、ひよつくり顏を擧けて、

『何かわるいことがあるに違ひないよ……お前……』

『何うして？』

『それ、そこを御覽！』母親はいかにも一大事でも起つたやうにそこにある電氣の白い笠を指した。

『何うしたの？』

『よく御覽な……。その笠の下のところを……。すつかり優曇華が咲いちやつたから……』

『何れ？』

『そら、ずつと長く……』

『まア』

そんなこと迷信だと思つてゐるにはゐるけれども、そこに一すぢ――白く小さくそれもはつきりと三四寸ほど並んで出てゐるのを目にした時には、父親のことや自分のことがあつたりするので、幸子は思はず聲を立てずにはゐられなかつた。

『まだ梅雨つていふのでもないのに、こんなにはつきりとうどんげが咲くなんて、よつぽど何うかしてゐるに違ひないねえ！』

『まアねえ』

裁縫なんか放つたらかしたまゝ、幸子は笠を斜に持ちあげるやうにして、ぢつとそれに見入つてゐたが、『綺麗にはつきりとしてゐるわねえ……。いつ見附けたの？』

『今、此處に來て、何か變なものがくつついてゐると思つて、ひつくり返して見たのよ……。こんなに澤山うどんげが咲いてはねえ！』

『でも、あんまり御幣はかつがない方が好いわ！』

五五

幸子はまた傍に行つて、その電氣の笠を引くり返して見て、

『何うしてこんなに澤山出來たんでせうね……。優曇華ッて、ちよいちよい出來たのは見たことがあるけれども、こんなに綺麗に澤山に並んで出來たのはめづらしいわね』

『だから、たゞ事ではないつて言ふのよ……。この前にも、これが雨戸の戸袋の上のところに出來て、御幣を擔いでゐたら、おばアさんが死んだことがあるんだもの……』

『でも、母さん、あまり御幣を擔がない方が好いことよ……。こんなもの何でもないのよ。この間、二三日雨が降つたんでそれで出たのよ』

『だつて、お前、これの出た年に好いことつてないんだもの……。たしかにこれは何かわるいことがある前兆にちがひないんだよ』母親はその心の底をこまかに振返つて見るといふやうに、『此頃は父さんだッてよく家を明けるしね。生計のことなんかでも丸で放つたらかしてあるんだもの……』

『大丈夫よ』

さうは言つたものゝ、幸子もいくらかそれに引寄せられずにはゐられなかつた。

『凡てこの家なんか家庭といふものを成してゐないんだからね……』

『……』

幸子は何か言はうと思つたがよした。

『皆てんでばらばらなんだから。一家の主人だか何だかちつともわからないんだから。……もとはあんなぢやなかつたんだけどもね……』母親は考へ込むやうにして、『自分のことは何うしたつて犧牲にすることは出來ないつていふやうな人なんだから……。それがイヤなら、何うでもする方が好いつていふ人なんだから……』

『……』

『昨夜もこんなことを言ふのよ。いけなければよすばかりだ……。そんなことわけがないぢやないか。ちつとも大問題ぢやない……。一體家庭なんか拵へるからわるいんだ……。そんな無茶を言ふんだもの……。丸でお話にも何にもならないのよ。優曇華だつて咲くわけだと思つた……』

『でも、母さん……』

『母さんが來る時分にはあんなぢやなかつたんだけども、猫をかぶつておとなしぐしてゐたんだね』母はいつにも似合はず、平常の沈默をさらけ出すといふやうな調子で、『何うしてあんな風になつたかと思ふと……。やつぱり昔、此處に嫁いで來る時に見て貰つた易者の言つたことが當つてゐたんだねえ。……今はよくつてもあとが好くない……』

『母さん、あんまりそんなこと思はない方が好いわよ。父さんだつて、考へてやつてゐることなんだから……』

『うどんけが咲くやうになつてはねえ——』かう言つて母親は瓦斯に何かかけて置いたものを思ひ出しでもしたやうに、急に勝手の方へと立つて行つた。幸子は持つて來た裁縫をそこに展げて、こてをその縫目のところに當てたが、種々なことが頭に浮んで來て——一度不用意に、何方かと言へば成るやうになれと言つたくらゐな心持で入つて行つた路が、とても今では出ることも引戻して來ることも出來ないものになつて了つたことなどがはつきりと浮んで來て、身が深くそこに沈んで行くやうな氣がした。かれ等の前途にはとても快晴は望まれさうにも思はれなかつた。否、その優曇華の花でもわかるやうに恐ろしい低氣壓が、身も魂も流されて了ひはせぬかと思はれるやうな低氣壓がすぐそこまで逼つて來てゐるやうな氣がした。

五六

垣の薔薇が咲いたり散つたりして次第に梅雨の空の方へと近寄つて行つた。幸子が生花の師匠へと通ふ路には、いつものやうに頭をキザにわけたひとりものの床屋がかの女の通るのをわざとそこに出て來て見てゐたり、もう少し先に行つたところでは、髪を箒のやうにした上さんが大きな聲を立てて近所の子供を怒鳴りつけてゐたり、師匠の家では、疳性の女隱居がせつせと上り端の柱や、閾に雜巾をかけてゐたりして、表面には別に何の變つたこともなかつたけれども、しかもこの間に或る事が着々としてそ

の到着すべきところへと進行しつゝあるのを誰も知らなかつた。

娘のことなどは夢にも知らない小鹿野は、高臺の土手に面したやうな室で、春子とさし向ひに坐つて、萱や草の青く高く繁つてゐるのを眼にしながら、

『だつて、そんなこと構はない……。何うでも出來るわ……』

『でもね……』

小鹿野は首を傾げるやうにした。

『世間ではそれはいろんなことを言ふでせうけどもね……。それを氣にしては際限がありませんけどもね……』春子は始めからその事については多寡を括つてゐるといふ風で、『これも私の籍でも入つてゐるんだと厄介ですけどもね……？』

『さうさ、それがまだ、いくらかは好いのサ』

その傍にはウヰスキーの壜などが置かれてあつた。無論、それは春子が一時木川田から別れて東京へやつて來て構へた下宿の一室ではなかつた。その一室には今でもまだ本當に切れたとはいへない木川田がひよつくり入つて來たりするので、とてもそこでは逢ふことは出來ないので、それでこの誰れも知らない、親友も仲間も新聞記者も誰も知らないこの二階を借りたのであつた。電車を下りたところに橋があつて、角に大きな酒屋がある。それを通り越して向うに二三軒行くと、小さな道具屋がある。そこか

ら露地がずつと奥に入つて行つてゐる。その一番どんづまりの、容易に誰もさがすことの出來ないやうなその二階をかれ等は今から一月ほど前にその巣にしてゐるのであつた。

初めて來た時、

『あゝこれは好い……。こゝなら誰にもちよつとはわからない……。都會はこれだからいいな。かういふ旨い穴があるんだから』

『本當ね……』

『向うが崖になつてゐる形がいいぢゃないか。六疊に四疊半。これだつてお誂え向きだわ。西日が少し入るけれども、そのくらゐのことは我慢しなけりやねえ……』

『それはさうとも……』

こんなことを言つて二人はそこに高い大きい肩と低い痩ぎすな肩とをならべた。風が白く萱の葉裏を飜へして、背の高い雜草の花が夕暮近い空氣の中に模樣か何かのやうにボツボツと白く見えてゐた。下にはさう綺麗とは言へないけれども、水が靜かに小やかな音を立てゝ流れてゐた。

かれ等はそこでちよつとは誰にも知れない戀を樂しんだ。勿論知れないと言つても、全く世間に知られない二人の仲でもなかつたけれども、何處かで二人が一緒になつてゐるといふことはわかつてゐたけれども、しかしそれが何處で一緒になつてゐるか、何ういふ風に一緒になつてゐるかといふことが容易

に他には知れない中の樂しい出會！　その他にわからない巢を得たことをかれ等は喜んだ。

春子は小鹿野がそこを出てからお弓の家に泊りに行つたりすることのあるのを、ある程度まで知つてゐた。ある時かの女はわざとしらばくれて、

『お弓さん何うした？　此ごろ？』

『ちつとも知らんね？』

『さう……』皮肉な笑ひ方を春子はした。

五七

さうかと思ふと、小鹿野は春子の周圍を搜すといふやうに、

『原さんは此頃何うしたね？』

『まだ滿洲から歸つて來ないぢやありませんか？』

『さうかしら？』

小鹿野は見据えるやうに春子の方を見て、

『この間、歸つて來てゐるやうなことをちらつと聞いたがな……？』

『さう……』

（私、知らないわ……）と言つたやうなすました表情を春子はした。

暫く經つた。ピアノの音が左の方の青いカアテンのしてある窓から微に洩れて、それが靜かにかれ等の沈默の上で滑つて行つた。

『何處にも行くことは無い？』

小鹿野は氣輕に訊いた。

『私？』

『さうさ……』

『さうね　……。今んとこぢや別に行くところもないけども……』

『何處かに行かなけりやならないやうなことを此間言つてゐたぢやないか……』

『靜岡？　それはもう行かなくつても好くなつたのよ』

（電話が來れば、いつまた出かけるかわからないんだらう？）その時さうした言葉が小鹿野の口から出かゝつたが、曾てそれを言つて――さう近くまで押し寄せて行つて、却つて女に逆襲されたことがあつたのを思ひ出してそのまゝ口を噤んで了つた。それから先へはいくら押して行つたところで、あるひとつのひろい空虛を發見するだけで、何うにもならないことを小鹿野はよく知つてゐた。情街で生ひ立つたお弓ならば、手があれば手があるやうに、それに適した方法で何處までも入つて行くことは出來た

けれども、春子では型見たいなものがないだけにとてもさう奥まで深く狹く入つて行くことは出來なかつた。否、それが、その形が小鹿野の好奇心を誘つた。

『だつて、それは無理だわ……。戀愛は刹那のものよ。かうして二人でゐるだけで好いんぢやないの？　それだけが戀愛ですもの……。離れてゐる中は、やつぱりひとりひとりなんだもの、二つのものが歩いたり坐つたりしてゐるんですもの……。それはあなただつてさうぢやなくつて？』春子はいつもさうした調子で話した。『それはさうよ……。私だつて、にがい嫉妬の汁を飲まされたことはいくらもあるわ。しかし、そんなことにいつまでもこだわつてゐれば弱くなつて了ふばかりですもの……。私は何がきらひつて、弱くなるのが一番いやですからね。だからこれはいけないと思つたら、いつでも私引返して來るの。引返して來られないやうなところでも引返して來るの……。だつて好奇心を引いてゐる中だけが戀愛ぢやなくつて……。あなたとだつて、かうしてゐる間が面白いからかうしてゐるだけよ。私、將來なんか誓はないわ。それよりも戀愛といふものは、出來るまでが面白いのね……。あなたとのことだつてやつぱりさうね。始めてあなたの家へ行かうと思つて、菅沼さんに名刺を貰つた時から、さうした芽が出て、あなたにあの室で逢つた時には、もうすつかり此人を何うかせずには置かないッていふ氣になつたんですものね……。それはわかる？　ぢや何うして木川田に嫁ぐ氣になつたつて？　金のため？　ダメね、あなたは……。あなたはもつとわかつてゐると思つた……』春子は笑つて、『戀愛といふ

ものはだから不思議ね。さういふ風にお互ひに見透かされないところがあるので火花が散るのね。そこが面白いのね。あまりわかりすぎたところには戀愛はゐないわね……』

五八

今ではむしろ競爭を感じてゐる方ではなかつたけれども、それでも小鹿野はをりをり木川田に對してさぐりを入れることを忘れなかつた。

『先生此頃何うしたらう？』

『この間ちよつと銀座の通りで逢つたわ……』

『ひとりで……？』

『男の友だちと一緒に歩いてゐたわ。誰かしら、あの人？　私、何處かで一度ぐらゐ逢つた人だとも思ふんだけども、それとも雜誌の寫眞か何かで見たのかも知れない……』

『肥つた人？』

『そんなでもないわ。さうね。鬚の濃い人よ。立派な人よ……』

『文學者といふよりも、學校の先生見たいな風をしてゐる男ぢやない？』

『さう言へば、さうね』

『ぢや、K大學の英文科の先生をしてゐる恒川ッていふ男だよ……それで、此方は？　ひとり？』笑ひながら小鹿野は訊いた。

『無論さうよ』

『何うだかな？』言葉そのものとは反對な春子の顏の表情を見て、『あやしいもんだな。ひとりぢやなかつたんでせう？』

『ひとりですとも……。用があつてS堂の支配人に逢ひに行つた時ですもの……』

そのS堂の支配人といふ言葉が、その時一緒に伴があつたと言はれるよりも一層痛く小鹿野の體に響いたが、しかしそれをすぐ追究するわけには行かなかつたので、ぐつと飲み込んで置くやうにして、

『それで話をした？』

『向うぢや話がしたかつたんでせう。私の前に立塞がつて、何處かちよつとでも好いからつき合つてくれつて言ふんですもの……。その伴の人なんか投たらかして了つて……。でも、困るわねえ。風月にでも行かうなんて言つたけども、私、お腹が好いから、とても今日はおつき合は出來ないつて斷つたわ』

『それで？』

『いくら斷つてもいろいろのことを言つて、何うしても伴れて行かうッて言ふのよ。いやなことだわ。あんな知らない人と一緒に行つて何んの彼のとあとで言はれるのは眞平だわ……。私、構ふことはない、

ぐんぐん來ちやつた——』

『でも、君のアパアトには時々行くんぢやないのか？』

『さうね、一月に一度くらゐ來るかも知れない！』

春子は自分で自分の言葉を嘲るやうに言つた。

小鹿野にはその春子の周圍の不可解がまた氣になり出した。かれは男としては隨分多くのかぎ——複雜した女の心を或は縱に、横に、或はかぎの手に、またそのかぎの手を更に曲線に、直線にあけて行く多くのかぎでなら自由にあけることが出來ると自ら信じてゐて、何んな複雜な巴渦を卷いたやうな心でもその持つてゐる多くのかぎでなら自由にあけることが出來ると思つてゐた。しかし春子に對しては、その自信のかぎも半その用を成さなかつた。

曾て木川田とかの女と三人で海岸を歩いた時には（この女を飽きさせないくらゐのことなら自分にはわけなく出來る）と思つたことがあつたが、いざぶつつかつて見て、それが容易でないことを感じ、それからずつと引つゞいて、やつとのことでそのかくれた巢を拵へるところまでやつて來たことをくり返した。

五九

お弓の回顧的でクラシカルであるのに比べて、とても一緒にすることの出來ないやうな開放された美しさを小鹿野はそこに發見した。それはあのむらさきの紫陽花のやうな現代的な感じに近かつた。

『さう思ふわ。年を取るといふことは悲しいには悲しいけども、いろんなことがわかつて來て好いわ。つまり冗をしなくなるのね。若い時のやうに浪費をしないのね……。それに、異性の體のことだつて、よくわかつて來ますからね……』こんなことを言つて春子は笑つた。

體のわかつて來るといふことはお互に不思議なことだつた。心を開けると同じやうに、體にもやはりその細緻を極めた鍵を用ゆることが必要だつた。小鹿野はお弓にもそれを發見したが、春子にはその以上のものを發見した。

『若い時にはさういふことは丸でわからないんですからね。よく出來てるものね。もう大丈夫ッていふところになつてから、いろいろな人間の秘密がひらけて來るのね。面白いものね……』

『でなくつちや危なくてしやうがないからな……』

『さうね』

體が一番細かいが、顏にもその表情があらはれて見えた。それに春子は年に似合はず非常に唇が赤かつた。否、その唇の色も時に由り心に由つて違つた。或はその日の時間に由つて違つたと言つても好いかも知れないくらゐだつた。

『今日は何うかしてゐるね？』

『何故？』

『何故つて……』

『唇が赤い？』

春子はわざと先を越した。

『いや』

『それぢや顏の色がわりい？』

『まア好いよ、そんなこと……。しかし體といふものはおかしなもんだな……。細かくじつと見てるさへすれば、それだけでいろんなことがわかるやうなもんだな』

『さう……』

『今、何を思つてゐるか、中てゝ見やうか？』

『え、中ててごらんなさい……』

『だめだ……。たとへぴたりと中たつたにしても、中たらないつていふにきまつてゐるから——』

『そんなことはないわ……。中たつたら中たつたつて屹度言ふわ』

『まアよす……』

『好い加減なことばかり言つてゐるのね……。もうかうなつちや、いくらぢたばたしたつてダメよ……』

『ぢたばたなんかしやしないよ』

『さう――それなら好いけども……飽きたら飽きたつてお言ひなさい――』

『飽きた！』

『大きな子供ね……』

こんなことを言つて、かれ等は少しアルコオルに醉つたといふ風で戯れに互に負ひつこをしたりなどした。『あ、そんなにわざと重くしてはダメよ、潰れて了ふわ……』こんなことを言ふかと思ふと、今度は男が女の方を負つて、『輕いもんだな、これは――これならいくらでもあるける。そら伊勢物語りの繪にあるぢやないか？』

『――むさし野はけふはな燒きそ――でせう……。あそこにある繪でせう……。昔の戀は好いわね』

『今だつてわるくないさ――』

かう言つて小鹿野は背中の春子を強く搖ぶるやうにした。

六〇

父親が束縛のないそんな戀愛生活をしてゐる時、幸子だちはもはや避けることの出來ない苦しい位置にその身を置かなければならなくなつた。

『何うしたえ？』

階段を上つて幸子がそこに顏を見せると同時に、筧は心配さうに訊いた。

『……』

『やつぱりダメ？』

『同じよ……。ないのよ……』

（困るなア！）口には出して言はないけれども、さうした表情がはつきりと筧の顏に上つた。

暫しかれ等は默つたが、やがて筧が、

『まだ、しかし本當のことはわからないんだらう？』

『それはさうよ』

『でも、毎月もうとうにあるのね？』

『それはさうよ……。毎月月の始めになくつちやならないのよ。それはね、一週間ぐらゐはね、後れることはあるんですけども、こんなことは今までなかつたんですもの……。もう今日は二十七日でせう、だから心配なの？』

『でも、まだあるかも知れないね……。はつきりそれときまつたわけつていふんでもないんだね？』

『さうなればそれでまた考へやうがある、何もそんなに心配することはない……』と、その話を始めて幸子が持出した時には、筧は言つたのであつたけれども――それは今でもさう考へてゐないことはないのであるけれども、しかもいよ〳〵その壁に打突からなければならないといふ段になると、ある決心を男に促すものであるだけそれだけ、心が塞がるやうな氣持をさそはれずには置かないのだつた。それよりも優柔不斷であると言はれても爲方がないが、さうした事が起らずに、幸子の父母にも世間にも知られずに、このまゝで秘密にこの戀愛狀態がつゞけられて行く方が一層望ましいやうな氣がするのだつた。しかしまさかにそれは筧にも言へなかつた。

『しかし、それがないだけで、體には別に變りはないんでせう？』

誓くしてからまた筧が訊いた。

『それは別に……』

『ぢや、本當のことはもう少し經つて見なければわからないね……』

『でも、今、言ふ方が好くはないかとも私は思ふんだけども……』

『母さんに？』

『え……』

筧は暫し考へるやうにしてから、『僕にはまださうは思へないんだけども……。生中、まだ本當にもそれときまりもしないのに、話して結果が好ければ好いけれども、わるかつた時には、折角これまでにした二人の戀愛を打壞されて了ふやうなことがないとも限らないからな……』

『それはこつちさへ心がきまつてゐれば、大丈夫ぢやないの……？』

『それはさうだけども、いざ打突つて見たのと、かうして想像してゐるのとは違ひますからね……』

『ぢや、もう少し放つて置く方が好いッて言ふのね？』

『その方が好いと思ふな、その時になつてぐらついたり何かされては困るからね……』

『私が――』

『かういふことは愼重に考へてからやらないと失敗するからねえ――』

『私はぐらつくなんていふことはないと思ふけども……』

『まア、兎に角、もう少し待つて見る方が好いと思ふな！』

筧はまた深く考へるやうに言つた。

六一

あの人に行つて貰はうか、いやあの人では駄目だ、もつとしつかりした人でなければとても話が出來

つこない……。そんなところまでいつも話は持つて行かれるのだけれども、しかもいつも何うにもならずに――言はばその日暮らしにかれ等は享樂したいことを享樂し、話したいことを話し、いつものやうにかの女が階段を下りて戸を明けて向うに出て行くのを見送つてから、筧はそのまゝ引返して、二階の欄干のところに立つてぢつとそつちを見送るのだつた。

筧はそこで幸子がいつも立留るのを知つてゐた。きまつてこつちを振返つて見るのを知つてゐた。まさかに手巾は振らなかつたけれども、白い顔を夕暮近い空氣の中にかなりにはつきりとあらはして此方を見返るのを知つてゐた。別れを告げるやうにして身を少し屈めて挨拶してからずつと徐かに向うに歩いて行くのを知つてゐた。そしてその派手な帶と袖とが向うの疎らな林の角で曲るまで遠く遠く見えて行つてゐるのを知つてゐた。その林の角では、かの女はもはや振返らなかつたけれども、暫らくの間はかれのことを思つてぼんやりと林の背後の空を染めた夕燒の空を眺めながら歩いて行つてゐるのを知つてゐた。否、かれ自身にしても、そこに欄干に身を寄せたまゝ、いろいろなことに思ひ惱みながら、ぢつとそこに長い間立つてゐるのが常だつた。

女の體がさういふ狀態になつたといふことは、一層かれ等をして爛れた戀愛に墮ちて行かしめる基礎となつた。かれ等はお互ひの抱擁の上にも、もはや單なる『詩』見たいなものを感じなかつた。もつと痛切なものを感じた。不安と快樂と所有との一緒になつたやうなものを感じた。……『たしかにさうね

……。出來たのね……體の具合が雜誌に書いてある通りですもの』もう取りかへしがつかなくなつたといふ女の自恣の狀態が却つて女を美しくした。

つい二月ほど前までは二人は決してこんなに自由ではなかつた。それはお互ひに引張るものがあつて逢ふには逢つてゐても――また一週間も經つと矢も楯もたまらぬほど逢ひたくはなつたけれども、しかもまだ痕跡といふものが殘つてゐないかれ等は、それほど退引ならぬことになつてゐるとは思つてはゐなかつた。筧にしても、また幸子にしても、あそび氣分がまだ何處かに微に巴渦を卷いてゐたことはたしかであつた。その證據には、何事かゞ二人の間に起つてひとり手に離れ離れになるやうなことがあるとしても、お互に默つてゐることの誓ひさへ出來れば、それでも好いやうな氣が、さうはつきり意識してはゐなかつたにしても何處かでしてゐた。しかし今はさうした心持だけ全く違つて來てゐた。二人はもはや二人だけでは離れることが出來ないやうな心持になつてゐた。

『何うしたつて、もう、母にはわかりますね？』

『でも、別に何とも言はれたんぢやないんだらう？』

『でも、この頃ぐずぐずしてゐるでせう、私……。それを母は不思議に思つてゐますわ……。脚氣かも知れないから醫者にかゝれッて言はれるのが一番困るわ』

『それは困つたね』

『でも、私、何でもない……。今時分になると、いつも夏まけがするんだからつて言つて置くんですけどもね……。それに、お鮨がたべたいんで困るわ。この間も叔母が來てお鮨が出たんでせう？　ところが姪が二人までついて來てゐるので、私にまで廻つて來ないんでせう？　人間ッて意地のきたないものね。あんなにお鮨を食べたいと思つたことはなかつた——。今日も御馳走して頂戴ね』

六二

雪子と幸子とは水道の綺麗に一杯に流れてゐる土手の上を傘を傾けて少しの間歩いて來たが、橋がそこにあつたので、それを向うへとわたつて、半ば公園になつてゐる涼しい木蔭のベンチのあるところへと行つた。

『お前、もう少し向うの方へ行つてあそんでお出で！』今年一月に生れた兒を負うてゐる女中をさう言つて向うにやつてから、雪子は幸子の方に顔を向けて、

『何うして、幸子さん、それを知つてゐるの？』

『父がそんなことを言つてゐましたから……』

『お父さんが——』

不思議さうに、『誰も知つてゐるものなんかない筈なのに……。まア、ねえ、あなたのお父さんが知つ

てゐらしつたの？　何うして御存じだつたでせうね？』

『何うしてですか、それは知りませんけどもね……。たゞ、父がお前山瀨さんのお孃さん知つてゐるね？　ッて言ふから、知つてゐるッていふと、こんな話があるッてその話をしてきかせたんですの…』

『まアねえ！』雪子はその周圍を振返つて見るやうにしたが、そこには思ひあたるやうな人もなかつた。

『不思議ねえ！』

雪子はかう言つて首を傾けた。

かれ等はもう少しさつき電車の通りで出會して、『まア、山瀨さん！』『まア幸子さん』と兩方から歩み寄つたのだつた。幸子は母に賴まれた買物があつてそこへとやつて來てゐた。雪子はまた雪子で、兒が腸をわるくして近所の醫者にかゝつてゐたが、何うも思はしくないので、その近くにある有名な胃腸の博士の病院へと二三日前から女中をつれて通つて來てゐるのだつた。『まア、さうですか？　このお子さんですか？　去年行つた時に出來てゐらしつたのは——』こんなことを話しながら、兩方とも別に大した用事もなかつたので、それで通りから水道の土手の方へと入つて來たのであつた。

『それで何うなすつて？　もうおわかりになつたんですか？』

別に遠慮もせずに幸子は問うた。

『御存じだからお話しますけどもねえ、誰にも仰有らずに置いて下さい……ね、ね。また新聞にでも出ると困りますからねえ。まだ親類でも本當には知らないくらゐなんですから……。本當に何うしてあなたのお父さんは知つてゐらつしやつたんでせうね？』少しの間途切れて、『まだそのまゝなの……』

『まア！』

『それはね、何ともお話にならないのよ……。この人生には隨分思ひがけないことがあるもんだと思ひましたね。今度こそは……』雪子はそれでも別に興奮もせずに、さうした颱風からはいくらかでも離れて來てゐるやうに、『從妹のやつたことは正氣とは思へないことなんですもの……。何うしても復仇しなければならないつていふ決心なんですもの……。そら、去年あなたがいらしつて下すつた時にもちよつとそのことを言ひましたね。お嫁に行つたところからもそのために戻つて來たつて？　そのくらゐならお嫁に行かなけりやいゝのに……行つて見ても、木村のことが何うしても忘れられなかつたんですつて……？』

『それでもゐるところはわかつたんですか？』

『わかりませんとも……。今でもさがすにはさがしてゐるんですけどもね……。一時は死にやしないかなんて心配したんですけども、それは大丈夫らしいのね。何と言つても、幅でさがすことが出來ないんでせう？　それが一番困るのよ』

『御心配ね』

六三

暫らくしてから幸子が訊いた。

『それでも丸でおわかりにならないッていふことはないんでせう？』

『でも、まア、わからないッていふ方が本當ですねえ……。それはねえ、向うの家の人にはわかつてゐるかも知れませんけどもねえ……？』

『さうでせうねえ、屹度……』かう言つて幸子はまた默つた。

もうたうに初夏を過ぎた午前の日影がチラチラと綠葉を洩れて、そこにベンチに腰を下してゐる當年の二人――元氣だつた二人の竝んだ着物の上に縞を成して落ちた。

『幸子さん、私、今度こそは底の底に落とされたやうな氣がしましたよ……。その證據にはその時から一月ぐらゐは頭が痛くつて、今にも何うかなりさうだつたんですもの……。人生だの、戀愛だのつておそろしいもんですねえ！　私、今でこそかうして落付いて話が出來るやうになつたけれども、ついこの間までは丸で何うかしたやうになつて了つてゐたんですもの』

『まアねえ！』

『それヤね、子供が此方にあるんだから、結局はもどつて來るだらうなんて、皆はさう言ふんですけどもね。本當にさうなるか何うだか。その當座は、てつきり何處かで死んだ！　と思つて、それを思つただけでも、胸がどきどきして、ゐても立つてもゐられなかつたんですもの……。てつきり、何處かからしらせがあつて、林の中とか、湖水の緣とか、海岸とか、さういふところで重なり合つて死んでゐるものとしか思はなかつたんですもの……。そしたら、自分は何んな氣がするだらう。とても生きてゐられないだらう。すぐ一緒に死にたくなるだらうと思ひましたね……。でもね、不思議なもんね。日が經つと、段々さうした心が靜かにやわらげられて行くのね。そしてそれと同時に、向うだつて、さう容易に死ねるものではない……やつぱり何處かで生きてゐる、たしかに生てゐる。かう思ふやうになるのね。今ではもうその方は心配しませんけどもね？』

『お金なども持つていらつしたの？』

『從妹がかなり多くの金を持ち出して行つたつていふことですよ。木村は、ちつとも進んでゐはしなかつたんですもの。義理や何かで無理やりに引つ張り出されて行つたんですもの……。それに、從妹の家の方のことだつて、あの時以來本當のことはわからなくなつて了つたんですからね。兩方で怒つて了つて、往かひしなくなつて了つたんですから……。今度のことだつて、それは中に入つて、いろいろと心配してくれてゐるものはありますけれどもね、本當のことはお互にわかりやしないんですの……』

『本當にねえ』

『私、この頃、何が何だか丸で人生のことがわからなくなつた！　それから考へると、私たち隨分のんきなことを言つてゐたと思ふわ。親がついてゐてさへうまく行かないものを、自分で立派にやつて退けるつもりか何かでゐたんですからね……。人生のことは本當にわからない。何うなつて行くかわからない。一寸先きはヤミツていふことがあるけども、今度こそは本當にさうだと思つた。それに、男と女のことは難かしいことね。とても本などで讀んだやうなものではないのね。さうね、何つて言つたら好いでせうね。體が痛いやうなものね。さう、今度のことでも荆の鞭見たいなものでぴしやぴしやと打たれるやうな氣がしました……』樹間を洩れて日影のチラチラする向うに、白い可愛い兒の帽子を此方に見せて行つたり來たりしてゐる女中の姿を遠く見守りながら雪子は言つた。

六四

『幸子さんはもうおきまりになつてゐるんでせう？』

雪子は急に話頭を變へた。

『いゝえ』

『そんなことはないでせう……？』

『いゝえ……そんなことは……』あとを幸子はだまつた。昔ならその戀愛狀態を雪子に話さずには置かなかつたであらうが、今はさういふ氣には何うしてもなれなかつた。

『本當にまだなの？』

『え、え……』

それでも幸子の顏はいくらか赤くなつた。

『あなたなんかにも、ぢきおわかりになると思ふけど、男女生活といふことは大變なものね……』また話がひとり手にあとにもどつて行つて、『二人一緒に暮すといふことだつて、いく段にも階段があるのね。一つ上ればまた一つといふ風に艱難が出て來るのね』

『それはさうでせうね』

『だから、私たちのことだつて、何うなるかわかりやしないわ。それに、母は正面ではさう言はないけども、お中のうちでは、子供が二人ぐらゐあつたつて、これを好い機會に、私達の生活を壞して了ひたいと思つてゐるんですからね……。それは込み入つてゐるのよ。向うの從妹の家だつて、あの時は嵐のやうだつたつて言ひますからね！』

『でも、その中、何とか好い解決がつきますよ？』

『私なんか、たしかに戀愛生活の失敗者ね。今になつて、いろいろなことがわかるわ……』雪子は深

く當時を思ひ出すといふやうにして言つた。今更に海岸での生活などが思ひ出されるのだつた。其處に、向うから二人の男女――ひとりは二十五六の麥稈帽をかぶつた丈の高い學生風の男、ひとりは何處かの女給らしい派手な風をした女が互に手を把らぬばかりにして、さもむつましさうにかれ等の腰を下してゐるそのベンチの前を通つて行つた。日影がかくれんぼでもしてゐるやうにそのかざして行く女の傘の上にチラチラ動いた。

『……』

雪子も幸子も何か言はうとしたが、しかもそのまゝだまつて了つた。何か言つても爲方がないやうな氣が二人ともした。それにも拘らず向うの男女は、ぴたりと體を寄せるやうにして、此方には眼も呉れずに、靜かに綠樹の影の中に歩いて行つた。向うには池などがあるらしく、氷の赤い看板の旗などが動いて見えてゐた。

ふと氣が附くと、背中の兒がむづかつてゐるらしく、女中が頻りにそれをなだめてゐるのがそれとなく眼に入つたので、雪子は此方に來るやうにとそれを手招ぎをした。

すぐ女中はやつて來た。

『お中が空いたんでせう？　おつぱい上げませうね』かういつて雪子は女中の背から兒を下して、平氣で胸をひろげて、その大きな乳首を兒の口に當てた。

兒は何方かと言へば痩せてゐて、お世辭にも『お丈夫さうね』とは言へなかつた。

『上の坊ちやん、よくお家で待つてゐらつしやいますね』

『母が來てゐて見てゝくれますの……』

『まア、さうですか。それは好うござんすわ……』こんなことを言つてゐる間にも、幸子には自分のお中にゐる兒のことやら、それを父母に何ういふ風にして打明けたら好いかといふことやら、打明けた後は何うなつて行くだらうといふことやらが絶えず深く考へられて、ひとり手に心が塞がれて行くのだつた。かれ等はだまつて腰をかけてゐた。兒の乳を吸ふ音だけが明るい光線の張つてゐるひる近くの空氣の中にすぱすぱと際立つて聞かれた。

六五

家を明けた三日目の夕方小鹿野が歸つて來ると、内の空氣が何となくいつもと違つてゐるのをかれは感じた。いつもなら誰かしら玄關まで出て迎へるのに――妻のお糸が出て來ないにしても幸子か誰かそこに顔を出さないことはないのに今日はあたりがしんとしてゐて、居間に入つて行つても、いつも裁縫に坐つてゐる幸子の姿は其處に見えなかつた。そればかりではなかつた。室の隅につくねてあるかれの不斷着と着改へて了つても、それでもまだそこに誰も顔を見せなかつた。

『おい？　何うしたんだい！　誰もゐないのかえ？』

たうとう堪へきれなくなつたといふやうに小鹿野は聲を立てた。

と、其處に、中學の三年生の武郎が、その向うの四疊半で机に向つて本でも讀んでゐたのを立つて來たらしく、眞面目なむつとした愛嬌のない顔をひよつくりそこに出した。

『母さん、何うした？』

『ゐるでせう！　向うに……』

武郎は勝手の方へ顔を向けた。

『幸子は？』

『……』

武郎は何か言はうとしたが言はずに、四疊半の向うになつてゐる古箪笥の置いてある室の方を指さすやうにした。そこに幸子はうしろむきになつて、うなだれたやうにして、裏庭の方に體を向けてゐた。

しかし小鹿野は別に何とも思はずに――自分が、三日も家を明けてゐたので、それで皆なの心持がわるくこじれてゐるのだらうなどと普通に思ひながら、そのまゝ長火鉢の置いてある六疊の方へと入つて行つて、いつものところへと行つて坐つた。

かれは鐵瓶を下して卷煙草に火をつけた。

武郎はそれを知らせに勝手の方へと行つて、何か二言三言つてゐるやうであつたが、手放されない用事でもあるのか、それに答へる妻のお糸の聲はきこえてゐながら、容易にそこからその姿をあらはさなかつた。

そこを掠めて武郎が自分の四疊半に入つて行かうとしたので、遮るやうにして小鹿野は訊いた。

『何してるんだえ？』

『母さん？　何だか勝手でしてるんでせう？　今、來ます……』

これもいつもと違つて、何だか取つてつけたやうなぶつきら棒な返事をして、無愛想にさつさと自分の室の方へと入つて行つて了つた。

しかも勝手の方に輕い足音がして、戸棚か何かに物をしまふやうな氣勢がして、やがてそこに涙になきぬれたやうな顔を妻のお糸が出したのは、それからいくらも經たないほどだつた。小鹿野はいつもとは夥しく勝手が違つてゐるのに驚かされた。

『お歸んなさい！』

それでもお糸は靜かにかう言つて、長火鉢のいつものところへと坐つた。しかもかの女はいつものやうに顔を夫の方に向けやうとはしなかつた。すぐまた堪らなくなつたといふやうに――あらゆる人生の希望から全く背かれて了つたといふやうに、左の手を眼に當てゝ欷歔げた。

『何うしたんだえ？』

『もう、何も彼も……これでおしまひになりました……これで……』半ば言ひかけたお糸の言葉を涙が遮つた。

小鹿野はあつけに取られたといふやうにして、じつとこの光景を見守つた。

六六

『何うしたんだ？』

お糸はたゞすゝり上げた。

『え？』

『もうすつかり希望も何にもなくなつて了ひました……』

『何故？　何うして？……』

『だつて幸子が――』

お糸は顔を上げてそつちの方に顔を向けたが、その言葉はすぐ涙にさゝえられて了つた。

何か事が起つたのは小鹿野にもそれとわかつた。かれはぢつと心の空間を見廻すやうにした。

『幸子が……幸子が……』

『幸子がどうしたつて言ふんだえ？　え、何うしたつて、え？　筧と……』それとわかつた時には、小鹿野はいきなり深い淵にでもつき落されたやうな氣がした。身内が嚇となつた。それはあまりに思ひがけないことだつた。あまりに……あまりに。さつき崖下の家から細い途を通りに出て來る時にも、そんなことは少しも頭に浮べなかつた。それはその身は不良老年に近いやうなことをしてゐても、自分の娘にさういふことが起つて來てゐるやうとは思はなかつた。そしてそれと同時に筧に對するかねての感じ――憎惡とも反抗ともつかない颱風のやうな感じがかれの内部をすさまじい勢ひで通つて行つた。

それをやつとのことで、辛うじて押へるといふやうにして、

『一體それは本當なのか？』

『本當もうそもありやしません……』小鹿野の權幕の烈しいのに、今はすゝり上げてなどゐられないといふやうにお糸は泣きぬれた顏を此方に向けた。

『何うしたんだ？　一體？』

『何うも此間から少し變だ、變だとは思つてゐたんです……。お花に行く行くつて言つて出かけて行つて、かへりがおそいから……何うかしたんぢやないかと思つてゐたんです……。そしたら、今日、そこで、それもついさつきです。まだ一時間と經つてゐやしません。母さんにきいて頂きたいことが是非あるッて言ふから、何かと思つて、別な學校にでも入りたいのかと思つたら……そんなこと夢にも知らなかつたんですから、私、びつくりして……』

『……』

『それに……』

女中は好い鹽梅に下町に使に行つて留守だつたけれども、弟の武郎にもそれがきこえてはわるいといふやうに、お糸はその顏を急に小鹿野の耳の傍に寄せて、早口に何事をか一言二語言つた。

『え！』

と言つた小鹿野の顏色は變つた。かれは地下深くその身が落ちて行くやうな氣がした。

『……』

『……』

暫しはお互に何も言へなかつた。かれ等はその事件の空間を見廻すといふやうに深い深い沈默に落ちた。

暫く經つた。

『それで何うしやうッて言ふんだ？』

『後生だから、一しよにして下さいつて言ふんです……』

『馬鹿！』

『私もあきれて了つたんです。あの男が何ういふ男だかといふことくらゐは知つてゐさうなものですのに――もう、私は……私は……』お糸はたまらなくなつたといふやうに涙の眼を左の手で掩つた。

六七

『まア、およしなさい！』かう言つてお糸は立つて來て幸子をかばつた。それでも小鹿野はさうしなければたまらないといふやうに――その自分の肉體的な憤怒が醫されないといふやうに、ぽか〳〵と幸子の頭を打つことをやめなかつた。

『そんな亂暴なことはおよしなさいッていふのに――』

たうとうお糸は痛立つた聲で、あなたばかりの子ではないといふやうに、いつもの從順さに似合はず力强く娘と夫との間に立ち塞つた。

『離せ！　離せ！』

まだその憤怒のやり場がないといふやうに、小鹿野は幸子に向つて拳を振廻した。

さうかと言つて幸子が別に口答へしたわけでもなかつた。『幸子！』かう父親の太い聲で、二三度呼ばれたので、むしろ恐怖を感じながらも、しかたがなしにおづおづとそこに入つて來て坐つたのだつた。別に何も言ひはしなかつたのだつた。ところが父親はその顏を、その姿を、その萎れた樣子を――ことに

肉體的に蒼白い、肥つてゐる蒼白い皮膚を見ると、急に堪まらなくなつたといふやうに、その血の汚されたのは自分の血の汚れたのと同じだといふやうに――その身みづからがたまらない屈辱を受けたと同じだと言ふやうに、いきなり立つて行つて、逃げる間もあらばこそ、また母親がそれをとめる暇もあらばこそ、『この馬鹿が！』と叫んで、ポカポカとその頭をなぐりにかゝつたのであつた。

きれいに七三に結つた幸子の髪はばらばらに解けて亂れた。

『まア、あなた……打たなくつても、言つてきかせればわかるんですから』

お糸は間に入つて小鹿野を向うに押してやるやうにした。

『馬鹿が！　何と思つてゐやがるんだ！』小鹿野は呼吸をスウスウはづませながら髪を亂して低頭いてゐる幸子の方を睨むやうにして言つた。かれは自分で自分を打つたやうな氣がした。自分の肉を打つたやうな氣がした。かれは泣きたかつた。それと同時にかれの頭にはいろいろのものが颱風の樣に通つて行つた。お弓……春子……崖下の二階……重役の原……木川田――さういふものがごたごたと通つて行つた。（何だ、きさまは、娘が姙娠したからつて、それを打擲する親の資格がきさまにはあると思ふか。娘よりもきさまの方が先づ打たれねばならないのではないか。娘はきさまのやつてゐることをやつたにとゞまるではないか。何も別にわるいことをやつたわけではないではないか。それなのに戀をしたばかりにさうした苦を受けなければならないといふ法があるか）かうした聲が小鹿野の心の底から湧き

上つて來た。

『馬鹿めが――』

小鹿野は誰を罵つてゐるのかわからないやうな氣がした。

『まア、まア……』お糸は夫をそこに、一先づもとの位置に坐らせて、

『まア、若い娘ですから、さう手暴なことはしないで下さい……。顏に傷痍でもつくと困りますから……』

『勝手なことを言へ！』

『勝手なことを言へつて、本當にさうなんですもの……。もしものことでもあつたら何うするんです？』

『さういふ風にきさまがあまいからそんな間違ひが起るんだ……きさまは何を監督してたんだ？』

『だつて、そんな亂暴をなさらなくつても、話をすればわかることなんですから――』

『おれの耻辱を何うする！』小鹿野はまたいきり立つた。

六八

『私の監督も行屆かなかつたでせうけども、あなたもわるいんです……』お糸も後には壓されてばかりはゐなかつた。

『馬鹿を言へ。そんなことまで俺に責任が持てるか？』

『それだからいけないつて言ふんです……。だからかういふことが起るんだつて言ふんです……。何處の親だつてさういふところに責任を感じてゐないものはないんですから。家庭といふものはそれでなければ駄目なんですから……。一家のあるじがしつかりしてゐなければ、何うしても家が亂脈になりますから……』

『馬鹿！』

『馬鹿つて言はれたツて、何ツて言はれたつて、實際、さうなんだから仕方がありません！』

『自分の不行屆を棚にあげて、勝手なことを言うな。子女の世話をするのは、妻たるものの責任ぢやないか……。それなのに……それなのに……』上段から大きく壓しつけるやうな態度に出てはゐても、小鹿野はともすれば自分から泣き出したいやうな衝動に襲はれた。『生中家庭なんかつくるからわるいんだ！　勝手にするが好いんだ！』

お糸はたしなめるやうに、『それがいけないんです？』

『いけなければよすばかりだ……。一體が拵へたものなんだ。うまく行かなければ打ちこわして了ふばかりだ――』

『それで好ければ、さうなさいな……』いつものやうにお糸は負けてはゐなかつた。

『するとも……。おれが勝手にする。おれが拵へたんだから、己が打壞すには文句はない筈だ。てんでに勝手にするが好い。親の目をかすめて他の前に出られないやうな體にでも何にでもなるがいゝ。そんなことは何とも思つてやしない。人間がやるだけのことだ。新聞に出やうが、世間の人の口の端に上らうが、そんなことは俺の知つたことぢやない――』

『だから勝手になさいつて言ふんです……。それで親として義務が立つと思ふのなら……』

『馬鹿を言へ。そんなことに親が義務を持てるか。勝手に他の前に出られない體になつたんぢやないか。親が何ひとつ知りもしない中に――』

『だから、それがわるいから、よくあなたから仰しやつて下さいッて言つてゐるんです……。私だつて、娘が、こんな、こんな……體になつて……それもお前ばかりがたよりだと思つてゐたのに……』また悲哀が急に押し寄せて來たといふやうに、お糸は右の手を兩眼に當てた。涙がほろほろと膝の上に落ちた。

『……』

小鹿野は何か言はうとしたが、そのまゝだまつて了つた。かれもたまらない氣がした。自分も女だつたらやつぱりお糸のやうに泣いたらうと思つた。つい昨日も大勢のところで、いくらか誇り顔に自分の

娘の美しく人並以上に生長したのを持出して話したりなどしたのだつた。それが忽ちにして幻影となつた。かれは思はず下唇を嚙んだ。さうかと言つて、勝手にするが好いとは言つても、然も勝手に出來るものでもなく――またそれが自分の平生の行爲につゞいてゐるやうに指摘されゝば無論それを烈しく否定するに、躊躇しないけれども、しかもそれがお糸の言つたやうに何處かで連續してゐないとも言ひ切つて了ふことは出來なかつた。心の何處かでさうした心の微妙に動いてゐるのをかれは感じた。と、それと同時に、自分の愛してゐた一塊肉がさういふ風に他人の肉體の交錯を受けて、そこにひとつの生――豫期も何もしなかつたひとつの生を營んでゐるといふことを頭に浮べると、とてもそこに、頭髪を亂して低頭いて坐つてゐる幸子を見る氣にはなれなかつた。

『向うへ行け！』

小鹿野は頤で押やるやうにして言つた。

六九

幸子の出て行つたあとにはたゞ沈默がつゞいた。小鹿野は卷煙草を手に持つたまゝ、それを吸ひもせずに茶簞笥の邊をじつと見詰めた。お糸もやつぱり半ば壞れかけた髷をいくらか低頭加減に下に向いたまゝ何も口を開かなかつた。

尠くともそれはかれ等に取つて大きな事柄だつた。憤怒と後悔と驚愕との後に、もつと何うすることも出來ない空間が展げられるのを感じた。ブランクな空間が、何うにも手のつけやうのない、生中手をつけても却つてそれが爲めにわるくこそなれ、決してよくなりつこない空間が――。

『あなたがわるいんだ……。あなたが無檢束な生活をしてゐるからそれでかういふ事になるのだ…』

さうしたお糸の考へ方にさつき強く反對したゞけそれだけそこが痛いのを小鹿野はよく知つてゐた。しかしそれは何うにもならなかつた。否、却つてその反對にそつちに偏つて行くやうな心持ちをすら感じた。

それに、その相手が筧であるといふことがたまらなく腹立たしかつた。あいつが……表面は好意を持つてゐるやうに見せかけながら、かげではいつも此方を陷れやうとしてゐるあいつが――あいつなどに幸子がだまされたといふことが心外であると共に、さういふトリツクの多い男に無條件に甘く手なづけられて行つたのが腹立たしいのだつた。今まで此話を少しも知らなかつたといふことについてかれは自分からじだんだを踏んだ。『チエッ！』かう言つてかれはいかにもくやしさうに舌打をした。

否そればかりではなかつた。此前行つた時に何となく不愉快だつた春子の行動が昨日ますますその影を濃まかにしてゐたといふ形が二重にかれを焦つかせた。かれは今までいつか一度は必ず打突かるに相違ないと思つてゐた絶壁にいよいよ今度は打つかつたやうな氣がした。かれはさも腹立たしさうに吸ひ

かけの卷煙草を火鉢につきさしてそして今度は腕を組んだ。

『たうとうこんなことになつて了つた！』

深く考へ込んでゐたお糸の口から、さうした溜息のやうな言葉がやがて出て來た。しかしそれは何の答へをも夫から贏ち得なかつた。(それで一體何うするんだ？) かれ等の胸にさうした言葉がはつきりと大きく呼び起されてあるのだつたが、しかもかれ等は決してそれに觸れやうとはしなかつた。それよりもその出來た事の方が――出來たことそのことのひろげた空氣の方が、もつともつとひろい大きなものを彼等の心に起させた。

沈默がなほつゞいた。

武郎は此間自分の机の前でじつとして坐つてゐた。『ウオンダアブツク』か何かをその前にしてゐた。しかもその意味などはとてもいつものやうに眞直に入つて來はしなかつた。武郎にも事の何であるかは大抵はわかつた。急にひとつの低氣壓の重々しくかゝつて來るやうなのを感じてかれは立つて向うの室の緣側の方へと行つた。その時には幸子は已にそこから出て、六疊の居間の机のところに向うむきになつて坐つてゐた。

幸子は幸子で、荆の鞭で打たれたやうな氣がしたといふ雪子の言葉を思ひ出してゐた。戀愛の受難がいよ〳〵本當に始まつて來た。……氣を弱くしてはゐられない……。かの女はさつき打たれたところが

未だに痛んでゐるのをそれとはつきり感じながらこんなことをぼんやり考へてゐた。かの女は身動きもせずにじつと紅い黄い庭の草花を見詰めた。

七〇

『何うするんだ？　一體？』

かう小鹿野が言つたのは、それから暫く經つてからだつた。しかしお糸は涙に泣きぬれた顔を擧げただけで何とも答へなかつた。

『さういふ體になつてゐるんぢや何うすることも出來んぢやないか？』

『……』

『泣いてばかりゐたつてしやうがない。何とかしなくつちやならない……』

『だつて、私はあんな奴のところにやるのはいやです……』

お糸は身も世もないほどに泣き悲しんでゐながら、それでもかうきつぱりと言つた。

『俺だツてさうだ――』

『情ない、情ない！』烈しい感情が急に再び押し寄せられて來たといふやうにお糸は身を震はせた。

『何うしてまたそんなことをちつとも知らずにゐたんだ？』

『私だつて……私だつて……まさか、あの娘がそんな無考へなことをして呉れやうとは夢にも思つてゐなかつたものですものねえ……師匠のところに通つてゐるとばかり思つてゐたんですからねえ……』

『お前の責任だ……兎に角、お前の監督の行屆かなかつたのがわりいんだ……』

と、お糸は急に堰を切りでもしたかのやうに、

『あなたがさう言ふんなら、それでもようござんす。私の責任でも何でもようござんす……。實際、私がわるいんでせう！　私より他には誰もわるいものはないんでせう。幸子だつて、娘のやり勝ちな間違ひをやつただけなんでせう！』（何とでも仰有しやい……。これほど希望をかけて育てゝ來たのに……こゝに引越した時からもう十二三年にもなるが、あの頃から幸子が大きくなつたら、大きくなつたらとばかり思つて、そればかりを樂しみにして、その身の辛いことなどもわきに置いて、そのためにばかりこの苦しい世の中をわたつて來たのに……。夫が幾日か歸つて來ないでも、つい鼻先近くまでそのお弓などといふ女を伴れて來て勘忍ならぬやうな眼に逢はせられても、それでも子供だちのためとばかり思つて忍耐に忍耐をして來たのに……。また今度は今度で、この身の耻になるのを構はず、平生家によくやつて來て、奥さん、奥さんと言つてゐたあの女と何うかして、何でもそのために家を外にしてゐるばかりか、家の活計の金の大部分もそつちの方に使ひ果して、いつでも月末にはこつちを困らせてゐても、それでも今にはと思つて、堪へ忍んで來たのに……何も彼も私がわるい、私がわるい、……。）『好

うござんす、ようござんす……。何も彼も私がわるいんです……。私のやうなものがあなたのやうな豪い人と一緒になつたのがいけないんです。私のやうなものは、もつと普通な、平凡な、毎日役所に通ふやうなつとめ人にでもかたづけば好かつたんです……。さうすれば、こんな悲しい目を見なくつても好かつたんです……。そんな大それた恥かしいことをする娘などを持たなくつても好かつたんです。あの娘はあなたに似て、あゝいふことをしてもそれを何とも思つてゐないんでせう。平氣であゝいふことをして呉れたんでせう。年頃になる娘なら、さういふことをするのはあたり前だくらゐに思つたんでせう！　皆わたしがわるい……ん……で……すから』かう言つてお糸はそこに突つ伏して了つた。

七一

小鹿野にしてもお糸の思つてゐることゝ同じでないことはなかつた。勿論、かの女のやうにめゝしくはなかつた。大きな打撃に出會したにしても、辛くもそれを押へるだけの自制力は持つてゐた。しかし理解力があるだけそれだけその失望は一層大きく且つ強いものだつた。かれは家庭の司令官である資格が、これを境にして全く亡くなつて了つたやうな氣がした。それも自分の身の上のことならばいかやうにも收拾することが出來たであらうが、それが全く他から來たことなので、何うすることも出來ないのがつらかつた。かれはまた手を拱いて默つて了つた。

否、そればかりではなかつた。その一方では、自分の身が振返られるやうな氣がした。たゞ一本筋に傍目も觸らずに刹那的に先へ先へと進んで來た身が。そんなことがあるとは夢にも思はなかつたやうな身が。眼の前にあることにのみ沒頭して、勝手なことばかりを振舞つて來たやうな身が。いつの間にか脚の下にも新しい時代が出來て、それにひしひしと迫られて來たやうな身が――。否、ヨオロッパの小說になどよくある親と子供たちとの相違が、かういふ風にあらはれて來やうとは、本當でないやうにも、何か惡戯でもしてゐるやうにも、更にまたあまり無意味で馬鹿々々しいやうにも思はれるのだつた。それと同時に小鹿野には自分のやつてゐることが問題になつて來た。問題にしまひしまひとしてもなつて來た。自分はもう少し老人にならなければならないやうな氣がした。あまりに若い時代に近すぎてゐるのだといふ氣がした。白頭になつたら白頭になつたやうに振舞はなければならず、老人になつたら老人になつたやうにしなければならないやうな氣がした。しかしそれもほんの瞬間だつた。すぐかれはそれをひつくり返した。(馬鹿を言へ！)と腹の中で叫んだ。(そんなことがあつてたまるものか。まだ若い氣持でゐるものが何うしてさう急に年寄になれるものか。自分には自分がある。自分で好いと思ふことをやつてゐるだけだ。それが何うしてわるいのだ！　何うして自分に關係があるのだ！　それは妻は平生不平に思つてゐることをそれに託して言つてゐるのだらう。それは無理はない……。それは無理はない……。しかしそのために、俺は俺の生活を無にして了ふ必要は何處にあるのだ？　そんなことに

一々責任を感じてゐたら、とてもこの世の中には生てゐられないぢやないか）氣が附くと、手を拱いたまゝかれはこんなことを考へてゐるのだつた。

『勝手にするが好いや……』

自分で口に出して言ふともなく言つて小鹿野は立上つた。

『何處かへ行らつしやるんですか？』

お糸は俄に頭を擧げて、あとを眼で追うやうにして言つた。

『……』

『え？　何處かへ行らつしやるなら行らつしやるやうにちやんと言つて置いて出て行つて下さい』

『何處にも行きやせん！　俺は仕事をするんだ！』

かう言つて小鹿野はどしどしと長い廊下を自分の書齋の方へと入つて行つた。そしていつもの机の前に來てどつかりと坐つた。かれは自分もそのまゝ突伏して泣きたいやうな衝動を渾身に感じた。

七二

かれはじつとしてそこに坐つてゐた。いろいろなことが雜然として胸を往來して、容易にそれを統一することが出來なかつた。かれの眼には裏庭に咲いてゐる赤い白いおしろい草が映つた。いつものやうにそこに來てじつとして坐つてゐる蝦蟆が映つた。隣の猫が背を長く伸ばして、尾を引くやうにして此方も見ずにのそのそと通つて行くのが映つた。

（何年かうしてこの庭に面してゐることだらう？）さうした心持がその雜然とした心の中から一つの言葉を成して浮び上つた。と、自分の生活の艱難――艱難と言つても普通世間でいふ艱難とは全く類を異にした、得意も失意もよろこびも愁ひも享樂も苦痛も何も彼もごつちやになつた、むしろ生きることの艱難、さういふものがひしひしとその胸を塞ぐやうにした。そのくせかれは自分の生活の無節制を後悔してゐるのでもなければ、妻の涙を肯定してゐないでもなかつた。ただ自分といふ一つの存在が、いろいろな感じを持つた人間が、そこにさうしてブランクな空間にうかんでゐるといふことが、眞面目に過ぎて來たかれの生活の前に思ひもかけずさうしたことが起つたといふことが一つの事實としてかれの眼の前にはつきりとうかんだ。

それにしても何のためにかれはかうして働いて來たんだらう。かうして生れて來たがために。かうして家庭を營んだり何かしたために。妻や子供があつたがために。生れて來た以上何かしなければならないといふ要求のために。子供たちを何の不自由も不足もないやうに快い家庭の空氣を吸はせるために。荒らい暴風が來た時にもその安全な避難所を得させるために。素直にのびのびと生ひ立たせるために。時が來たらば安全な翼のもとから安全な翼へと送るために。それであるのに、かれ等はその親の愛を理

解することなしに、却つてそこにひとつの束縛とし、ひとつの牢獄とし、またひとつの退屈な庭園として、一刻も早くそこからのがれやうとする――そしてその行くところは何んなにひどい荒海であらうが、また何んなに荒涼とした野原であらうが、また何んな横しぶきの風雨が吹きあれてゐやうが、そんなことに頓着せずに、却つてそれを自分たちの本當の生活とし、その爲にその身が亡びても更に何とも思はないやうな態度を示すのが例であつた。しかし自分の一生をすらその爲に犧牲としても悔ゐない親心が何うしてじつとしてそれを見てゐられるだらうか。一本の傘もなしに風雨の吹きぶりの中に飛び込んで行くのをじつとして見てゐられるだらうか。そしてそれを愚な親心と言つて了つて好いだらうか。それはヨオロッパの小説の中に出て來る新しい女のやうに、あゝいふ情熱的意志を持つてゐるなら好い。何んな艱難の中にでも自營して入つて行くなら好い……。しかし十八や十九の若さで、そんなはつきりした意志を持つたものが、小説でなしに、實人生に何處にあるだらうか。さういふ娘たちは皆盲目な本能をその道伴れにしてゐるではないか。盲目な本能に引摺られていつの間にか取つてかへしのつかないやうなだらしのない穿に墮ちて了つてゐるではないか。意志も何もあつたものではないではないか。從つて夢がさめれば、すぐそこからやめて引つ返して來るのがわかり切つてゐるではないか。

七三

曾てはさういふ人だちに雜つて若い時代の味方をしたことがあつたことを小鹿野はくり返した。親のために生きてゐるのではない。自分のために生きてゐるのだ……。馬鹿々々しい親心の犧牲などになつて、爲たいことをもせずにゐる必要はない。親心などはどしどし踏躪つて、自分のしたいことをするが好い。親がどんな嚴重な垣をその周圍に結び廻してゐたつて、その中から出たがつてゐる娘を奪つて來るのに手間ひまが要るものではない……。この姪婦！　と言つてピストルで擊たれやうとしたマクダは死なずに、現にそれを打たうとした頑固な父親の手がきかなくなつてそして死んで了つたではないか。そこに若い時代の勝利が象徴されてあるではないか。かれはこんなことを常に口にしたり筆に書いたりしたことを忘れはしなかつた。從つてかれは親としてもかなりな理解を子に對して持つて來た筈だつた。何うかして自由に伸び〳〵と育つやうにと思つて、成るたけ干渉をしないやうにしてやつて來た。ところが、それが今になつて、何が酬はれて來たか。何ういふ風な結果をもたらして來たか。自分はわかつた父親どころか、頑固な爺として舞臺に立たなければならなくなつたではないか。否、自分はさう思つてゐないにしても、若い時代からさう思はれても爲方がないやうな形になつて來てゐるではないか。つまりいつの間にか時といふ大きながんどう返しがやつて來て、今迄は向う側にゐたと思つてゐたのにいつの間にか此方側に來て了つてゐるのだつた。そして若い時代とひとり手に對抗しなければならない位置にその身を置いてゐるのだつた。今度は自分の娘を打たうとしたピストルの手がひとり手にしびれて

了ふ位置にその身を置かなければならなくなつてゐるのだつた。

さうちやんとわかつてゐながらも、しかも小鹿野は娘を許す氣になどはとてもなれなかつた。或は曾てさういふ主張を持してゐただけそれだけ一層それを許す氣になれなかつたと言つた方が適當だつたかも知れなかつた。小鹿野はまた若い時のことを思ひ出した。却つて、それとは反對な形からさうした自由な言動が起つて來てゐたことを思ひ起した。かれはこれまで極度に處女の操持を破るものを憎みつゝけて來たことを思ひ起した。本能に驅られて處女の操を破るやうなやつは、とてもお話にならないとひそかに思つて來たことをくり返した。青年がさうした本能に面した時には、むしろそれとは正反對でなければならない。本能とは飽くまで戰はなければならない。とても打勝つことの出來ない本能であるのがちやんとわかつてゐても、それでそれと十分な戰ひを戰ふやうな青年でなければならない。かれは長い間さういふ風に考へながらそれを見て來た。そして自分の考へてゐることの決して一片の空想でないといふことを體驗した。本能との戰ひをある程度まで戰ひ得る生活——そこにまことの情熱的意志の生活があるのであつて、それの出來ないやうなものは、とても相手にはならないと思つて來たことを、現に今でもさう思ひつゝあることをくり返した。否、かれの生活にしても、世間からは本能に沈淪した生活と見えるかも知れないが、かれ自身としては決してさうは思つてはゐなかつた。やつぱり本能に對するある程度までの戰ひであつた。小鹿野は自己の心といふものが容易に他に、ことに自分の子供に理解され

得ないことを更に新たに痛感せずにはゐられなかつた。かれは深い深い溜息をついた。

七四

その日の夕方に平生ことに親しくしてゐる友達のSが訪問して來た。別に用事があるのでもなかつた。いつものやうに酒が出て、賑かな笑ひ聲が綠樹の多い庭に聞えた。しかしSはそこにいろいろなことを發見したであらう。第一に細君がいつもに似合はず眞面目な顏をしてゐたのを、次に、小鹿野がわるく興奮してゐるやうな口のきゝ方をしてゐたのを發見せずにはゐなかつたであらう。そして何うも變だぞ！　今日は？　と思つたであらう。その時小鹿野はこんな話をそこに持ち出した。

『話は違ふが、何うしてかう若い時代と年寄りの時代が合はなくなるやうに出來てゐるんだらうね？自分も一度はそこを通つて來たんだから、そんなにくひ違ふやうになる筈はないのだがな？』

と、Sは小鹿野の顏を見ながら、

『何うしてもさうなるね。何處へ行つてもその話が出るね。それは此方ではわかつてゐても、あとから出て來た方が丸でわからないんだから、それでさうなるんだらうな……。何うもこいつばかりは免るゝことが出來ないんだらうな……』

『何うもそれが情けないよ。ことに親子のわからないのが情けないよ。その時には親の心持は何うし

たつて子供にはわからないんだからな。いくら言つてきかせても説明してきかせてもわからないんだからな。おやぢが難かしいことばかり言つてゐるとしかきかれないんだからな？』

『それはさうだね……。あとになればわかるけれども――』

『わかる時分には、もうそんなことは何うでもよくなつてゐるんだからな……。それを思ふと、變な氣がするね。あまり早くさういふことがわかつては、却つて自然の旨に叛くやうな形になるんぢやないかな……。それでさういふ風にしてあるんぢやないかしら？　あまりお互に通じないと、しまひにはそんなことを考へて見るやうな心持になるよ』

『何處にでもさういふことがあるやうだな……。つまり割り切れない數の連續と言つたやうなものになつてゐるんだな……。あとからあとからいろんなことがわかつて行くといふ形になつてゐるんだな……』Sは猶ほ一歩深く入るやうにして、『つまり割り切れない數の階段的連續――それを一歩々々趁つて行けば、ちつとも無理はないのだけれども、それを若い時代とか年寄りの時代とかいふ風に二階段か三階段にして了ふので、それでさういふ風に丸で反對のことを言つてゐるやうになるんだらうな……』

『さうだね――さうだらうね』

小鹿野も深くそれを押しつめて見るといふやうにして言つた。

さうして考へて見ると、長い無窮なラインが上下にずつと長くつゞいてゐて、小鹿野たちとその子供

だちとは、同じその線の上にゐるにしても、とても合ふことの出來ないところにゐたといふことが、それとはつきりわかるのであつた。しかしさうした心持と現在の心持――つまりその相手に對する憎惡とは丸で別なものだつた。その憎惡は旨目的で、とても何うにもならないやうなものだつた。小鹿野は酒を飲みながらも、すぐそつちへ心を持つて行かれて沈欝になつた。そして毒蛇の毒のやうにその憎惡がかれの全身を刺戟した。夜はやがて來た。綠樹の間の電燈の光りがわるく佗しく黄ろくかれの眼に映つて見えた。『何うも今日はうまく醉へん！』かう言つてかれはやけのやうに盃を口に當てた。

七五

幾日も幾日も幸子がやつて來ないのが筧には心配になつた。かれは格子戸の明くのを耳にして、何遍立つてそこから下を覗いて見たか知れなかつた。また草路の向うを通る傘を此方に曲つて入つて來やしないかと思つて、何遍それをじつと見てゐたか知れなかつた。しかしさうした期待はすべて裏切られた。今まで五日も來ないことなどはなかつたのに、七日になつてもそこにその姿を見せないのは、何か事が起つたに相違なかつた。たしかにそれが――その心配したことが事實となつてあらはれたに相違なかつた。

それにしても何とかそのことを知らせて來るぐらゐのことは出來さうなものだ。自分は出て來られな

いにしても、手紙ぐらゐは出せさうなものだ……。つい、あの近くにポストがある。こんなことを幾日かかれは考へながら今日こそは今日こそはと思つて不安な不安な時間を送つた。しかし段々考へがつきつめて行つた。もしそれが實際兩親に知れたことになれば、それはそんな生ぬるい狀態にとゞまつてゐないに相違ない。それこそ一歩も外に出ることが出來ないやうに嚴重に監禁されてゐるに相違ない……。さう思ふと筧はゐても立つてもゐられないやうな氣がした。

しかし筧はそれに對して何等の手段をも取ることが出來なかつた。無論かれは幸子の家をぢかに訪問することは出來なかつた。さうかと云つてその中間に入つて呉れる友だちも知己も持つてゐなかつた。間接にその消息をさぐつて貰ふものすらなかつた。何も彼も手につかぬやうにしておどおどしてかれは暮した。

一日は雨が降つた。さみだれにしてはまだ早いが、しとしとと降りつゞいてちよつとの晴間もなくて夕暮になつて行つた。豆腐屋の賣聲がわびしく向う側を通つて行つた。(何うしても夫に相違ない。病氣で二三日寢てゐるといふのなら、そんなに長く音沙汰なしに過ぎるわけがない。たしかにさうだ……たしかに知れて嚴しく監禁されてゐるのだ……。出たいにも出て來られないのだ……。郵便を出したくても、あのポストまで出て來られないのだ……)かう思ふと筧はぢつとしてそこに坐つてゐられなくなつた。行つて見たところで何うにもならないのはわかり切つてゐるけれども、それでもかれは出かける支

度をして階子を下りた。

『何處かへいらつしやるんですか？　この降るのに――？』

下の上さんは變に笑ひながら言つた。

それでも傘は出して呉れた。

『そんなに遠くへいらつしやるんぢやないでせう？』

『え、すぐ歸つて來ます』

筧は格子戸を明けて外へと出て行つた。かなりに強く降つてゐるらしく、バラバラと雨の傘に當る音がはつきりときこえた。かれは自分ながら非常に落着を失つてゐるやうなのを感じた。わくわくしてゐるやうなのを感じた。とても何うにもならないことをしやうとしてゐるその身のあぢきなさを感じた。もはや夕暮は次第に夜にならうとして、路傍の草に露が白く深く置いてゐるのがぼんやりと微かに見えた。かれはひとつの丘を越して行つた。

七六

丘の上と言つてもすつかり屋敷町で、たまには大きな邸も雜つてゐるけれども、大抵は小さな門に軒燈がついてゐるやうな家の多いところだつた。筧は成るたけ人通りのないやうな道を選んで行つた。

雨は決して小降りにはならなかつた。かれは傘をいくらか斜にさすやうにしたけれども、それでも着物の袖や膝の下あたりは濡れそぼちた。ことに坂を少しのぼらうとした時に、運わるく弛んでゐた足駄の妻皮がずつて、歩いてゐる中にそれがぐんぐん曲つて行くので、後には思ひ切つてそれを手で取つて捨てた。かれは益々重苦しいわびしさを感じた。

小さなカフエが角を曲つたところにあつた。そこでは二三人の女給が、客がないので、小さなラヂオのラッパの周圍に寄り集まつて、それを聞くでもなく聞かぬでもなく、たゞぼんやりとしてゐるのが明るい電氣の下に見えた。また急に強くなり出した雨は、瀧縞のやうに白い太い線をあたりに見せて落ちてゐた。

幸子の家はそこからはもはやいくらもない筈だつた。かれも一二度は先輩としてそこにかれを訪問したことがある。從つてその客間も書齋もその他その内部のことも多少は知つてゐるのであつた。ところがその後いろ〳〵ないきさつがあつて――それは別に幸子の父親に關係したことではなかつたが、間接にそれに影響してゐるやうなことだつたので、それからは全くそこには姿を見せなくなつて了つたのであつた。筧は靜かに暗い闇の方へ――あかりがボツツリボツツリついてゐる、たしかその三番目の左側の燈火がそれである。そこには銀杏の樹があつて秋は見事に黄葉する、その向うの角にポストがある。それがさうであると思ひながら、一歩は一歩とそつちの方へと近寄つて行つた。その通りは晝間はかなりに人通りのあるところであつたけれども、夜になつて雨が降つてゐるせいか、ひつそりとして、誰もそこを通つて行くものはなかつた。ひとり女の人が少し行つたところで、かれにすれちがつて行つたけれども、それも別に此方を注意するでもなくすぐ行き過ぎた。

筧は樹木の綠が暗く上からおほひ冠さつてゐるやうな小さな門のところに來て、その軒燈の光りの及ばないところに身を忍ばせるやうにして歩を留めた。そしてあたりを見廻して、あやしまれるおそれもないといふことを見きはめてから、かれはその生籬のところへと身を寄せた。

まだ日がくれたばかりであるのにも拘らずあたりはひつそりとしてゐた。何の氣勢もなかつた。また一つのあかりの庭樹を洩れて來るのもなかつた。雨戸も閉めて了つてあるらしかつた。

家の内部がひとり手にかれの眼の前に浮んで見えた。そこに玄關。そこに居間。そこに書齋。かの女のゐるところは居間の此方の方になつてゐる筈。ゐればそこにあかりか何かが見えなければならない筈。それにいかに雨が降つてゐるからと言つてこんなに早く雨戸をしめて了ふわけはない筈。……てつきり、それに相違ない。その事がそれと知れて、何等かの手段を取つたに相違ない。ことによると……否、ことによるどころではない、十に八九は、もはや彼女はそこにゐない。手早く何處かにやられて了つてゐる……。たうとう來るべきことが到來した。しかももつともわるい形で到來した……。さう思ふと筧はじつとしてはゐられないやうな氣がした。閉ぢられた門に對しても強い一種の反抗を感じた。

七七

しかし何うすることも出來なかつた。近所で聞いて見たいにも知つてゐるものもなかつた。それにもしかれの想像した通りであるならばかの女は全く監禁されたと同じ狀態に置かれてあるのだつた。かれにはそれがたまらなかつた。かれとかの女とかの女の內部に呼吸しつゝあるものと、この三つのものがつゞいてゐるだけにたまらなかつた。筧は微な燈火でも見えやしないかと思つて、頻りに綠樹の間を覗いた。

足音が後でした。あやしまれてはと思つて、かれはすた〳〵と歩き出した。

あとから來たのは、はつぴを着た勞働者風の男だつた。大きな重さうなものを負うてゐた。いきなり訊いた。

『小鹿野さんツていふのはこゝらにありませんかね？』

筧ははつとした。そしてすぐ答へた。

『そこだよ』

『こゝですか……？』

その勞働者風の男は、いくらかあとになつた家の門を指さして訊いた。

『さうだよ』

『ありがたう……』かう言つて、その重いものを負うた男は、二三歩もどつて、門のくゞりの方を、ガラガラと明けて、そして內へと入つて行つた。小砂利を踏む音がヂャリヂャリ聞えた。筧はそこからでも微な消息を知りたいと思はずにはゐられなかつた。五六間行つたのをまたもどつて來て、その男が明け放して入つて行つたあとのところから、ずつと長くつゞいてゐる玄關までの路を覗いた。

玄關では已にその男が案內を乞うてゐるらしく、何か言つてゐる聲が二三度きこえた。と、急に、その玄關にぱつと火がかゞやいて、ガラス張の戸の半ば明けられてあるのがそれとはつきり見えて、つゞいてその餘光がずつとこつちの方まで砂利やら庭木やら、大きな銀杏の木の下の方の葉裏やらを照した。筧はわれを忘れたやうに自分もその身を半ばくゞりの內に入れでもするやうにしてじつと深くその內を覗いた。

構ふことはない、自分もずんずん入つて行かうか。こんな衝動が急にかれに起つた。あそこの玄關に行つて、幸子さんはゐますか、是非お目にかゝりたいんですが、と言つたつてちつとも差支はないわけだ。さういふ權利は此自分には十分にある。たしかに十分にある……。かう思つたが、しかもさすがにそれを實行するわけには行かなかつた。筧はそのまゝじつとしてそこに立つてゐた。

用事のすんだその勞働者風の男は、やがてすごすごと此方へと出て來る氣勢がした。筧はあはてゝそ

こを離れて、また通の方へと二三歩歩いて行つた。玄關の電氣は消えて、あたりはまたもとの闇にもどつてゐた。

くゞりを閉めて、その男はやがて此方へと出て來たが、まだそこにさつきの人の立つてゐるのを無氣味さうにじろ〳〵と見て、しかも何も言はずに、そのまゝ向うに歩いて行かうとするのを呼び留めて、

『わかりましたか？』

かう筧はその後から聲を懸けた。

七八

『ありがたう』

かう言つたきりで、その男はすたすたと向うへ行つて了つた。せめてそこからでも何か聞き出さうと思つた望みもそれですつかりあてが外れて了つた。雨はまた盛んに降り出して來た。

いつまでこんなことをしてゐても爲方がないその身の愚さを心は罵つてゐるけれども――またそれならそれでもつと正面からそれ相應の手段を取るより他に爲方がないとも思つてはゐるけれども、しかも何うかしてそのおもかげの、聲音の髣髴でも得たいと思つた。この家の屋根の下にかの女がゐるといふことだけでも好い。それだけでも知れゝば、それでたんのうして今夜はもどつて行けるけれども、この

まゝでは、とても歸つてあの二階でひとりで眠ることは出來ないやうな氣がした。

かれは兎に角ぐるりと家の周圍を一廻り廻つて見やうと思つた。そしてそろそろと歩き出した。それは半分は別な貸家の一郭に遮られて、勝手元の方には行つて見ることは出來なくなつてゐるけれども、それでもその家と家との間を少しの間入つて行けば、そこから茶の間を覗くことが出來るかも知れないのであつた。かれはぐるりと生籬について廻つて、その裏になつてゐる方へと行つた。

ところが、その幸子の家の茶の間近くまでその身を寄せて行くといふことは、とても出來ない相談だつた。何故といふのに、その家と家の間の右側の家の一室がまだ戸を閉めずに明るくすだれ越しに見えてゐて、そこにはその家の人たちが二三人寄り集まつて頻にラヂオを聞いてゐるらしいのがそれとはつきりと見えたからであつた。それはその傍の細い路を通つて、井戸のあるところまで入つて行けば、その向うに幸子の家の勝手元に入つて行く戸があり、女中ばかりではなく、幸子も時にはそこから水を汲みに出ることを知つてゐるので、たとへその髣髴を得られないまでにも、そこまで身を寄せて行きたいと思つたのであるけれども、とてもそれは難かしいことだつた。否、そればかりならまだ好かつたが、その蒼の下にいくらか傘をすぼめて、雨のバラ〳〵とその上に音を立てるのを氣にしながら、何うすることも出來ずに立つてゐると、今度は急に左側の家の勝手元らしいところの戸が明いて、そこから下女らしい女の白い顔がひよいと出たと思ふと、いきなりキャツと聲を立てゝ、ぴしやりとその戸をしめて

了つた。

そこにかれの立つてゐるのに驚いたのであつた。

『何うしたのさ……』

『だつて、奥さん、誰かがそこに立つてゐるんですもの！』

かういふ聲がした。つゞいて今度は誰かゞやつて來さうな氣勢がした。慌てゝ筧はそこから出て來て了つた。ラヂオを聞いてゐる方の家の窓の方へも誰かゞ立つて來たやうな氣勢がした。

筧はすたこら歩いて此方へと來てしまつた。何うすることも出來ないのだつた。さうかと言つて、その兩側の家が戸を閉めてしまふまでそこに立つて待つてゐるわけにも行かなかつた。かれの心はあたりの闇とひとつになつた。かれは雨の降り頻る中をわびしくてくてくと歩いた。

七九

幸子は何うかすると本堂の方へとひとりで出かけて行つた。それにすら伯母の眼は注意深くその背後に光つてゐるのをかの女は感じた。この一週間ほどの間のことはかの女に取つてすべて豫想外だつた。自分でもこんな風になるとは夢にも思へなかつた。それは多少の戀の受難はあるだらう。小言ぐらゐは言はれるだらう。母親が泣き口説くぐらゐのことはあるだらう。しかし結局は許してくれるだらう。もうかうなつた上は——唯の體でなくなつた上は、存外反對しないかも知れない。割合にわけなく一緒にしてくれるかも知れない。世間にもさうしたためしはいくらもある。雪子のことなどを思つて見てもそれはわかる。それは一緒になつてからの生活の苦しみとか煩悶とか、さういふことは澤山に澤山にあるだらうけれども——空想したやうな樂しいものばかりでないのはわかつてゐるけれども、親から許されることはさう難かしくはないだらう。『何故つて言つたつて、我々は單なる親のものではないんだもの……。我々は嚴乎としたひとつの存在なんだもの……』こんな風に筧とも話し合つたことがあるくらゐだから、別にそれほどのことはなくてすむだらう。案ずるよりも生むが早いだらう。さう思つてゐたのに……。半ば親の愛をたよりにする心持がかなりに多く働いてゐたのに……。あの時の嵐の凄じかつたことは！　荊の鞭で打たれるぐらゐのことではなかつた。また自分等のやつたことがわるいことであつたにしても、あれほどの苛責の拳を受けやうとは思ひもかけなかつた。かの女はその時胸が一杯になつて何にも言へなかつたことを思ひ起した。何うしてこんなに扱はれなければならないかと思つたことを思ひ起した。つゞいて微ではあるが、しかも強い反抗さへ起つて來たことを思ひ起した。ことにかの女の豫想外に思つたことは、筧に對する兩親の反對であつた。兩親がさういふ風に筧を見てゐるとは、かの女は今まで少しも知らなかつた。否、それと知れてから、急におびたゞしく反對して、母親などは身も世もないやうに、ある大切なものを失つて了つたやうに聲をふるはして泣き出した理由がかの女には

よく飲み込めなかつた。兎に角あの嵐は思ひもかけないほどすさまじいものだつた。そしてそれからは思ひがけないことばかりが續いた。

兩親は何う思つてゐるのだらう？　將來は何ういふ風にしやうとしてゐるのだらう？　それは丸きりわからずに――もつと別な理由で、さういふ體になつたものをこのまゝ東京には置けないといふ單なる理由で、それで母親の姉のゐるかうした山の中の田舍寺に預けられることゝなつたのであるとしか幸子には思へなかつた。父親からも母親からもかの女は何も話されなかつた。寛に對する將來の問題は何うなるかなどといふことにはちつとも觸れなかつた。纔ばかりの證言をすら得なかつた。さうされるのはあたり前だといふやうにして、いきなりあの翌日母親がかの女を此處に伴れて來て了つたのである。そして自分の行爲ばかりが涙と愚痴とを以て母親から責められたのである。そして此方に來てからは、伯母と母親とがこそこそ何か話をしてゐただけで――又いやに伯母がつめたい皮肉な表情でこつちを見るだけで、かの女は全くひとりの罪人として、遠い島にでも流された昔の人だちといくらも違はないやうな取扱ひを受けた。

八〇

母親はさう長くそこに滯在してゐることが出來ないので、伯母に一切のことを托して、泣いたり笑つ

たりしてそしてあとのことを心配しいしい三日目に歸つて行つた。母親はそれについて少しも意見を示さなかつたけれども、こゝに長く身をひそめて居れ、もしも此處から何うかするやうなことがあれば、それこそお前の一生はおしまひであるばかりではなく、また拭ふことの出來ないお前の耻があかるみに出るばかりではなく、家の名にも兩親の顏にも泥をぬるといふやうなことになる。忘れてもさういふ過ちを二度としてはならない……といふやうに、叱る言葉は少しも混ぜずに、むしろ懇々と涙を混ぜて、そつちから賴むやうにして母親は諭した。それに引かへて伯母は何も言はなかつた。たゞ笑ひながら、『まア、かういふ田舍に來るといふこともめづらしいから、ゆつくり落着いてお出でよ。何も心配することはちつともないからね』と言つた。そしてかの女は庫裡の奥の六疊の一間をあてがはられた。兩親の意見はこれであら方幸子にわからぬでもなかつた。兩親にしても、伯母にしても、このまゝこゝに身二つになるまでかの女をそつとして置いて、そしてそのいはゆる不始末を絶對に世間に知れないやうにしやうとしてゐるらしかつた。幸子は一種不思議に近いやうな意想外な心持を感じた。戀の受難の形が、かねて小說で讀んだり乏しい知識で知つてゐたりしたのとは夥だしく違つてゐるのを感じた。あつけに取られたといふやうなあきれた心持もいくらかはした。またとても容易に何うにもならない此戀の行末に就ても悲觀した。それにしても寛は何うしてゐるだらう。やつぱり其身のやうに驚いて悲しんでゐるだらう。何うして好いかわからないでこまつてゐるだらう。幸子に

は兩親の思つてゐるやうにこの問題が簡單に不合理に解決され得るとは思へなかつた。第一そのお中の中に呼吸づきつゝある一塊肉がそれを許さないやうな氣がした。かの女は何うしてその身がかうした位置に置かれなければならないかに就いて微かに疑ひを挾んだ。またその一塊肉が普通世間に多く見らるるやうにさういふ風に不運に取扱はれるといふことについても容易に言ひあらはすことの出來ないやうな不滿を感じた。さうかと言つてそれがはつきりした形を取つてかの女の意識の上にのぼつてゐるのでも何でもなかつた。むしろぼんやりした形でさういふ風に思はれたのだつた。むしろそれよりも寧に對する考への方が一層はつきりとかの女の心の周圍を繞つた。

その別れた時の室のさま、室の卓の上にかの女が手づから挿した一輪挿しのバラの白くさびしかつたこと、寧の髪がわるくのびて、いつもはきれいにしてゐる顔にその日はわるくひげの生えてゐるのが眼に立つたこと、蟲が知らせたかその日はわるくわびしさうにしてゐたこと、くもり日の室の空氣の中に顏が蒼白くあらはれて見えてゐたりしたことだのが、そこらにある山門の、半ば破れかけた鐘樓だの、山門から本堂に達するでこぼこした舗石道だの、墓場の此方にある竹籔だの、本堂の前にいつも大勢あそびに來る鼻たらしの子供だのと一緒に雜り合ふのだつた。母親が歸つて行つた時には、流石にかの女も言ふに言はれないさびしさを感じた。かの女も眼の縁を赤くしてゐた。

八一

母親が歸つて行く時には、それでもこんな言葉を取交した。

『本當にお前、こんどこそ眞面目にしつかりしてゐなくつては駄目ですよ。こんど間違ひがあらうものなら、それこそ飛んでもないことになつて了ひますからね？　いゝかえ？　わかつたかえ？』

『……』

『さびしいだらうけども、少しの間ぢつとしてゐておくれ……。父さんだつて默つてゐるけども、隨分心配してゐるんだからね……』

『また、その中、母さん來て呉れるわねえ？』

『あ、成るたけちよいちよい來るやうにするよ。此處ならいくらでも來られるからね？　何でも用事があつたら言つて來ておくれ……來られなかつたら、小包でも何でも送るから、着物ももう二三枚送つて置かうね？』

『さうね。あの芭蕉のと瀧縞のとを送つて頂戴……』

母親にしてももつと詳しく訓戒したかつたし、幸子にしても、もつと自分の本當の心持を此處に披瀝したいと思はぬではなかつたけれども、しかも兩方とも十分にその心をそこに持ち出すことが出來なか

つた。否、持ち出して見たところで何うにもならなかつた。母親にしてもいくら壓迫して見たところでそれが有効に幸子にその戀愛をあきらめさせることは出來なかつたし、幸子にしてもいくら自分の願ひを持出して見たところで、かへつてそれは母親の怒りと悲しみを買ふにとゞまるのをよく知つてゐた。結局今はこのまゝにして置くより他爲方がないのだつた。母親にも、小鹿野が『まア放つて置け……。自然にまかせて置け。かういふことは堰いたりすると却つていけなくなるから……。かういふことは時の力によるより他爲方がないから……』と言つた言葉が次第によく飲み込めて來てゐた。そしてかうして置くうちには、ひとり手に兩方で思ひ切るやうになるだらう。あの筧といふ男だつて徒勞だといふことがわかれば段々その戀愛から離れて行くだらう。幸子だつてさうだらう。時が經てばひとり手に熱がさめて行つてもとのやうな靜かな心の持主になるだらう。母親は案じつゝもかう思つて自然にまかせて歸つて行くより他爲方がなかつた。

『ぢや、歸るからね……』

母親は一度暇を告げて、庫裡の玄關のところまで出て行つたが、送つて出て來たりなどするとかへつて思ひが殘つていけないから、何うせまたぢき來るのだからと言つてそのまゝ此方へと出て來て了つたのであつたけれども、それでもあまり物足りないといふ風で、もう一度奥へ入つて行つた。そしてさう言つて幸子の顔を見た。

『ぢや、ね、いゝかえ?』

『……』

幸子も流石に眼に涙をためてゐた。

『また來週になつて、ひまを見て出て來るからね……』

『……』

奥に引込んではゐられないといふやうにして、幸子は眼を赤くしながら、たう〳〵玄關のところまで出て來て見おくつた。母親もさびしさうだつた。別れを告げて、向うの舗石道のところに待つてゐる車の方へと歩いて行つたが、もう一度振返つて、顔を見合せて輕く挨拶して、そのまゝすた〳〵歩いて行つた。やがて山門の方へとその車の轢つて行く氣配がした。

八二

たゞ一日二日經つただけでも幸子は言ふに言はれないさびしさと退屈さとを感じた。あるじは五十五六の肥つた莞爾した和尚さんで、いろいろ今度のことについても心配して呉れたが、しかも別に意見らしいことを言ふでもなく、毎朝早く起きて、おつとめの讀經をするのと、お葬式があると紫色の僧衣を着て長い廊下を本堂の方へと歩いて行くのと、來客があると酒を出すので伯母が忙しがつてゐるのと、時々

寺の用事のために僧侶の用ゆる帽子をかぶつて出懸けて行くのとくらゐで、子供のない寺はひつそりとさびしいものだつた。伯母は時には『幸ちやん、お茶がはいつたからお出で』などと呼びに來て、町で出來る田舍鮨などを取つて呉れたけれども、都會の食物に馴れた身には、酢がきゝすぎたり、わるく甘く砂糖が入りすぎたり、米がわるかつたりしてとても口には合はなかつた。菓子もごてごてと花形に赤く色が附けてあつたりするけれど、餡がてんかうなのでわる甘すぎた。それに朝夕の食事にもかの女は困つた。『幸ちやん、もうおしまひ、よくそれでお中がすかないね……?』などと伯母から言はれるほどそれほど早くかの女は箸を下に置いた。味噌汁にも一種麥かうじの匂ひがして田舍の人だちはよく平氣でこんな汁を食つてゐると思つた。しかしつけ物ばかりで食ふわけにも行かないので、一口吸ひ二口吸ひして、やつとそれで咽喉を通した。時にはそれでもあんこ餅などといふものが檀家の人だちから上げられた。それは多くは鹽あんなので、餡は出して了つて、餅だけを燒いて砂糖をつけて食つた。それはそんなに拙くなかつた。また饂飩などを寺の男に打たせて夕飯にしたりした。

わびしさはそればかりでなかつた。配流に似た不自由さが一層かの女の心を男の方へと誘つて行つた。思ふまいとしても筧のことが頭に上つて來て仕方がなかつた。ともすると、そこから見えてゐる石だの松だの池だののある庭をぢつと見詰めたまゝ、一時間近くも身動きもせずに深く男のことを思つてゐたりした。雪子の身の上にその身が引換られて考へられた。

でも丸きり家の内にばかり置かれてゐるといふのでもなかつた。寺の境内などは歩くことを默認されてゐた。しかもちよつとでも姿があたりに見えなくなると伯母が心配してすぐ出て來た。母親がもどつて行つてから三日目の午後のことだつたが、何氣なく寺の墓地の中に入つて石塔の間を歩いてゐると、あちこちを大騒ぎをしてさがして、やつとそこにかの女のゐたので胸を撫で下したといふやうな伯母が『あ、こんなところにゐたの？　まさかお墓場の中にゐやうとは思はなかつたからねえ』などと言つて、別に叱りもしはしなかつたけれども、他に見られるとわるいから成るたけ遠くには行かない方が好いなどゝ言つた。それでもさう家の中にばかり引込んでゐるわけには行かなかつた。空でも見れば、またそこらに咲いてゐる草花でも見れば、いくらかでもその配流のやうな生活のわびしさがまぎらし得られるといふやうな氣がした。かの女はそこゝにその姿を見せた。時には銀杏の大きな樹の下に、先々代の僧の碑の傍に、または井戸端の水草の中に小さく紫に菖蒲の咲いてゐる傍に。

八三

次第に筧のことばかりが思はれるやうになつた。何うしたらう。さぞ驚いてゐるだらう。たゞさういふ風に考へてゐる中はまだ好かつたけれども反對に、男の心變りと言つたやうなものに觸れて行つた時には、身内がくわつとなつて來るのを感じた。それはお中の内の一塊肉が當然の權利を主張し出したか

と思はれるほどそれほど力强いものだつた。

（そんなことはない。……そんなことはない……。そんなに男は薄情だとは思へない。こつちがこれほど思つてゐるのに、そんな風に向うで思つてゐるわけがない）さういふ風に一面には堅くそれを信じて疑はないけれども、一面には手紙を出すことすら出來ないその身がたまらなくもどかしかつた。筧はその事件の突然なのに驚きながらも、かならず手紙を期待してゐるに相違なかつた。いつかかの女から手紙が來ると思つてゐるに相違なかつた。それをだまつてじつとしてゐる。いつまでもじつとしてゐる。それは始めの中は煩悶もするだらうし、懊惱もするだらう。しかしその離隔が次第にかれ等の中を疎くするやうになつて行きはしないか。現に兩親はそれをのぞんでゐるのではないか。とてもかれ等のために理解ある同情を抱いて貰ふことなぞは出來ないではないか。ひとり手に時が壞して行くことを待つてゐるではないか。かう思ふと、幸子はかうしてじつとしてはゐられないやうな氣がした。

だまつて裁縫に坐りながら、かの女は手紙のことを考へた。何うかしてそれを出したい。何うかしてこゝにこの身がゐることだけでも知らせたい。それは何うの彼うのと言ふのでなくとも、それだけは知らせて、おぼつかないながらも、お互の心の間だけを堅く通じて置きたい。かう思つてかの女はいろいろなことを考へた。停車場まで行けば、あそこにポストのあるのはわかつてゐる。しかしかの女自身でそこに出かけて行くことはとても不可能である。ちよつと姿が見えないでも、伯母は眼を皿のやうにし

て見張つてゐる。また、そんなことが知れやうものなら、何んな取扱をされるやうになるかわからない……。かの女はかう考へながら、しかも何うすることも出來ずに終日長く庫裡の奥の一間に坐つてゐた。毎日朝日の影が線を成して向うの米倉の白い壁にさして來るのと、夕日が微に本堂の傍の大きな銀杏の木のかげに落ちてゐるのを目にしつゝ、とてもかうしてはゐられないほどの焦燥を感じながら—。

ある日の午後のことだつた。かの女は本堂の方へと行つて、寄附金の紙の一面に張られてあるのや、本尊の如來像が寂然として立つてゐるのや、大勢の手で撫でられた賓頭留尊が赤光にひかつてそこに置かれてあるのや、お布施の饅頭が本尊佛の前にあげられてあるのを見ながら、そこらをぶらぶらしてゐた。氣が附くと、その本堂の前のところで、子供が五六人遊んでゐる。石けり見たいなことをしてあそんでゐる。ふと幸子は思ひついた。さうだ……あの子供に賴もう……。あゝ大勢ゐる時では駄目だが、ひとりかふたりゐる時なら、誰にも知れずにそつと手紙をポストに入れて貰ふことが出來る。向うから返事を取ることはそれは絶對に出來ないかも知れないが、こつちのことだけでも知らせて置かう……。かうかの女は思ひ附いて急に力を得たやうな氣がした。

八四

多勢あそびに來る中に、ひとりさびしさうにしてゐる女の兒があつた。ある日、かの女はそれに話し

かけた。

『何うして皆なと一しよに遊ばないの……？』

女の兒はだまつてゐた。

『え？』

『……』

『皆なが意地がわるいのね？』

『男ばかしだもの……』

『女の兒だつてゐたぢやないの？　この間あなたも雜つて遊んでゐたぢやない？』幸子はふと氣が附いて、『學校に行かないの？』

『……』

『行かないのね？』

女の兒は何となく氣まりがわるさうにして點頭いた。家が貧しいので義務教育も怠り勝ちである兒であるといふことがそれでわかつた。

『家は何處？』

女の兒は振返つて寺の山門の方を指した。

幸子は來た時其處に簷の低い、汚ない、一間しかない、莚を敷いた此方にくろい破れた簾の置いてある長屋が五六軒つゞいてゐるのを見た。そこには日雇人足だの、寺の墓場掃除だの、郵便配達だのが住んでゐるのであつた。

幸子は思ひ切つて言つた。

『停車場の前に郵便を入れる箱があるのを知つてゐる？』

女の兒は少し考へてゐたが、『あの入るところにあるんか？』

『さうだらうと思ふけど……私は何處にあるのかしらないけど……』

『郵便屋さんがいつもかぎで明けてそこから、はがきだの手紙だの出してゐるところだへ？』

『さうさう……。あそこに行つて郵便出して來て呉れない？』

『うん、だして來てやる……』

幸子はそこに初めて自分の行く道を見出したやうな氣がした。しかしまた惑ふにも惑つた。手紙を書かうと思つて廊下を此方へと歩いて來たには來たけれども、それをやつて好いものかわるいものかちよつと自分にも判斷がつきかねた。たうとうその身も雪子と同じやうに――また小説や新聞で見る人たちと同じやうに、かうしたハメに陷つて了つたことを深く深く考へずにはゐられなかつた。しかし今になつて何うにも出來なかつた。お腹にゐる子供のためにもさうしなければならないやうな氣持になつた。

たとへ雪子のやうになつたにしても、またそのために何んな受難に逢つたにしても、さうする方が本當であるといふ氣がした。

かの女はそそくさとそこらにあつた鉛筆で手紙を書いた。勿論それは長いものでもなく、詳しくかの女の心を書いたやうなものでもなかつた。たゞさうした窮地に其身が陷れられたといふこと、しかしそのため此心は少しも變らぬといふこと、時を待つといふこと、何んな戀にもさうした受難は免れ難いゆえ、そちらでもそのつもりでゐて貰ひたいといふこと、しかし決して無闇に動いてはくれるなといふこと、そんなことをぞんざいに書いて、そして伯母にあやしまれぬやうに、またそつと本堂の方へと行つた。

八五

『それぢやね、好い兒だからね。これを入れて來ておくれ。さうすればあとでお禮をしますからね』

いつまでも幸子が出て來ないので退屈さうにして待つてゐた女の兒は、その手紙を受取るとそのまま、それを懷に入れて急いで驅け出さうとした。

『落してはダメよ』

女の兒は輕く點頭いて、墓地に添つた路を草むらの方へと走つて行つた。その小さな姿が林を經だつた細い路をぐんぐん歩いて行くのが暫しの間見えてゐた。

幸子は胸が落着かなかつた。何うなることかと思つた。母親の愛に對して裏切つた形もかの女を惱ました。これを知つたら母親は何といふだらう？　また何んなに涙をこぼすだらう。それにしても何うしてこんなことになつたのか。母親の愛といふものはいつの時にもこんなに根强いものなのか。幸子は母親がそのため三日も食事を滿足に取らなかつたことを思ひ起して苦しくなつた。

しかしこの心は何うにもならなかつた。かの女はたゞ自分の運命が空間に烈しく流れて行つてゐるやうに感じた。

もはや取りかへしがつかなかつた。あの手紙があの停車場の前へと運ばれる。今、あの女の兒の手のそれがそのポストの中へと入れられる……。筧のところに配達される……。その結果は？　その成行きは？　たしかに反應なしではゐない……。かう思ふと、一面その身の大膽な行爲を後悔せずにはゐられないやうな心持がかなりに强く起つて來た。

村に添つた路をその女の兒の此方へともどつて來る姿がやがてそれと見えた。

『入れて來た？』

女の兒は點頭いて見せた。

『間違ひやしない？　別な箱に入れやしないでせうね』

『だつて、入れるとすぐ郵便屋が來て、かぎであけて、嚢ん中へ入れたもの……』

『さう、それぢや間違ひはないわね。ありがたう。……』

かう言つて幸子は帶の間から小さながま口を出して、中から十錢銀貨を一つ取り出してそれを女の兒にわたして、『これはお禮よ。だけど、誰に言つてもいけないのよ。お寺の東京の人に賴まれて郵便を出しに停車場に行つたなんて言つちやいけないのよ。おつかさんにきかれても、あそこで拾つたつて言ふのよ。わかつた？』

女の兒は二つ三つうなづいたが、そのまゝ向うへと走つて行つて了つた。

何となく落着かない不安な心持が續いた。一日は雨が降り頻つて雨だれが壞れた樋から瀧のやうに落ちるのが、かの女の裁縫に坐つてゐるところから見えた。そして本堂に通ふ廊下の向うには卯の花の白くかたまつて咲いてゐるのが終日寂しさうに濡れそぼちてゐた。かの女は賴まれて伯母の銘仙の袷を縫つてゐるのだつた。一日は半ば晴れて、時々青空がそこから覗かれた。午後には子供の葬式が來て、あるじの僧がころもを引き纏うて、廊下を本堂の方へと歩いて行くのが見え、やがて讀經の聲が低く唸るやうにきこえた。一日は伯母に伴れられて始めて町の方へと行つて見た。さびしい田舍町だつた。町の眞ん中を綺麗な水が流れてゐて、兩側の女たちがそこに來て物など洗つてゐた。

不安な日が猶つゞいた。

八六

袷を縫ひ上げてそれからかさねものをいつでも好いからと言つて幸子はまた賴まれた。かの女はうんざりして了つた。かの女の前にはひとつの光明をすら認めることは出來なかつた。

あの時やつた手紙の返事は、それはよこしやうがないので來ないのはわかつてゐるけれども、それでもその心の底では何等の反響が期待されぬでもなかつた。何等かの方法でそれがやつて來さうなものだぐらゐに微かに思へてゐた。かの女はわびしさに全く心が沈んで了はずにはゐられなかつた。もはや母親からのたよりだつて、また娘をなぐさめるためにおくつて來た小包の菓子だつて、縷々としてやさしく將來を戒めて來る言葉だつて、かの女の心を慰めるには足りなかつた。

かの女もかの女の內部に動いてゐる一塊肉も、このまゝ底深く沈んで行つて了ふやうな心持の日が幾日か續いた。じつとして針を動かしてゐると、涙がひとり手に縫つてゐる着物の上に落ちた。

かういふものかしら……などとも思つた。男なんていふものはこんなものかしら？　とは思はないまでにも賴りにならないといふやうな心持が頻りに起つた。それにその綿入のかさね物がつぎはぎだらけで面倒臭さゝが一通りでなかつた。しまひには氣も根も盡き果てたといふやうにしてかの女はよく本堂の方へと行つた。

伯母の顏も見たくなければ、あるじの僧の單調な、何の變哲もない、わるくきまり切つた顏も見るに堪へられないやうな氣がした。そこにあるものすべてが、わるく踏むごとにきしる廊下が、唸るやうな讀經が、庭の汚ない池が、その池に咲いてゐる菖蒲が、すべてかの女の心に眼に反撥するやうに映つた。後には腹立たしいやうな心持さへした。

時にはとてもたまらぬので、自分から逃げ出して行かうとも思つた。しかしそれも出來なかつた。彼女の財布には汽車賃すらもなかつた。雪子のことが頻りに頭に上つて來るやうな日には戀愛といふものの容易でないことが——海岸に一緒に行く頃には、かの女などにはそんなことは丸でわからず、雪子のやることをたゞ面白いと思ひ、あゝいふのが人生の快樂かしらなどと思つたものだつたが、それが雪子にしても自分にしても、こんな風に苦しみのたゞ中に落ちて了はうとは夢にも思はなかつたことなどが繰返された。それにしても何うしてゐるだらう。あの木村さんは何うしたらう。やつぱりあの政子といふ人と一緒に何處かに行つてしまつたまゝだらうか。それとも、もう雪子のもとにもどつて來てゐるだらうか。さう思ふと若い中こそお互に行つたり來たりしてゐるのでその消息もわかるが、今となつては何んなに苦しいことでもてんでに自分ひとりで苦しまなければならない。お互にその消息をきいたりすることも出來ない……。それは手紙をやりさへすれば向うでも返事ぐらゐはよこしてくれるだらうけれども、さういふことをきいてやる氣にもなれない……。やつぱり人間といふものは、ひとりでかうして

苦しんで行かなければならないのかも知れない……。そんなことをくり返してゐると、澤山な澤山な女たちが表面では何事もないやうな涼しさうな顏をしてゐるけれども心の內部では皆なさうした苦しみをひとりで苦しんでゐるやうな氣がし出した。かの女は本堂の柱のところに寄かゝつて、戀に苦しむものゝやうに、身を深くそのまゝそこに沈めてでもしまふやうにじつとしてしやがんでゐた。いつも來る子供たちも今日は其處等にその姿を見せてゐなかつた。

八七

ふと眼を擧げると、長い舗石道の山門に盡きた向うに——その外のところに麥稈帽の白いのが見えて、そしてまたすぐその扉のかげにかくれた。かの女の胸は急に高く波立ち出した。

それはたしかに筧であつた。

かの女はどうしたら好いかと思つた。喜ばしいには相違なかつたが、また男に捨てられてゐないといふ自信の裏切られなかつたことが深く喜ばれてゐるのは自分にもわかつたが、はたしてこのまゝ出て行つて好いか。幸子はわくわくと身の震へるのを感じた。

しかし現に、そこに筧が來てゐる以上、それに逢はずになど何うしてゐられやう。かの女は運命の河の烈しく流れて行つてゐるやうなのを感じた。かの女はある見えない力に引ずられるやうに、そのまゝ

そこを離れてあたりを見廻したが、そこには下におりて行くはき物も何もなかつた。と、同時に、向うでもそこにかの女の蹲踞んで居た形からすつくと立上つたのが眼に入つたらしく、今度はその白い麥稈帽ばかりでなしに全身をそこに、その扉の前のところへとあらはした。かの女はそれに向つてちよつと手を振つて見せた。

男も手を振つた。

幸子にはひとつの決心が強く強くやつて來た。かの女はわれを忘れたやうに、今行くから待つてゐよといふやうな合圖を見せて、さて今度は廊下を自分の居間の方へと戻つて來た。そこには面倒臭いところがあつたので、さつき縫ひかけて置いて行つたかさねものゝ綿入がそのまゝひろげて置かれてあるのをかの女は眼にした。幸子はそつと次の間を覗いて見た。そこには長火鉢が置いてあるのだが、いつもゐる筈の伯母の姿がそこに見えなかつた。勝手にでもゐるのかしら、それとも井戸端にでもゐるのかしらと思つてあたりを覗いて見たが、そこにもその姿は見當らなかつた。かの女は慌てゝ着物を着改へて、その不斷着をその衣桁のかけになつてゐるところにつくねて、今度は僅かばかりの金ではあるがそれの入つてゐる財布を帶の間にぎうと挾んで、芭蕉の葉の大きく出てゐる模樣の帶だけは持つて行きたいと思つたけれども、そんなことをしてゐて、見つけられてはそれこそ大變と思つて——何も彼もあとは置いとけと決心して、さつさと玄關の方に出て來ると、そこにかの女の下駄が隅の方へ竝べてあるの

を眼にした。そのままそれをつゝかけてすぐ眞直に出て行かうと思つたが、もしやそこの畑に伯母がゐるかも知れないと危まれたので、その下駄を持つて、本堂からそつと下りて、舗石道は行かずに、わざと墓場の中を拔けるやうにして、かねて知つてゐる横道からその筧の立つてゐるところへと行つた。

いきなりかれ等は寄添つた。幸子の眼には涙が出かゝつた。

『……』

『……』

二人とも何も言はなかつた。そのまゝ急いで畑に添つた路をずつと杜の中へと拔けた。

暫く此方へ來てから、『あそこの停車場には行かれないから、向うへ行かう。そして自動車でSの停車場へ行つて、あそこからH行きの電車で行かう』と呼吸をきるやうにして筧は言つた。幸子もそれに同意した。かれ等は話すひまも何もなしにすごすご歩いた。幸ひに町の角のところにSの方へ行く乘合が今出やうとしてゐた。二人は慌てゝそれに乘つた。自動車はすぐはしり出した。

八八

寺の主婦はその時厠に入つてゐたのであつた。しかもそこから出て來たあとでも、その間にさうしたことが起りつゝあつたなどとは夢にも知らず、そのくせ、幸子の居間の傍は通つて、そこにかの女のゐ

ないのをそれと現にその眼で見てゐるのだつたが、また退屈していつものやうに本堂にでも行つてゐるのだらうぐらゐに輕々に見做して、茶の間に來てやりかけてゐたその月の生計の勘定を算盤ではじいたり、またそれを出入帳につけたりして、一時間以上もそこにその身を落着けてゐたのだつた。それもやがてすんだ。それでもかの女はまだそれに氣が附かなかつた。

勝手元に墓掃除の爺の來た氣勢がしたので、寺の主婦はやつとそこから身を起して其方へと行つた。

『ひよんなことを言ふやうだが、あねさまゐやすかな？』

爺は全くの田舍訛で、手を揉み揉みこんなことを言つた。

『え？』

主婦にはそれが何の事だか丸でわからなかつた。

『あねさまゐせへすりや好いだが、今、辰の野郎がやつて來て、ひよんなことを言つてゐたでな…』

『何を言つてゐるんだえ？　お前の言ふことはちつともわからないね。辰が何うしたつて？　あねさまつて、一體誰だい？』

『あねさまつて、うちのあねさまでござりやす……。あねさまゐせいすりや好いだけど、今、誰か見馴れねえ若い衆とそこんところを並んで歩いて行かしつたのを、辰が見たと言うて、何うかしたでねえか？　お寺では、ひよつとかすると知らねえでゐやしねいかつていふで、それでおら來て見たんだが

――あねさまゐせいすれば好いだが――』

その爺のやつて來たわけがやつと飲み込めると同時に、主婦は慌てゝ立つて、奥の方へ行き、居間の方へ行き、それから長い廊下を本堂の方へ行き、障子を明けて裏の方まで遠く見たり何かしたけども、何處にもその姿の髣髴をも發見することが出來ないので、また慌てゝ、廊下を飛んでもどつて、

『ゐない！　ゐない！　何處にもゐない！』と眼を大きく丸くして、さも一大事が起つたといふやうに、わくわくとそこに棒立にたつた。

『ゐねえだか？』

『ゐない……ゐない』

『それぢややつぱり辰の言つたのが、本當だつたかな？　もう少しさつきぢやつたさうだがのう、おかみさま。並んで急いで歩いて行くから不思議ぢや思うて、それで、すぐ知らせに來た言うただが……うう、すぐ知らせに來べい思つたけれども、まさかそのやうなことあんめい思うて、馬鹿も休み休み言へ、そねえいなあねさまぢやあんめい、東京のあねさまはツて言つてゐただが、それぢややつぱりほんまぢやつたのかな！』

『それで、その辰の見たといふところは何處だえ？』

かうはきいたものの、寺の主婦はあまりに思ひがけないことなので、その起つた事件の周圍を後れば

せながらぢつと見詰めるといふやうにして――さういふ事件の世間に多くあることはかねて聞いて知つてゐるけれども、自分ではぢかにぶつつかつたのは始めてなので、それをあきれたといふやうな心持でぢつと見詰めた。

『兎に角、お前たち停車場の方と町の方へと手わけしてさがしに行つておくれ！』

寺の主婦はやがて夥しく慌てたやうにして言つた。

八九

『まア、あきれたもんだ。今の若いものには油斷もすきもありやしない……』こんなことを言つて見たところで、今になつてはもはや何うすることも出來なかつた。すべてがあとの祭だつた。あちこちに出した捜索の人たちもやがて皆な手を空しうして戻つて來た。町の方へ行つた男は、確に自動車で行つたらしいから、もうとうの昔に汽車に乘つて了つてゐる！　などと話した。そこに外に出てゐたあるじの僧が歸つて來て、また一しきりその話がくり返された。

『兎に角、東京へ電報を打つてやらにやいかん！』

で、あるじの僧の書いた電報賴信紙を持つて、墓掃除の爺はまた町の郵便局の方へと急いだ。

その日は汽車はもうなかつたので、寺ではあくる日の正午近くまで東京から來る人だちを待設けなければならなかつた。お糸が來るまでは兎に角にそのまゝにしておけ！　さうでないと話が出來ないからといふので、幸子の坐つてゐたところはすべてそのまゝにして置くことにした。縫ひかけた着物も坐つてゐた座蒲團も、退屈すると常にそれを手に取つてみるやうにしてゐた婦人雜誌も、その傍の小机の上に一昨日だつたか草原の中から薄紅色のなでしこをさがして來て手づからさした一輪挿も、すべてそのまゝに……。一夜はさうして過ぎた。その人はゐなくなつても、昨日と同じやうに、午前の日影は明るくそこにさし込んで來てゐた。

期待した小鹿野はやつて來ずにお糸だけが、その電報を手にして一夜の中にすつかり憔悴して了つたといふやうにしてそこに來て坐つた。『もう、私は今度といふ今度は呆れた！』お糸はたゞこんなことを言つた。いつものやうに涙を流さうともしなかつた。

寺の主婦は話した。

『當人は逃げる氣はなかつたんだけども、そこに迎へに來たもんだから、それで俄に家出をするやうになつたんだねえ……。さうだねえ、此處に來たことは何うして知つたかねえ。手紙など出しに行つた樣子はちつともないんだけども……何しろ不意にさういふ氣になつたに相違ない。だから、何にも持つて行つてやしない。着物を着かへて財布を持つて行つただけなんだから……。私の賴んだ袷だつて、こゝまで縫ひかけたまゝにしてある……。ほんのちよつとの間なんだからねえ。私が便所に行つて出て來

て、ちよつと用をしてゐる中に出て行つて了つたんだからねえ！』

お糸はうなづいては聞いてゐたが、そんなことは何うにもならないといふやうに――自分だつたらそんなすきをかの女に與へるやうなことはしないだらうといふやうに、むしろそれよりも娘の行先が案じられるといふやうに、ぢつとだまつてそこに坐つて居た。

『小鹿野さんは何うしたの？　家にゐなかつたの？』

『え、もうあの人は――？』

お糸は言ひかけてすぐあとを止して了つた。

『監督が行きとゞかないつて、怒つてゐるだらうね――？』

姉にはとてもこつちの苦しみなどはわからないのだつた。

『ほんに申譯がないことなんだからねえ！』

『……』

お糸はかうしてぢつとして起きてはゐられないやうな氣がした。あらゆる艱難――他から見てすらよくあゝして堪へ忍んでゐると思はれるやうな艱難にかの女はもはや打ち倒されさうになつた。『姉さん、それよりか、私に枕を貸して下さいな……』かう言つてお糸はそこに身を横たへた。

九〇

姉はそれでも茶などを入れて其處に持つて來た。

『もう構はんで置いて……』

『でも、お前、本當にすまんことをしたねえ……。隨分一生懸命で、姿がちよつと見えなくつても、すぐ大騒ぎをしてさがすぐらゐにしてゐたんだけどもね……本當に魔がさしたんだね。行くつもりでも何でもなかつたんだからね……』

『でも、何うしてこゝがわかつたらうと思ひますね。それが不思議だと思ふけども……。やつぱりこつちから手紙をやつたのかしら？』

『そんな樣子はちつともなかつたんだけどもね。寺の庭からそとへは一足だつて出たやうな樣子はなかつたんだけども……』かう言ひながら、姉はそこに持つて來た菓子鉢の羊羹を妹に勸めたりなどした。

しかもお糸は身はそこに横へたまゝ、起きもせずに、紙を帶の間から出して、その姉の挾んで呉れた羊羹をその上に置いた。かの女はとても起きて姉と話をする氣にはなれなかつた。平凡な、通俗な、他の苦しみなどには容易に入つて行けさうにもない姉と……。お糸は眼をまじまじさせながら、見るとも

なくただじつと空間を見つめた。

かの女は何うして好いかわからないやうな氣がした。もしこれが夫婦氣が揃つてゐたならば――二人の心が合つてゐたならば、何のやうにでもそれに對する手段が手早く取れたであらうが、またかうしたことも未然に防ぐことが出來たであらうが、それの出來なかつたのは、皆な自分たちのそぐはない生活のためではないかと思ふと、たまらない孤獨がひしひしとお糸の胸に押し寄せて來てひとり手に涙がにじみ出して來さうになつた。

お糸は昨夜から今朝にかけて、自分の心當りと思ふところに、三軒も四軒も電話をかけたことをくり返した。かれはお弓の許にも春子の許にもゐなかつた。否、始めは春子と一緒に何處かに出て行つたやうに思へたが、二度三度あちこちと別なところに電話をかけてゐる中に、春子には關係なしに、あるところにかれの醉つてゐることがわかつた。かれはヤケのやうになつてその電話に出て來て『そんなもの放つておけ？　何處かに行つて了つたもの爲方がないぢやないか。何うにもならんぢやないか。そんなところに行つたつて何になる！』と怒鳴つてそのまゝ電話を切つて了つたことをくり返した。お糸には小鹿野にそれとは別に何か心の懊惱することがあるのが、それとわかつたが、わかつただけそれだけ一層かの女はその身のつらくなつて來るのを感じた。お糸は今更ながらかれ等夫婦の生活を振返つて見ずにはゐられなかつた。（たうとうあの豫言が本當になつた！）かうお糸は獨語した。

それは他でもなかつた。かの女が武を姙娠してゐた頃、嫂にくつついて、自分を見て貰うつもりでも何でもなしに、ある易者に行つたところが、その易者は次手にかの女をも見て、この夫婦は非常によくないといふことをはつきりと豫言した。その時嫂は『何だね、まア、あの下手くその易者が……。あべこべぢやがね、私の方のことを言つてゐるんぢやがね。お糸さんなんか、あんな好い旦那さんを持つて、何んなにでも立派になれるがね？』かう言つたが、然もその易者の言つた言葉は長い間不思議にも忘れられずに、何ぞと言つては、いつもそれが深いとこから浮び上つて來さうに感じられたのであつたが、それが今、一層強くフエタルにかの女の胸に浮んで來たのだつた。

九一

小鹿野が家を外にするやうになつた時分、その身は子供だちの世話に忙殺されながらも、ふたつの心が次第に離れ離れになつて行くのを慨いて、それではとても子供がうまく教育して行かれないといふことをかなりに強く高調したことなどをお糸は思ひ起した。世間では家庭のことは兎角細君まかせにして、男はそとで働くものだからといふ風に多くは大目に見てゐるけれども、さうしてゐる中に、ふたりの心の生活はいつとはなしに全く離れ離れになつて了ふのだつた。それが何よりも恐ろしかつた。お糸はそこに二つの孤獨がいつとなしに釀されて行つたさまを歴々と思ひ浮べた。

（ふたりで氣を揃へて世話をしても、それでも、子供は自由にならないのに……それなのに……それなのに……）かう思ふといろいろな艱難が一時にそこに押寄せて來て、お糸はたまらなくなつたといふやうに顔に手を當ててすゝり上げた。

その時はゐなかつたが、やがてそこに入つて來た姉は、

『……お前……あまり心配しない方が好いよ。あまり心配して、今度はお前が體でもわるくしてはそれこそ大變だから……』

『……』

姉は肉身であればこそさう言つて慰めて呉れるのだけれども、しかもその慰めは慰めにならなかつた。姉のやうな單純な心の持主には、とてもこの自分の心の苦しみを本當に理解して貰ふことが出來なかつた。それが一層たまらなくかの女を悲しくした。

（誰もゐない……誰もゐない……自分を慰めてくれるものは誰もゐない……）お糸の胸には三年前に死んで行つた母親のことが胸一杯に思ひ出されて來てゐた。と涙がその全身を浮ばせずには置かないばかりに烈しく強く漲つて來た。かの女は手巾を出してそれを顔に當てゝ長い間止め度もなくすゝり上げた。

姉もしまひには何うすることも出來ないので、だまつてそこに坐つてゐたが、あることを思ひ出した

といふやうに、ちよつとと言つてそのまゝ向うへ立つて行つた。

これまで經て來たさまざまの艱難が、それからそれへとひとつの繪になつてそこに展げられて來るのをお糸は見た。そこに何も彼も捨てゝ、捨てゝたゞ子供等のために運命に順つて來たかの女がゐる。その中にはその中にはと思つて堪へに堪へて來たかの女がゐる。さういふことは小さなことだ、人生はそんなことに拘泥してゐてはとても遣つて行けない、かう思つてせつせと働いてゐるかの女がゐる。それに、かの女とてさう虐げられて生きて來なければならないやうにのみ運命づけられてゐるのではなかつた。若い中なら何うにでもなつた。また小鹿野のやうな男でなくとも、もつと好いと思つた男も澤山にあつた。武が生れた時分死んだ母親が將來を心配して、とてもいけないものなら、今の中に何うかした方が好い……子供子供つてお前は言ふけれども、自分の身は子供には換られないと言つたことも一度や二度でもなかつた。しかしお糸はそれを堪へ忍んで來た。子供たちのために堪へ忍んで來た。否、夫婦の間柄だつて、さういつまでもさうした狀態であるものではあるまい。小鹿野の心だつて、その中には自分の方へもどつて來るだらう。自分の堪へ忍んだ心がそれで本當に理解される時が來るだらう。子供も大きくなつて段々自分の力になつて呉れるだらう。さう思つて今までやつて來た。それなのに、それは何う酬いられたか。これまで經て來た孤獨は一生かの女から離れやうとはしないばかりではなく、希望をかけたことは皆な一つ一つ虹のやうに消えてなくなつて了ふのだつた。幸子のことから考へて、武

だつて何うなつて了うかわからないのだつた。艱難と孤獨とは、今になつて一層はつきりとその正體をお糸の前に展げた。

九二

『それでお前、何うする氣だえ？』

姉はやがて話をそこに持つて行つた。

『……』

お糸には返事が出來なかつた。

『小鹿野さんは、何ういふつもりなんだえ？』

『何しろ、歸つて來ないんですから……。それをきくことも何も碌に出來なかつたんです……』

『でも、たゞ怒つてばかりゐるといふわけでもないんだらう？』

『それはさうでせうけどもね。電話ではたゞ放つて置けつていふんですけどもね……』お糸は考へて

『ことに由ると、あとから來るかも知れないと思つてゐるんです……。まさか、いくら何だつて、ただ放つて置くといふわけにも行かないでせうからね……』

『小鹿野さん、やつぱり此頃でも遊ぶのかね？』

姉の言葉にはいくらか笑ひが含まれてゐた。

『何うもわるい癖がついて了つたもんだから……』

『でも、さうして遊んでゐられるんだから結構だけど……』

『ちつとも、結構なことなんかありやしないんだけども……』

お糸はそんなことを姉にきかせたところで、とても本當のことを理解して貰ふことが出來ないのを知つてゐるので、これまでついそれについて深い話をしたことはなかつた。姉はまた姉で、他からちよいちよいその噂をきいて少しは知つてゐないこともなかつたけれども、さうした道樂を別にわるいこととは思つてはゐず、お金があるから出來るのだくらゐに輕く思つてゐるばかりでなく、時にはそれを羨しがつて、自分の夫などの何んなことがあつてもいつもきちりと歸つて來るので甲斐がないやうにさへ思つてゐるので、小鹿野に對して理解をこそ持て、妹と一緒になつてゐるのを責めるやうな態度には出ることは出來ないのであつた。『生活を困らせるやうなことをすれば、それは男がわりいんだけども、それさへ大丈夫なら、何も言ふことはないぢやないか。さういふことは男の器量だからね。しつかりしてゐさへすれば少しくらゐやつたつて何でもありやしないよ。つまらなく嫉妬をやいたり何かするから、それで一層わるくなるんだよ。放つて置けば、ひとり手にあきてくるよ』いつかもちよつとその話をしかけたら、かう言つてすぐ否定されて了つたのをお糸ははつきり覺えてゐた。

『それで、その連れ出して行つた人は、お前も知つてゐるんだらう？』
『知つてゐるには知つてゐるけど……』
『小鹿野さんも知つてゐるんだらう？』
『それは知つてゐるけどもね……』
『前にはお前の家にだつて、よく來てゐたことがあるんだらう……？』
『でも、そんなに親しくしたわけでもないし……幸子だつて、何うしてそんなになつたかはつきりとはわからないくらゐなんですから……』
『別段、わるい人ッていふわけでもないんだらう？』
『とてもダメ……』
お糸は急に面を擧げるやうにした。

九三

『だつてお前、さういふ體になつてゐては、あまりかたいことも言へないやうなもんだね……？』
『だつて、そんなことを通させるわけには行きませんね……。誰が何と言つたつて、それは出來ない。あとの子供等のしめしにもならない……』

いつものお糸の柔かなやさしい言葉の調子とは丸で違つてゐた。
『でも、非常にわるい人とか何とかいふのでなければ、當人まかせにする方が好くはないかね。その方が當世だよ。誰だつて皆さうしてゐるぢやないか。……』
『それぢや親は丸で骨灰ね……。親が一生懸命になつて育てたものを、いくら當人同士が好いからと言つて、わきから來て、鳶が油揚でもさらふやうに平氣で持つて行かれてそれでだまつてゐられますかね。そんな道理は通らない……』
お糸にしては、この場合いかやうにも自分に同情してこの心の苦しみと孤獨とを慰めて呉れるのが本當であると思つてゐるのに――たとへ腹の中ではさう思つてゐたにしてもそれを口に上ぼすべき筈のものではないと思つてゐるのに、さういふ風に若い人達に肩を持つやうな言ひ方をするのがたまらなく心外で且つ腹立たしかつた。
『それもね、あゝなつてでもゐなければ、また考へやうもあるといふものだけれど……』
『姉さんは、大きくなるまで子供を育てた經驗がないから、それでそんなことを言ふのよ……。娘に對する母親の心持つていふものはそんな輕い、うはつらなものではありませんよ』
『まア、それはさうかも知れないね』いつも笑ふ輕い笑ひを姉は口のあたりにたゝえながら、『それは、まアね、今はさう思つてゐるだらうけどもね。それは私にもわからないことはないけどもね。當人

同士が思つてゐるのに、それに逆らつて見たところで、それは無駄だからねえ！　さういふことも度々見て知つてゐるけれども、親の方で勝つたためしはないからね』

『だつて、勝ち負けでやつてゐることぢやありませんもの……』

かう言つたお糸の言葉には、母親でなくては――子供を大きくした經驗を持つたものでなくては、とても言へないやうな嚴肅さとまじめさとがあつた。お糸はいつもとは丸で違つた一種の興奮をそこに見せた。

『まア、さう言へば、さうだらうね……』姉は依然としてその輕い笑ひを口のあたりに湛へてゐた。

『負けたつて好いんです……。そんなことを問題にしてゐるんぢやないんです。親としてするだけのことをしなくつてはならないからするんです。さうしてつよく反對してやるのが親の慈悲なんです……。それでなくては人間の道が立ちませんからね』

『……』

姉も流石にだまつて了つた。

『かういふ風に強く反對してくれる親があるといふことは、幸子に取つて仕合と言つて好いんです。姉さん、私なんか、私なんか、誰だッてさう言つて反對して呉れるものがないんですよ、もう……。一人だつて私に本當のことを言つてくれるものはないんですよ……』姉さんなんかは、そんなのんきなこ

とを言つてゐられるから好い。孤獨を孤獨とも思はないやうに暮してゐられるから好い。人間のつらいつらい心の生活の底まで入つて行かずにゐられるから好い。本當の自分の子が二人まであつたのに、それを置いて、こんな田舍寺に再緣して來られるやうな人だから好い。『私は……私は……私は』お糸はまたたまらなくなつたやうに左の手を眼に當てゝ烈しく泣き出した。

九四

暫くしてから、姉は言つた。

『まア、そんなに悲しんだり何かしたつて爲方がない……。皆さうなんだから。さういふ風に親と子供とは出來てゐるんだから……。それはお前がさういふ風に言ふのは、それは決してわるいとは言はないけれども、そのため心配して自分の體でも壞したら、それこそ取つてかへしがつかなくなるからね……』

お糸はだまつてまたすゝりあげてゐた。手は顏から離したけれども、まだ落附いた心持などになることは出來なかつた。姉のやうにそんな氣樂な心持でこの世が渡られたら好いだらう。そしたら問題も何もないだらう。何んなことに出會しても、笑つて通つて行くことが出來るだらう。こんなことを考へながらお糸はじつとして坐つてゐた。

それにかの女はこれまでついぞ小鹿野のことについて他に話したためしがないので、姉とてもそれについては別に深いことも何も知つてゐないのだつた。それはあちこちからきいたり何かはしてゐる。小鹿野に女があつたり道楽をしたりするといふことは知つてゐる。しかし姉の考へでは、それはむしろ羨むべきことで、お金があるから、さういふことも出來るのである。それは男の器量とも言ふべきものである。別に咎むべきほどのことではない。金さへあれば、男といふ男は皆なさういふ風になるのがあたり前だくらゐに思つてゐる。それから比べると、家のあるじなどは、それはお金がないからであらうけれども、歸るなと言つてもきちんと歸つて來る。一夜ぐらゐさうしたおもしろいことを人並にして來たら好いでせうなどと言つても、そんなことは丸でわからないものかのやうににやりとしてゐる。たよりないこと夥たゞしいなどと姉は思つてゐるのである。從つて小鹿野のことなどにも別にわるいとも何とも思つてゐないのである。

『一體、お前はおつかさんに似たと見えて苦勞性だね……？』

『だつて……』

『おとつさんもおつかさんの神經質なのには困つてゐたことがあつたよ。おぬしは氣が小さくつて何うも困る。何にもわけもないのに一日むつつりして不機嫌に坐つたりしてゐる。何うしてあゝいふ風だかなんと言つてゐたけども、お前がやつぱりそれだね。もう少しからつとするやうな氣分におなりよ

……』

『だつて、さういふ性分だから爲方がないでせう？』

『それはさう言つて了へばさうだらうけれども、もう少し手前のところにゐて、事をする方が好いよ……。それはね、今そんなことを言つちやいけないかも知れないけども、さうかたくばかり行つてゐたつてしやうがないからね』

『……』

お糸は何と答へやうもないのでだまつてゐた。姉といふ人が世間並で、通俗で、とても人間の深いところまで入つて行けるやうな質でないことは、それは昔から知つてゐたけれども、しかもそれほどとは思つてゐなかつた。お糸は深い深い溜息をついた。

しかしそれが、その姉の言ふことがいはゆる世間であるといふことは、それはお糸にもわからぬではなかつた。今度のことだつて、さういふ風に解決をつければ何の事もないのであつた。幸子も喜べば筧も喜ぶのであつた。しかしお糸はさういふ風に輕くこの人生を考へたくなかつた。否、そんな氣分で滿ち足りてゐることは出來なかつた。

そんな風に丸で取合ないやうに言つたけれども、それでも午後の汽車で、小鹿野はそこにその姿を見せた。

姉は妹にも言つたやうに、その監督の不行屆を詫た。そしてまたくどくどとその一伍一什をそこに竝べた。しかし小鹿野は默頭いてきいてゐるだけで、別に何事をも言はなかつた。

お糸の見たところでは、わるく悄氣てゐるやうに見えた。

かういふ時には例としてあまり強い調子で物を言つてはならないことをお糸は本能的に知つてゐた。暴風雨をその底に藏した沈默――前にもさういふ時に物を言つてひどい憤怒を激發したやうな場合をお糸は二三度も經驗してよく知つてゐた。

來てそこに坐つて間もなく、かの女は彼に向つて、『それで一體何うしやうツていふんです？』と言つた。かれは苦虫を嚙みつぶしたやうにしてだまつてゐた。

『放つて置くツていふわけにも行かないだらうと思ふんですけども……』

『だつて、何うにもしやうがありやしないぢやないか？』

突放すやうな調子で小鹿野は言つた。その言葉のかけには、さうした娘の行爲に對する憤激ばかりではなく、もつと自分に對する自暴自棄見たいなものが雜つてゐるのがお糸にもそれとわかつた。お糸はそのまゝだまつて了つた。

お糸はその表情の中からいろいろなものを探すことが出來るやうな氣がした。お弓や春子をさがすことが出來るやうな氣がした。それもさういふ人たちに對して滿ち足りた心持ではなく、とても自由にならない焦燥を、何處まで行つても第三者がついて廻つてゐる苦しい悶えを感じてゐるらしいのを探すことが出來るやうな氣がした。とても出來ない事をしやうとしてゐる男のあさましさと何處まで行つても女の心を本當につかむことが出來ない男の愚しさがはつきりとそこに巴渦を卷いてゐるのをお糸は見た。おそらくかれはその春子にも背を向けられつゝあるに相違なかつた。それもその筈だ。あゝいふ女がさういつまでもひとりの男に滿足してゐるわけがない。好い方へ、面白い方へと引張つて行かれるのは當り前のことだ。それを知らずに好い氣になつてゐるから、それで時々煮湯を呑まされるのだ。それでゐながら、自分では一廉女のことはよく知つてゐるやうなことを言つてゐるんだから――。あのお弓だつて、かけにそれを操つてゐるものがあるのはよくわかつてゐるのに――この身が一二度逢つたのでさへそれとわかるのに――そんなことは夢にもないと信じ切つてゐるのだから――お糸はそんなことを胸に浮べたが、しかしだまつたまゝ、何も言はうとはしなかつた。

姉はそんなことには頓着せず、また此方に來てべたりと坐つて、さつきお糸に言つたやうな話を持出した。

『だつて、さう簡單にも行きはしませんね』

やつぱり小鹿野は贊成出來ないやうな調子で言つた。

『だつて、かうして放つて置いては、あの子だつて可哀相だ……。まさか命も捨てるやうな事もないだらうけれども、若いもの同士は困るのにきまつて了ふのだから』

『困るくらゐ當り前よ！』

傍からお糸が言つた。

九六

『子供の教育なんか、とても内では出來ないんですからね……』

さうした言葉が出るともなくお糸の口から出た。

『馬鹿を言へ……』

小鹿野は急に激したといふ形で怖い張詰めた顏をした。

『だつてさうぢやありませんか。一家のあるじが内を外にしてあそんでゐるんですもの……』

『それよりも貴樣がわりいんだ。貴樣の監督のわるいことは棚に上げて、勝手なことを言へ』

『だつて事實なんですもの』

『何が事實だ――』

『家庭では……家庭では、ふたり氣を合せて子供達は教育しなければならないのに……そんなことはすこしも考へてゐないんですもの……。俺は俺の勝手だ。子供の爲め自分のしたいこともせずにゐるわけには行かないッていふ方なんですもの……。それはあなたは平生口で言つてゐるぢやありませんか。だから家庭なんかうまく行くわけがない……』

『うまく行かなければ勝手にするが好いぢやないか……。實際、さうだもの、子供のために自分のしたいことをせずにはゐられんもの……。子供と自分とは存在が違ふんだからな……』

『それ御覽なさい、あの通り……』にこにこしながら坐つてゐる姉に顏を向けるやうにしてお糸は言つた。

『だつて、小鹿野さんには小鹿野さんの考へ方があるんだらうからね』

姉は傍からなだめるやうに言つた。

『だつて、さういふ考へ方をして家庭がうまく行くわけがないんですものねえ』

『馬鹿を言へ……。一體、何うしてさういふ考へ方をするのだ……。今度のことは俺のやつたことぢやない。子供がやつたことぢやないか。それまで責任を俺に負へとお前は言ふけれど、そんな馬鹿なことが出來るか。子供は勝手にさういふことをしたんぢやないか。それでも俺がわるいといふなら、何とでもお前の好いやうにしたら好いぢやないか……』

『何ぞといふと、すぐあゝなんだから……』お糸は行きがかり上默つてはゐられなかつた。

『だつて、さうぢやないか』

『男らしくもない。さう思つてゐるのなら、ぐず〳〵言はずに、さうしたら好いぢやありませんか。家庭をやめて了への何のッて？　そんなことを口でばかり言はずに、ぐん〳〵さうしたら好いぢやありませんか。……とても、出來もしないくせに、女のあとなんかばかり追廻してゐるんですからね』半ば姉に話すやうにして言つた一言であつたけれども――平生ならばさうした言葉も他の笑ひを買ふくらゐにとゞまつてゐたであらうけれども、しかも今はさうは行かなかつた。小鹿野にもその一言がぐつと來たことが他にもそれとわかつた。

『大きなお世話だ……。さういふ風にお前が考へてゐるのなら、勝手にしたら好いぢやないか？』

『勝手にしますとも……勝手に出來るやうにして下さい……私だつて、たゞあなたにくつついてゐたいんぢやないんですから、かうしたお婆さんになるまで、あなたの犧牲になつたんですから、それを償ふやうにして下さい。さうすれば、いつだつて勝手にします……』お糸はいつもに似合はず強い調子で言つた。

九七

『勝手にするさ』

小鹿野は坐に堪へないといふやうにして立つて、そのまゝ縁側のところに行つて蹲まつた。

小鹿野は夥だしい憤怒を感じた。つゞいてあさましさを感じた。以前からずつとつゞいて來てゐるふたりの悲劇――落附いて居る時は何でもないが、他から見ても平和な幸福な家庭に見えるが、いつもぐつと押しつめて行けば結局は何うにもならない破綻、性質の違ひとばかり言つてはゐられないやうな不可思議な背馳、九星の判斷にでも任せて了ふより他には何うにもならないやうな感情の衝突、さういふものがまたしてもはつきりと一杯にかれの胸に横たはつた。丸でそこに大きな棒杭でも幅をして置かれてでもあるやうに。

（今でも遲くはない。はつきりと處分して了ふ方が好い。その方が好い。その方がお互ひの爲めだ……）かう殆ど口に出かゝつて來るばかりにその考へがかれの胸に漲りわたつた。それにしても何遍さういふ考へのわかれ道にかれは其身を置いたであらう。また何遍それを思ひ返したらう。兎に角自分さへ堪へれば好いのだ。さうすればお互に幸福にはなり得ないまでにも他目には何の事もなく平和に見えるのだ。またかれ等の生活の破綻も世にあらはにされずにすむのだ。かう思つてかれは出來るだけの努力と忍耐とをして來たことをくり返した。しかしそれがわるかつたのだ。もつと早く何うにかすれば好かつたのだ。親からは平氣で遁げて行くやうな子供のために犧牲になどなつてゐたことが親馬鹿だつた

のだ。しかし……しかし今更そんなことが敢行出來るか。この年してそんなことが出來るか。子供のことで大騒ぎをしなければならない位置に身を置いてゐるかれ等にそんなことが出來るか。そんなことを考へるだけでも變な心持がするではないか。かれはこゝまで考へて來て、いろいろなことが渦のやうにその胸に簇つて來るのを何うすることも出來なかつた。春子の相手が急に氣になり出した。重役のこともあるが、それよりもその相手が何うやら小川らしいといふ氣がした。勿論、それはまだ疑とわかつたわけではなかつた。さういふ氣がし出したのが昨夜からだつた。まさか小川が春子に手を出しはすまいと思つてゐたのであつたが、何うもこの頃小川から手紙が來すぎる。また度度何處かで逢つてゐるらしい形跡がある。話を持出すと、元はあまりよくは言はなかつたものだが、此頃ではわるく氣が合つてゐるやうなことを言つてゐる……。こゝまで思つて來ると、小鹿野は體が搖ぶられるやうな氣がした…。

小鹿野は内からも外からも萬難が押し寄せて來たやうな焦々しさを感じた。かれはそこに蹲つたまま兩手を額に當てた。何うにもならないやうな氣がした。何も彼も打壞して、この身ひとりにならう。お弓も春子も皆何處にでも行くが好い。お糸ともこれを機會に今までの生活の不合理を解決しやう。幸子は自分でさういふことをしでかしたのだから、勝手にするが好い、あとなど搜す必要もない。いけなければいけないで歸つて來るだらう。いや、その時にはもはや歸つて來る宅もないだらう。それでこそあいつの眼もはじめて覺めるだらう。さうだ、さうしやう。かう思つて小鹿野は身を起さうとしたけれど、

心がまだ何處かで春子にひつかゝつてゐて、それも容易にてきぱきと實行されさうにも思へなかつた。

九八

さうしたもだえに雜つて幸子のことが混雜とそこに簇つて來た。勿論それはいくらか離れた追憶風のものでも傍觀的のものでもなかつた。ぴたりと直接に來た。(馬鹿な奴だ！) かう罵つて見ても、結局それは本能を罵つたやうなものだつた。自分だツていくらも違はずにそれをやつてゐるのだつた。理性ではいろ〳〵なことも考へるし、自分の髪の半ば白くなつて來てゐるのもわかるし、子供たちの上に立たなければならない身でありながら、いつまでも出來もしない戀愛に心を惱ましてゐる愚さをも悟らないわけでもなかつたけれども、しかもいざとなればぐんぐんそれに引摺られて行くのだつた。情ないと思ふこともたまにはあつたが、その十の八九は盲目的にたゞ引摺られて行くといふ方が本當に近かつた。小鹿野は刹那的に打壞してはまた新なものをつくり、またそれにも面白くないことが起つて他に移つて行くやうな徑路を戀愛の上に取つてゐたけれども、しかもいつの場合にもそれを輕く取扱ふことが出來ないので苦しめられた。かれは自分に女運がないのを何遍も何遍も考へた。それに世間の人達の大多數は細君と睦しく暮してゐるやうに、結局は所謂共白髪といふものに向つて進みつゝあるやうに見えた。さうでないにしても、かれ等くらゐの年恰好になつたものは、何等かの形で女の心を一つは必ずしつかりとつ

かんでゐるものが多いやうにかれには見えた。何處にかれのやうな年でいまだにそんな風にもだえてゐるものがあるだらうか。これといふのも畢竟かれの妻と彼との間は不合理の形でつゞいて來て、それを何うかしやうにも、何うにもならずにわるく堪忍づよいやうなところが二人の星の内にあるので、その爲に何うにもならずに今日まで來て了つたことが、ひとつのかうした悲劇を形つくるもとであつたのであつた。それははつきりとかれにわかつた。しかしさうとわかつてゐたにしても、それを何うすることも出來なかつた。かれ等の間柄は、子供だけで縛られてゐるのならまだ何でもないがそれ以上にいろいろのもので縛られてゐた。金で縛られてゐる形などは中でもことに大きなものであつた。それは小鹿野ばかりではなく、かの女自身もさうであるに相違なかつた。別れやうなどと思ひ詰めた時には、まだとても駄目だから、今の中なら何うか出來るかも知れないから、さういふ徑路を取らうと決心した時には、きつとその金の繫縛がやつて來て、それを何うしても離れられないやうにした。それに長い間の空氣、兎にも角にも一緒に長い月日を經て來たといふ空氣、むしろその間に子供といふものがつながつてゐる肉身の繫縛、それがいつも出て來てその燃え上つて來た心に水を澆いだ。否そのために、そのかれの前にあらはれて來る女のひとつの心をさへ本當につかむことは出來ないといふ形になつた。そしてそれはかれにもよくわかつた。結局男と女とは一夫一妻だなどといふことをかれは常に深く考へた。かれはこのごろの日記に、『結局、われ等の戀愛生活は失敗、つゞいて夫婦生活も失敗、それでゐながら戀愛のことに就て人一倍知つてゐるやうな顔をすることは不合理である、敗軍の將は兵を談ぜずといふことがある。これからはたゞ沈默するを可とす……』こんなことを書いたことを思ひ出した。と、今度は自分の娘の戀愛がさういふ姙娠狀態になるまで丸で知らずにゐたその身の愚かさがひしと身に逼つた。腹立たしさが全身に漲つた。

九九

どうにもならないで、ふたりはすごすごと引返した。

かれ等は滿更話をしないでもなかつた。また話をすればしたで、むつとしてばかりもゐられないやうな氣分にもなつて行つた。

『だつて、爲方がないぢやないか。そんなことまで親に責任が帶びられるかえ？　親よりも子供の方が責められなければならないことぢやないか……』

『それはさうでせうけどもね。世間ではさうは言ひませんからね。一番先に親がわるいッて言ひますからね。子供のことはわるくは言ひませんからね……』

『いゝぢやないか、世間なんか何う言つたつて？』

『だつて、親類に顏を合はすのだつて、きまりがわるい』

『ぢや勝手にするサ』

停車場まで行く田圃道を歩きながら、かれ等はこんな言葉を合せた。角に百姓の家が一軒あつて、その向うが草叢になつてゐる。そこには蟋蟀がギ、ギと啼いてゐる。草の葉末が街道の埃にまみれて白くなつてゐる。かれ等は暫くだまつて歩いた。

『やつぱりさうだつたんですね？　此方から手紙をやつたんですね？』

いくらかあとからついて歩きながら、思ひ出したやうにお糸は言つた。

『……』

何か言はうとしたが、思ひ返したといふやうにしてだまつて小鹿野は歩いた。

『やつぱり他人は駄目だつたんですね。家に置けば好かつた……。姉だから十分監督して呉れると思つて、こんなところによこしたのが間違ひのもとね』

『あたり前さ……』

さう言つたきりで小鹿野はすたすた歩いた。

街道の中程から折れて、そのまゝ細い道を左に入つた。小さな泥川が殆ど水もないくらゐに乾いて青臭い泡がぶつ〳〵立つてゐるのをかれ等は目にした。名は知らないが黄い小さな花がところどころに咲いてゐた。

『それで一體、何うしてゐるでせうね？』

『そんなことわかるもんか……』

『それはわからないのはわかつてゐますけども、こまつてゐるだらうと思つて……？　手紙は此方から出してやつたにしても、まさかすぐ迎へに來るなんて思はなかつたでせうね！　爲方なしに出て行つたんだと思ひますからねえ……。今ぢや困つてゐるだらうと思つて！』

『そんなことがあるもんか。向うぢや百年目だと思つて、平氣でやつてゐるサ。困つてなんかゐるもんか。お前なんか、だからだめだつていふんだ。親馬鹿の好い標本見たいなものぢやないか……』

『だつて、さうばかりは言へませんよ。親に背いてそんなことをすれば、決して好いことはありやしませんからね。今に……今に……親のことが思ひ出されて來ますよ。さうでなくちや、人間はあまりにつまらない……』

『それはしかし今のことぢやないよ……。五年か十年經つてからのことだよ。しかしそんな時になつて思ひ出されたつてしやうがない……。何うせ、子供には親なんか何うだつて好いんだよ。自分さへ勝手なことをしてゐればそれで好いんだよ』物でも投げつけるやうな調子で小鹿野は言つた。草むらの蟋蟀は頻りに啼いた。

一〇〇

『あなた、何處か心當りがない？』

さつきはあんなに尖つた口のきゝ方をし、今だツて碌に相手にはなつて貰へないのであつたが、それでもさう問はずにはゐられないほどお糸の胸はその娘で一杯になつてゐた。

『……』

『無論、あそこにはゐないでせうが、さうかと言つて、何んなところに行くところがあるのだか、ちつとも私にはわからないし……それでもあなたはいくらかは心當りと言つたやうなところがあるでせう？』

『何うして？』

『だつて世間がひろいから？』

『知らん――』

小鹿野はぶつきら棒に頭を振つた。

かれからはまだその焦立たしい心持は除れてゐなかつた。普通ならば、滅多に二人がこんな田圃道を歩く機會などはないのではあるし、あたりの空氣だつて靜かでそしてのんきだし、多分に回顧的氣分に

浸されるのが本當であるのに――否、小鹿野にしても、さう思はぬでもなく、さつきも小川の緣を通る時、これもかれ等の所謂失敗した結婚生活を繪卷にするとしたら、その中の一枚の繪になる光景だなどと思つて、いくらか追憶風な考へに耽りかけたのであつたが、しかしかれはすぐそれを打壞して了ひたい氣分に强く促された。娘や妻のことなど何うでも好いやうな氣もした。

お糸はしかもその煩さい質問をやめなかつた。

『投つておくツていふわけにも行きませんね？』

『さうかな――』

木で鼻をくゝつたやうなそつけのない返事を小鹿野はした。

『そら、あなたがいつか仰しやつたKさんといふ人がありますね。やつぱり雜誌なんかに關係してゐる？　あそこらに行つてきいたらわからないでせうか？』

そのKといふのは、小鹿野とは反對の立場にゐるやうな人だなどといふことは、お糸にはわからなかつた。

小鹿野はすぐ否定した。

『そんなこと出來るもんか』

『さうでせうかねえ……。そのKさんなどのところに始終行つてゐるやうな人ぢやないんですか？』

『そんなこと知らん』ぶつきら棒に小鹿野は言つて、『よしんばさういふ人に懇意だつたとしても、そんなこと話せるか話せないか、常識で考へて見たゞけでもわかるぢやないか……』

『さうね、さういへばさうね』お糸はそれにはしよげて、『めつたなことは他には言へませんからね？』

『あたり前さ……』

『新聞に書かれないとも限りませんからねえ――』

『だから暫く放つて置くより他しやうがないつていふんだ……』小鹿野もいくらかそつちに引寄せられるといふやうに、『放つて置けばその中には何處かからわかつて來るよ……。かうなつて了つては、騷いだつてしやうがないからな。なるやうにしきやなりやしない……。馬鹿々々しいや……』

『困りますねえ……。何うしてあの子がそんな大それたことをして呉れたんですかねえ。もつと前に言つて呉れれば何うにだつてなつたのに――』

『まアよせ！』

お糸の繰言が始まりかけたので小鹿野はかう言つてぐんぐん歩いた。停車場は段々近くなつて來てゐた。別なレイルを人夫たちが五六人でエイエイ懸聲を立てて荷車を押してゐるのがそれとひろい綠の野に浮びあがるやうに見えた。

一〇一

停車場近くに行つた時には、二人は言ひ合せでもしたやうに默つて了つた。かれ等はてんでに自分を中心にしたひとつの空想境見たいなところに深く深く入つて行くより他しやうがなかつた。

まだ十五分ほど間があつた。切符もまだ賣つてゐなかつた。かれ等は待合室のベンチに竝んで腰をかけずに、小鹿野は此方の隅、お糸は向う側に後向きといふ風にその位置を占めて、互にそのひとりを勝手に自由に考へるといふ風にしてゐた。

そしてそのかれ等の近くを、田舍の紳士見たいの人だの、メリンスの赤い帶をした娘だの、大きな荷物をかゝえたお上さんだのが騷々しく行つたり來たりした。

小鹿野の頭には流石にさまざまのことが通つて行つた。しかしそれは皆な口に出して言つてもしやうがないやうなものだつた。またこれまでにも度々考へて見たやうなことだつた。かれに取つては、已にその身が老境に入つて行つてゐながら、依然として昔のまゝであることが腹立たしかつた。いつまで行つたら、かうした心から脫却することが出來るのだらうと思つた。續いてかれはさうした事實の上に、兎角かれの妻や親戚の誰彼や世間の人たちが、ひとつの理由見たいなものをくつつけて、これはかうだからさういふ結果になるとか、さうだからさういふ報酬を得るとか言ふのは、それは非常に間違ひであ

るといふやうに否定したかつた。自分がやつてゐるのは自分がやつてゐるだけのことだ。誰にも關係はない。妻がやつてゐるのは妻がやつてゐるだけのことだ。誰にも關係がない。また幸子がやつてゐることだつて、幸子自身が止むに止まれない要求に迫られたためにやつてゐるだけのことだ。否、春子のことだつて、お弓のことだつて、ひとつとしてそれでないものはないのだ。何もそれに理由をくつつける必要はないのだ。皆な別々のことだ。親だつて、何も子供のやつたことについてそんなに責任を帶びなくつたつて好いのだ。ひとり手にしたいことをさせておけば好いのだ。もし小川が春子と何うかしてゐるとすれば、それもひとつの現象として面白いではないか。あゝいふ戀愛觀を持つてゐる男がたうとうそれに引つ張られたといふことも、ある眞理をそこに展げてゐるやうなものではないか。みんなひとつの存在だ。てんでのことだ。それを皆なが互に理由をつけすぎるからいけないのだ……。皆なひとりでやりたいことをやらせて置けば好いのだ。やつて見ていけなければ引返して來る。またあまり深入りをしたために命を失つたりしたところで、それも自分でやつたことのためなら何うも致し方がない。誰も怨むせきはない。だから人間のことはそれで好いのだ。自分等の生活だつて、とゞのつまりいけなければやめるばかりだ。何も問題はありやしない……。ふと氣が附くと、已に切符を賣る口は明いてゐて、そこに多勢人がたかつてゐるばかりでなく、それに雜つてお糸が眞面目な顔をして、それでもそのことのためにわるくやつれて、少しは痩せたかも知れないぐらゐな沈んだ顔容で、切符を買つてゐるのがそれ

となく小鹿野の眼に映つた。かれはこれもひとつの存在だと思つたが、長く一緒にゐたといふことの上に一つの情味に近いものが釀されてゐるらしく、何となく可憫さうな氣がして、娘がさういふことをしたといふことよりも、母親がかうまで苦しんだり悲しんだりしてゐるといふことの上に、一種深い同情がひとり手に寄せられて來るやうなのを感じた。

一〇二

汽車が來て二人は乘つた。

別に込んでゐるといふほどではなかつたけれども、二組の夫婦が其の二等室に乘つてゐた。向う側にゐるのは、子供は女の兒でまだ十三四ぐらゐであつたけれど、夫婦はかれ等と一つか二つ下ぐらゐの年格好で、やつぱり東京のものらしく、バックの中にいろ〳〵な菓子などを持つて來て、細君の方が頻りにそれを自分の亭主に勸めたりなどしてゐた。傍目にもいかにもむつまじさうに見えた。もう一組の方は、それよりはぐつと年が若く、女の方はちよつと小綺麗で、ことによつたら若い時を二三年花柳界にゐはしなかつたらうかと思はれるくらゐだつた。年は三十四五で、ダイアの指環も二つまではめてゐた。旦那といふのは、立派な肥つた人で、東京者ではないが田舍でも金持の、ハイカラな、新しい知識に富んだ、尠くとも縣會議員くらゐはしてゐるだらうと思はれるやうな風采だつた。これがまた二人で頻り

に話した。時には細君でないのに細君のやうな格好をしてかうして並んで乘つてゐるのかしらと思はれるくらゐ顏を合せて熱心に話した。後には二人並んで後を此方に見せて窓の外を眺めるやうにしてまで話した。

かうした夫婦だちの睦まじさうなのに引かへて、小鹿野夫妻は眞中から少し右に寄つたところに默つて並んで腰をかけてゐた。何一言言葉を交すでもなかつた。さうかと言つて別に氣まづい思ひをしてゐるといふのでもなかつた。いつもなら、さうした睦まじい夫婦について——ことに菓子を勸めてゐる妻について、何かお糸らしい批評でもするのであつたらうが、また一方のダイアの女についてもじろ〳〵と觀察するくらゐのことはするのであつたが、さういふ氣にも今日はならないといふやうに——やつぱり娘の事を盡きずに考へてゐるといふやうに、一ところを、自分の下駄の爪先から一尺ぐらゐのところをぢつと眼ばたきもせずに見詰めてゐるのを小鹿野は見落さなかつた。小鹿野はいくらか妻が可哀相なやうな氣がした。母親が死んでから幸子にのみその全心を灑いでゐるのを見て知つてゐるだけに一層さういふ氣がしたけれどそれは、その孤獨はかの女ばかりだらうか。それは人間は誰でも嘗めなければならないものではないだらうか。かれ等の前にゐる今は睦まじさうな二組の夫婦だつてやつぱりさうした孤獨に身を置かなければならぬ時が來るのではあるまいか。さう思ふと、今度はそれはかの女が可哀相といふばかりではなくて、さう思つてゐる自分がやつぱり可哀相なのではないかといふ風に考へられ

て來た。

かれだつて、何一つ本當につかんだものはないではないか。さう思つたかれはそのまゝ何うすることも出來ない壁に打突つたやうな氣がした。思ふに、かれもやつぱりお糸と同じやうにぢつと一ところを見詰めてゐたに相違なかつた。

ふとかれは西日が暑くさし込んでゐるのに氣がついた。片手でグラスでない方の窓を擧げやうとしたが、具合がわるくて自由にならぬので、止むなく立つてそれをあけた。つゞいてお糸のゐる方の窓をもあけてやつた。

それでもお糸はだまつてぢつとしてひとつところを見詰めてゐた。二組の夫婦の方からは、話聲や笑聲がきこえて來た。汽車は頻りにはしつた。

一〇三

長い間互に言葉を交さなかつたが、もう東京が近いといふ時分になつて、こんな話が二人の間に出た。

『ぢや、あなたすぐ家に歸るんぢやないんですね』

『うむ……ちよつとまだ寄つて行かなければならないところがある……』

『何處？』ちやんとその行く先はお糸にはわかつてゐたけれども、それでもわざとかう問うて見た。

『何處ッて、きまつてもゐないんだ……。Sにも寄らなくつちやならないし、それから神田にもちよつと寄らなくつちやならないし……それに――』

（うそをおつしやい、ちやんとわかつてゐますよ。お弓のところでせう）お糸は腹ではさう思つたけれども、口には出さずにぢつと小鹿野の顔を見詰めた。つゞいて（娘のことなどちつとも心配ぢやないのかしら？　それほど女の方に氣を取られてゐるのかしら？）かうお糸は思つた。何も口はきけないやうな氣がした。

しかし一度さう言ひ出した以上とめて見たところで何うにもならないのをお糸はよく知つてゐた。

『それで、放つて置いて好いんですかね？』

『何うもしやうがないな、あまり騷ぐわけにも行かんからな……』いくらかやさしい調子で小鹿野は言つた。

かれの下車する停車場はすぐやつて來た。

『今日は歸つて來ますね？』

『あゝ』

あとを振返りもせずに、むしろさうして竝んで腰をかけてゐるつらさから一刻も離れたいといふやう

に、小鹿野は帽子を被ると其まゝすぐ下の方へと歩いて行つた。お糸はぢつとその後姿を見詰めた。一度ぐらゐ振返るだらうと思つたのに、それもせずに、そそくさとそこを下りて行つた。お糸は何とも言はれないさびしさを感じた。全くの孤獨！　何うにもならない孤獨！　かの女はもはや車中の人たちに對ひ合つてゐることが出來ないやうな一種の衝動を感じて、そのまゝ窓の方に體をねぢ向けて、顏をその框のところに當てた。それと同時に汽車は動き出した。

幸福な人だちは、かの女がさうしてゐるなどとは夢にも知らずに頰りに面白さうに笑つたり話したりしてゐた。あれからまた別の人たちが澤山に乘つた。話聲もそこここから起つた。（夫婦だつて何だつて、情愛も何もありやしない。さういふのが人生かも知れない。それは小鹿野ばかりがさうなのではあるまい。さういふ風に出來てゐるのだ……人生がさういふ風に出來てゐるのだ……）もし他に人目がなかつたなら、かの女は思ふさま泣いたであらうが、それさへ出來ないのがたまらなくかの女はつまらなかつた。（私は……私は……決してこれまで曲つたこともしたこともないのに……わるいことをしたこともないのに……妻としても母親としても出來るだけのことをして來てゐるのに、やさしい罪のない女のつもりでゐるのに……何うしてかういふ慘めな、つらい眼に逢ふのか？　何うしてあの幸子さへそんなことをして吳れたか。何うして私がかうまで夫に愚なものとして取扱はれるのか。私がわるいのか。私が足りないのか？）かう思ひながらお糸は窓に寄せた顏を左の手で押さへた。尠くともかの女はずつと

向うまで――東京のAの停車場が近く來るまでそこから身を起さうとはしなかつた。

一〇四

小鹿野にしても降りては見たけれども、いつものやうに快活には歩けなかつた。かれは停車場を出て、そこの廣場に二階建の家屋の半分出來かゝつてゐる傍を通つて、昔は緣に芦や葭の茂つてゐた小さな泥沼の埋立てられたところをすつと直線に横ぎつてそのまゝ徐かに佗しさうに歩いて行つた。

かれは何處にも行く氣にはなれなかつた。お弓の家はそこからさう大して遠くはなかつたけれど、それでも始めからそこを訪問するつもりなら、この停車場よりももう一つ先の終點まで行つてそこで下りる方が便利であつた。かれはお弓の家の居心地の好いことを、そこではかれは下にも置かずに歡待されることを、ことに此頃は少し無沙汰をしてゐるので一層さうであることをよく知つてゐるけれど、しかも何となく心が鬱して――そんなところに行つたつてしやうがないやうな氣がして、さうかと言つて春子のことがそれを邪魔するのでも何でもなく、(女ッていふものはさういふものなんだらう。ひとりをしつかりとつかんでゐれば、すべてを擧げて縋るやうになつて來るが、男に取つてはそれがいつも重荷になり過ぎたり、倦怠を催させたりするが、しつかりつかんでゐない場合には、誰でもさういふ風にいくつも對者を拵えて置くものだらう。それが卽ち女だらう。從つて男はそれを兎や角いふことは出來ない。男から男へと移つて行くのを、否、女が常に男にさういふ風に見せかけてゐるのを、あなたがお厭なら、まだ他に私のためを思つて呉れる人がいくらもありますからといふやうな態度に出て來るのを何うすることも出來ない……)なぞと思つたりして、十年前によく通つた路を故郷でもあるかのやうにして、たゞステツキを引摺つて歩いた。

もはやそのあたりでもすつかり變つてゐるのであつた。其時お酌だつた綺麗な子も今では立派な姐さんになつたばかりではなく、中にはそれこそ玉の輿に乘り當てゝ大きな丸髷を結つて、何處の夫人かと思はれるやうな格好をしてゐるものなどもあつた。不思議にも今日はさうしたことばかりが、過去のことが、いつの間にか時が過ぎて行つて了つたといふやうなことがそこに浮んで來て、わるくかれの心をセンチメンタルにした。いつもなら、さういふことが浮んで來ても、すぐそれを力强くわきに押しやつて了ふのだが、今日は何うしてかそれが出來なかつた。

細い通りをかれはあちこちと歩いた。せめてさうして、その苦しさとつらさとを持つてゐる自分を他に離して傍觀してでも見なければとても生きてゐられないやうにも思はれた。酒や唄でそれをまぎらせることの出來た十年前の月日がそれと悲しくそこに思ひ出された。

小鹿野はそこにある名高い花園などに入つて行つて見た。入口のところが馬鹿にひろくなつて感じが丸で違つてゐたけれども、それでも奥まで行くと、昔のまゝの池などがあつて、綠葉の薄や葭の中に白

い藻の花などが咲いてゐた。かれはいくらか心が慰められたやうな氣がした。かれはそこにあるベンチに腰をかけて、日影のチラチラと樹の葉の中から透つて來るのを眺めた。

一〇五

昔からあつた離座敷の奥の一間に女達の笑ふ聲がして、二三の色彩がそこらあたりを彩つてゐるので、その前を通らずに、もう一つ手前の細い道を向うに出やうとすると、『あら！』といふ聲がして、つづいて誰かゞ下駄を突つかけて此方へと出て來る氣勢がした。

『そら、御覽なさい！　先生だ！　私の眼は高いわね』

運が好いのかわるいのか、そこにゐたのは、十年前――もつと前から小鹿野のことをよく知つてゐる、何ういふ妓に思ひをかけたか、また何ういふ妓には滿更ではなかつたとかいふことまで詳しく知つてゐる、お弓のことなどでも何遍か世話になつたお定といふ小唄の上手な年增の姐さんだつた。『何うもさつきからさう思つてゐたのよ。もう少し前に向うの方に歩いていらしつたでせう。あの時からその後姿が先生のやうな氣がしたのよ。何うもさうに違ひないと思つてゐたのよ。隨分、お久し振ね』

向うにゐた二三人の姐さん達もお客を投り出すやうにして此方へやつて來た。

『まア先生！』

『何うなすつたの？』

『もう何年逢はないかわからないくらゐね』

とてもそれを切り拔けて行くことは出來ないといふやうに、お組と常吉と秀勇とが、ずらりと立ち塞がつた。

『お客さまを投つたらかして置いてだめぢやないか？』

小鹿野はにやにや笑ひながら言つた。

『好いのよ……。そんなこと言つて遁げやうと思つたつて駄目よ。今日は遁がさないわ。だつて、先生の話はよく出るんですもの。此間も瓢で先生の話は隨分出たのよ』何方かと言へばまだ若い方の秀勇は、こんなことを言つて近寄つて來た。

爲方がなしに、そこのすぐわきにある亭に小鹿野は腰を下した。と、お定も、秀勇も、お組も、常吉も、皆そこに來てずらりと竝んで同じやうに腰をかけた。やつぱり十年前の昔の客は滿更なつかしくないこともないといふやうに見えた。小鹿野は『めづらしいことだな、こんなにそろつて逢ふといふことは？　今日はね、實は久し振りで、故郷でも見るつもりでやつて來たんだよ、それも内所でね……。内所でなくちや本當に昔のことが偲べないからね』などと言つた。

『そんなこと言つたつて、今日はダメよ、ねえ、お定姐さん』

いつも變らぬ艶かさをあたりに見せてゐる秀勇は言つた。

かうした人たちの生活をよく知つてゐるだけそれだけ、あたりがそれと見廻されるやうな氣が小鹿野にはするのだつた。そこにもかれははつきりと人生を觀た。同じやうな推移と戀愛と變遷とのあるのを見た。歡樂ばかりが生命のやうに――または派手なことばかりが生活のやうに自分でも思ひ、また、他からも思はれてゐるけれども、しかもやつぱりその底には眞面目な、眞面目でなければ何うにもならないものゝあるのをかれははつきりと感ずるのだつた。かれは佗しい人生の流が、片時も止む時なく、しかも同じやうにそこにも流れてゐるのを見た。かれはたまらなく感傷的な心持になつた。お定はお定で、『本當に、時々お顔を見せて下さいよ。話があるのよ、先生でもなくつちやきいて貰へないやうな話が澤山あるのよ、ねえ組ちやん』こんなことを言つて隣のお組を振返るやうにした。

一〇六

『お客さま、投つたらかして置いて好いのかえ？』

暫くしてから向うを見るやうにして小鹿野は言つた。

さう言はれてお組はひよいと後を振返つて見たが、『大丈夫よ、わかい妓がついてゐますから――』

『誰だえ？　僕が知つてゐる人かえ？』

『さア、御存じかしら？』お組は常吉と眼を合はせて、『御存じぢやないでせう？　あの時分の方ぢやないんですもの……』

『若い人だね？』

『さうでもありませんけども……。こつちにいらつしやるやうになつたのは、つい昨今ですから』

それでも流石にそつちも氣になるといふ風で、お組はちよつと挨拶をしてそのまゝ元の離れ座敷の方へと戻つて行つた。常吉もやがてはもどつて行つた。『ね、先生！』秀勇は久し振りだから是非向うの家へでも行つて遊んでいらつしやいといふ風にその美しい眼を働かせて見せたが、これもそのまゝ向うへと行つて了つて、あとにはお定だけが殘つた。

『君ももうあつちへ行かなくつちやいけないんだらう？』

『いゝのよ』

お定はたばこをつめた細い煙管を灰に埋められた煙草盆の火にじつと押しつけて、そこから烟の細く颺るのを目にしながら、『もう靜ちやん、ゐないのよ』

『え？　靜枝が……？　そいつは初耳だ？　やつぱり思はしく行かないのかな。あの人は何うしたえ？』

『あの人はつて、そら例の新聞の小說なんか書く人、あの人のためには靜ちやん隨分打込んだんだけ

ども、とてもダメなんですつて？　それで思ひ切つて、いろいろなことを忘れて來るんだッて言つて、つい五六日前、向うへ行つちまひましたよ』

『向うつて何處だえ？』

『大連！』

『ふむ！』感慨深く小鹿野は頭を振つて、『皆なさうなつちやうんだな！　誰ひとり望み通りに行つたものはないんだな。靜枝なんか眞面目な女だつたがな！』

『だからさう言ふのよ。靜ちやんがさうなるくらゐなら、もう男なんていふものはダメだつて言ふのよ』

『本當だな、あの女なんか仕合にしてやりたかつたな……』小鹿野は考へるやうにして、『あの相手がわるかつたんだ。女の心持なんか汲み取れないやうな男だつたんだ。女のやさしい心をふみ蹂つて平氣でゐられるやうな男だつたんだ……。選び方がわるかつたんだ……』

『本當ねえ』

『それに女の方にもさういふ女はある……』かう言つた時には小鹿野は何となく涙組ましい心持になることを止めることは出來なかつた。かれは辛うじてそれを押へた。『うまく行かんもんだな。人生といふものはさういふものなんだな。雪江は人の細君になつちやつたし政勇は田舍に歸つちやつたし、夏子

は夏子でひかされて運が好いやうに一時言はれてゐたけども、此頃きけば、これだつてあまり面白くないやうだつて言ふし、ひとりとして本當に仕合せになつたッていふものはないんだからな……。まア、君ぐらゐなもんだらう？　相手が好いのは？』

『おつしやいよ。あなたよく知つてゐる癖に――』お定にしても長い間苦しんで來た戀愛と生活とのため息をそのまゝそこに打出さずにはゐられないやうな調子で言つた。

一〇七

『でもまア君なんか仕合せの方だ……。一緒にゐて喧嘩するぐらゐのことはしかたがないよ……』

『あなたは御存じないから、そんなことを言ふんですけどもね。これまで何遍ひとりにならうと思つたか知れやしませんよ。それをじつとこらへて、その中にはと思つてゐる中に、こんなお婆さんになつて了ふんですからね……。これぐらゐなら、他が大騒ぎして呉れる中に、もう少し何うかして置けばよかつたと後悔してももうおつつかない……。私なんか正直すぎたんですね？』

『人生と言ふものは皆なさういふものなんだよ。さういつまでも面白いことをしやうと思つたつて、それは慾が深すぎるよ。苦情があつたり何かしても、やつぱり變らずにひとりを守つてゐるといふことが、男に取つても女に取つても好いことがやつと今になつてわかつて來たやうなものだからな』

『さうね、あとからあとからわかつて來るものね。そしてわかつたと思つた時は、もうお婆さんね――』

お定は烟管に火をつけて、その吸口のところを袖で拭いて、『失禮！』と言つてそれを小鹿野に渡した。

體に關係のない女でなければ得られないやうな理解――傍まで觸れて行つて、そしてお互にさし違へずに、じつとお互にお互ひを見守つてゐる心持、それから一歩でも中に入れば愛着、眞意、嫉妬などといふものが眞黑にとぐろを卷いてゐて、出やうとしても何うしても出て來ることが出來なくなるのであるが、しかもそれを目の前に見て容易にそこまで入つて行かずにじつと低徊してゐる心持、しかもそれが自分ばかりでなく、相手にもさういふ深い理解があつて心から理解し合つてゐるやうな心持――それは普通の人生ではとても望むことが出來ないが、生中さういふ態度に出ると、却つて誤解されたりなどするものだが、かうした色街に長い月日を經て、いろいろな情の曲折にも出合ひ、男女のこともよく飲み込めてゐるので、それで、その心持がはじめて理解されるといふことが、はつきりとそこに浮び上つて來るのを小鹿野は感じた。それは春子にもお弓にもとても得られないものだつた。

『君はそれでも眞面目だから好いんだよ。……』

かう言つた小鹿野の胸には涙がまた込み上げさうになつて來た。かれは一生懸命にそれを押へた。煙

草をすぱすぱ吸つた。

小鹿野にしては、さうした感傷的な心持は、いつも押へるやうに、やうにと心がけて來たのだつた。さういふ心持を起すのは、その心の弱くなつた證據だといふ風にいつもかれは考へるのが常だつた。ところが今日は何うしてかそれを押へることが出來なかつた。結局は人間はそこに落ちて行かなければならないものであるといふことを今日ほどかれは痛感したことはなかつた。

『でも先生には隨分長くお目にかゝつてゐるのねえ！』

小鹿野はそれには頓着せずに、

『しかし、さういふことは、誰だつて皆な同じなんだからな。それが人生なんだからしかたがない……』

『本當ねえ』

『まア、體が丈夫で、曲りなりにもこの人生が送つて行ければ、それで結構としなけりやならない……。君なんか、どんな泥田見たいなところにゐたつて、ちつとも周圍に影響されるやうな人ぢやないんだから……。だから、いつ逢つたつてちつとも變りやしない……』

『お寄りになるんでせう？』暫くしてからお定は微笑し乍ら訊いた。

『いや、今日は寄らない……。何しろ、さういふつもりで來たんぢやないんだから……。今日此處で逢つたことは言はずに置いて下さい……』

『だつて、皆ながもう知つてゐるから、私だけ默つてゐたつて、ダメよ』お定は笑つて、『そんなこと言はずに寄つて行つておあげなさいよ。この頃、先生はちつとも來ないなんて、此間も弓ちやんさびしがつてゐましたよ』

『その中また出直して來る……。今日は歸る……。あちこち内所で歩いて、昔のことでも考へて見やうと思つてやつて來たのを、運わるく見附けられたんだから……』

『さう……』

お定にはさすがにわる留は出來なかつた。

そこを出やうとした時には、向うにゐる女たちが『もう歸るんですか？』とか『何うしたんですの？今日は？』とか言つて、中にはひとなつこくあとを追つて來るものもあつたりしたが、それをもやつとのがれて、かれは溝に添つた道の方へと出て行つた。靜かな道。植木屋などのある道。ことに丸竹の垣をした栽込の中に見えてゐる新しい簾のしてある二階。そこでまた誰かに逢ひはしないか。お上さんが出てゐたりして、まア先生とか何とか言つて無理やり引つ張り上げられはしないか。しかしそこには背

の高い男が水を撒いてゐるのを目にしただけで、その門の前をそのまゝ向うに通り抜けて行くことが出來た。小鹿野は一種言ふに言はれないさびしさを感じた。過去になる！　過去になる！　と思ひながらやつてゐたことが、たうとう過去になつて了つたのである。いつの間にかさうなつて了つたのである。金のあるなしに拘らず、さういふ氣にならなくなつたといふことは卽ち過去になつて了つたといふことなのである。路も同じだしそこに住んでゐる人だちも同じだ。やつぱり同じやうに豆腐屋も通つてゐる。自動車も通つてゐる。まだ昨日のやうである。それでゐながら、いつの間にか時が移つて行つて了つてゐるのである。と、幸子のことがつゞいて思ひ出されて來た。あの時分はまだ十歲か十一ぐらゐだつた。それがさういふ大それたことをするやうになつた……。そこにも人生が移つて來てゐることが、その身が一刻も留まらずに過ぎて行つてゐることがはつきりとわかる。(それなら、何もそんなこと問題にしないでも好いではないか。ひとり立にならうとしてゐるのだから、ひとり立にさせてやる方が好いぢやないか……。しかしそれは第三者過ぎた考へ方だ……。體で繫がつてゐる親の身では、そんな風にはとても考へられない……)その體の繫りのあさましさのために、昔の人たちは世も捨てた。出家もした。山にも遁れた。小鹿野にはさうした昔の人だちの心持が人事ではないやうに思はれ出して來た。

お弓だつて、春子だつて、皆さうなつて繫がつてゐるから苦しいのだ。意志や理性でそれをきつぱりと處分して了ふことが出來ないから苦しいのだ。と、幸子が、ペットとして幼い頃から抱いて寢たりなどし

て可愛がつてゐた自分の娘が、自分の體の一部が、その處女の清淨な身をあんな筧のやうな奴のためにいつの間にかけがされたりたぶらかされたりしたばかりではなく、その體のつゞきの一塊肉さへそこに小さく息づきつゝあるのを思ふと小鹿野はたまらなく不愉快になつて、頭がぐるぐる廻るやうな氣がした。

一〇九

氣が附くとかれは大きな川の緣に來てゐた。筋違ひに長い橋のかゝつてゐるのが見えて、帆が三つも四つもをりからの風を受けて上流へ上流へとのぼつて行つてゐた。

かれはあそこから土手にあがつて、それからずつと此方へと下りて來たのだつた。否、むしろ此方に來るといふ氣もなしに、昔此處等をよく歩いたことがあるのでそれで無意識に足が此方に向いて來たといふ方が適當だつた。かれの頭は不思議にも過去と現在とが一緒になつて押寄せて來てゐた。かれはお弓に情人があつて、そのためひどく苦しめられたことをそこにくり返した。かれはその時分よくこゝにやつて來た。それといふのも、その情人と、かの女との落ち合ふ家が、ついそのむかうのところにあつたからであつた。かれは闇の中をよく歩いた。心の闇と夜の闇とがひとつになるやうな氣持でよく歩いた。そしてそつとその家の川に面した方の離れ座敷の羽目にその身を寄せた。時には絶望して、この燃えるやうな身體を、癪だ！　いつそ川の中にざんぶとばかり投げて呉れやうかとやけに思つたことも二

度や三度ではなかつた。それほどかれはお弓に引寄せられてゐた。否、そのためにしまひには却つてかれがお弓を引寄せるやうな形になつた。そしていまだにその關係はつゞいてゐるけれども、しかしもはやその時とはちがつて、たうの昔に此方が受身になつてゐるのであつた。否、今度はあべこべに向うが積極的になつて來たのであつた。

誰がしかしその時今までさうした心持がつゞいて來てゐるやうと思つたらうか。春子にまでつゞいて燃えて行くだらうと思つてゐたらうか。髪はもう白くなつた。鏡に映る顏にも、身の老がそれとはつきり指さゝれて見えた。それでゐて何うしてこのもえた心を押えることが出來ないのか。年を取ればひとり手に去勢されて、骨董ものでも弄るやうになるから安心なものさ！　などゝその頃はよく言つたものだが、そんな風な心持に少しでもなれないのは何うしたものか。それは自分ばかりがさうなのだらうか。世間の多くの年寄は、もつと靜かな落附いた心でゐられるのだらうか。年寄だといふので、世間をかねて、年寄は年寄らしくしなければいけないといふので、それでわざとさう見せかけてゐるのではあるまいか。時々かれはさういふ風なことを考へてぼんやりとした。心は少しも老てゐるとは思へないのに、何うしてさういふ風に他から言はれるのかしらなどゝも考へた。(これと言ふのも、つひに滿たされたことのないものの孤獨！　さうだ、孤獨だ！)かれはまたそんなことを考へた。

混沌とした人生だ。とてもひとつに統一することなどの出來ない人生だ。雜多紛々どころか、もつと

もつとこんがらかつた人生だ。何處まで行つても、はつきりとつかむことなどの出來ない人生だ。かう思ふと、何も彼もわからないやうな氣がした。死にまで到達しなければとてもわからないやうな氣がした。

ギイと楫の動く響がすぐその前でした。かれはふいと頭を擧げた。大きく孕んだ帆が、かなりの早さで、すぐその傍を掠めて動いて行つた。(あの時分の心持とちつとも變らないなア！　學生の頃、芦をわけたりして船を此處等あたりまで漕いで來た時の心持と……)かれは長い竿を蘆荻の中にさし入れて、成るたけ中流に出されまいとしてゐる二三人の青年が今だにそこにゐるやうな氣がした。寄せて來る波に、葭の緣がだぶだぶと根元から動いた。

一一〇

別々な存在——川の緣の大きな棒杭に腰かけてゐる小鹿野の頭の中をさうした考へがはつきりと通つて行つた。(さうだ……。さうするより他しやうがない。自分には自分の考へがある。自分の存在がある。それは何うすることも出來ない。それとやつぱり同じやうに春子の存在がある。お絲の存在があ
る。幸子の存在がある。それは何うすることも出來ない。それを一歩でもこつちに寄せやうとするに
は、その寄せやうとするものが犧牲を拂つたり努力をしたりしてそれを引張つて來るより他爲方がない。

……)かれはその犧牲や努力を長い間やつて來たことを考へた。またそれがひとつも役に立つてゐなかつたことを考へた。かれはひとり手に暗い〳〵氣持になつた。

その別々な存在は、押しつめて言つて見れば盲目な意志と言つたやうなものだ。何うにもならないものだ。昔の人だちはそれを教育や道德や理想でデシプリンすることが出來ると思つてゐたが、それはとてもダメなことなのだ。皆徒勞に歸して了ふことなのだ。さうしたデシプリンは人生を滑らかに廻轉させるために、油としていくらか役立つくらゐなものだ。結局は何うにもならないものだ。人間は眞暗な闇の空にてんでに五十年の命を揭げて暗中模索をやつてゐるだけのものだ。そしてその中にこの箇々の盲目の意志だけが動いてかゞやいてゐるのだ。それも互に何等の交渉を持つてゐるのではない。否、交渉を持つために互に近寄つて行くには行つても、それはひとつが他に併せられて了ふか、さうでなければ、互に反撥するか互に沒交渉に遠く離れて行つて了ふか、とても駄目だと知りながらしかも離れることが出來ずにそのまゝ爭鬪をつゞけて行くか、それとも全くひとりでさうした多くの箇々の盲目の意志とは別に、自分ひとりだけで其微かな光をあけて行くか……。小鹿野は今までに經驗したことのないやうな孤獨を深く感ぜずにはゐられなかつた。急に——ある光景がかれの眼の前に浮んで來た。それは他ではなかつた。小川のあの笑顏だつた。平生わるく皮肉ばかりを言つてゐるやうな、くそ眞面目な顏にだしぬけに春が來たやうな顏だつた。かれは、かうして低徊してはゐられないやうな焦燥をつよく感じ

た。

（兎に角、あれを奪ひ返すことが必要だ。あれをあいつに取られて知らぬ顔をしてゐるわけには行かぬ……。馬鹿な……。そんなことは出來ない……。あんなけちな人生の傍觀者にあの春子を奪はれて知らん顔をして居ては俺の今までの貫目に關する。さうだ、これから行つてさがし出して、きまつてあそこにゐるにちがひないから、それをひつたくつて來る。そしてもう一度自分のものにして、それからそのあとで、破れた鞋でも捨てるやうにして捨てゝやる！　あんな春子見たいな奴！　あんな奴！　一度さうして置いて、それから捨てるのならわけはない！　馬鹿にしやがる！　あんな奴にいつまでも未練を殘してゐる俺ぢやない――）表面は春子と小川とに對して强く打突けて行つてゐる言葉であるが、しかもそれは幸子と覓とに對しても强く衝いて行つてゐるやうな氣がした。小鹿野は體がぶる〳〵とふるえ出して來るやうなのを感じた。

かれは立上つて歩き出した。

一一

何の音沙汰もなくて夏の暑い日は過ぎて行つた。小鹿野にしてもお絲にしても一刻もそれを案ぜずにはゐられなかつたけれども、しかもこれと言ふ心當りもない上に滅多にそれを口にすることも出來ない

ので、そのまゝ朝になり夕になつた。お絲の體にははつきりと痩せが見えた。

秋雨が新たに晴れて庭の木犀が靜かにかをる日の午後であつた。小鹿野は二三日歸らず、お絲がひとりで思ひ屈して居間で裁縫に坐つてゐると、ふと自動車が門の前でぴたりととまつた樣子だつたが、それは前の大きな邸に來たのだらうと思つて氣にもせずにゐると、さうではなくて、自分の家の門のくゞりが明いて、女らしい徐かな足取りで、砂利を踏んで誰かが此方へと入つて來る氣勢がした。

お絲は誰だらうなどと思ひながら徐かに玄關の方へと立つて行つた。

かの女はそこに、立派な、つくりから持物まですべて金持の夫人と言つたやうな形をした五十近い女の人のにこにこしながら立つてゐるのを目にした。否、それは生面の人ではあつたけれども、何處かで曾て一度は見たことがあるやうな氣がした。さうでなければ寫眞か何かで……。

『まア、あの、だしぬけで、失禮だとは存じましたけれども……』かう言つて名乘るのをきくと、見たことがあると思つたのも道理、それはあの雪子の母親だといふのだつた。

『まア、さやうでございますか。よくまア……何うぞお上り下さいまし。このやうに汚いところでございますけれど……』かう言つて玄關の三疊に隣つた八疊の座敷へお絲はその客を請じた。しかし何ういふ用事で、さうした珍らしい人がたづねて來たかと思ふ暇もなく――そこにその夫人が坐つてまだ挨拶すら碌にしたかしないかと思はれるくらゐなのに、その人はすぐ言葉をつづけて、

『あのこちらのお嬢さまがついさつきお見えになりまして？』

『え！』

『あの幸子さまが――私が丁度娘のところにまゐつてをりますと、ふいといらつしやいましてね……。それから、いろいろと、ねえ、あなた……』その一言二語の中にも母親同士の心は通じて、その話をつゞけて行かなくとも、それだけでいろいろのことがすぐ互にわかつて行くのだつた。

『まア、ねえ、雪子さんのところへまゐりましたか……。まア、あの子が。申上げるのもお恥かしい……』しかもかう言つたお絲の心の底には、たうとうその行方の知れたことについての喜びが溢るゝばかりに張りわたつた。

『いろいろおうかゞひいたしたのでございますよ。それにねえ、まだ一度もお手紙もお出しにならないと仰しやいますから、まアねえそれではお母さまがさぞ御心配なすつていらつしやいませうと申しまして……。私も雪のことでは、それはそれは一方ならぬ苦勞を致してをりますので……。それはいけない、親の心がさうわからなくつてはいけないとよおく申上げたのでございますよ……。本當にねえ、さぞ御心配でございましたでせうね。それで、雪がすぐまゐると申しますのを、何うせ私が歸るのだから、早い方が好いからと申して、それで失禮とは存じましたけれど、かうしてお伺ひいたしましたので……。もう、雪がおあづかりいたしてゐるさうでございますから……。え、え、ひとりでゐらつしやいましたとも……。さう思ふやうになるもんではございませんから……』雪子の母親の眼からもお絲の眼からも涙がほろ〳〵と落ちるのだつた。

一一二

『ありがたうございました。お志しのほどは何うお禮申して好いか……』お絲はかう言つて何遍も何遍も頭を下げた。

お絲は娘の口を透して雪子のことも雪子の母親のこともかなりに詳しくきいて知つてゐるので、初めて逢つた人のやうな感じはせずに、むしろ伯母か姉にでも向つて坐つてゐるやうな氣がした。お絲はその口からあらまし娘の成行を聞いた。

何でも銚子の方の海岸にあれからずつと行つてゐたといふことだつた。それもあの燈臺のある方ではなしに、それとは反對になつてゐる方の海岸に三間の家を借りて暮してゐたといふことだつた。『まアさやうでございますか。あきれたものでございますね。それで、何うするつもりだつたんでございませうね？』お絲もそれをきいてはいくらか腹立たし氣にならずにはゐられなかつた。

『でも、あまりお小言はおつしやいますなよ……。今の娘たちは、皆なさういふ人が多いのでございますから……。こちらのお嬢さんなどは、まだ素直でいらつしやるんですから……。それから比べまし

たら、宅の雪などは、何んなに親に不孝をかけましたことやら……。いゝえ、今でさへまだその相手が思ひ切れないのでございますから……。私どもの時代には、たとへさういふことがございましたにしても、そんなにしうねくいつまで思つてゐるものはございませんのでしたが……。一度はやつて見てもそれがいけないものなら、すぐあきらめて他へ行くなり何なりいたしたものでございますのに……。これと申すのは、もう雪がお話し申上げたでございませうが、やはりいろ〳〵なことがございますものですから……』

雪子の母親は、やつぱり幸子からいろ〳〵なことを耳にしてゐるので、やつぱり初對面の人とは思へぬばかりに深くその話に觸れて行くのだつた。話してゐる中に、次第に幸子と覓との間は始めに思つたやうに既に切れてゐるのではなくて、何にしても兩親の承諾を得なければならないといふための行動であるといふことがお絲にも飲み込めて來た。

『それで、まだお宅に置いていただいてあるのでございませうか？』

お絲は一歩を進めた。

『始めはすぐお歸りになるやうなお話でございましたけれども、雪が頻りにおとめしまして、兎に角何うなるにも、その話がきまるまで、そこにゐた方が好いだらうと申し上げましてねえ！　本當に、あんなに好いお孃さまなのに――』

『いろいろありがたうございました。そんなにまで御心配下さいましてねえ！』

『母親の心なんか、娘にはよくわからんものでございますねえ！』

染々とその身のことを、また雪子のことを、雪子にからまる戀愛のことを、政子とその木村とが今だに何うにもならずにむしろ益々その仲の深くなつて行くのを、夫は夫でそんなことには頓着なしに、やつぱり今でも妾をあちこちに置いたりしてゐることなどを取あつめて思ひ出して、溜息がひとり手に出て來た。

『本當でございますねえ！』お絲にしてもその雪子の母親のため息が、しみじみとそこに、自分の心につゞいて來てゐるやうな氣がした。何不足ない人達にもやつぱりさうした苦しみが纏はつてゐるのだつた。

一一三

雪子の母親は、早くお知らせする方が好いからと言つて、ちよつと立寄つただけであつたけれども――現に自動車も待たせてあるのだけれども、しかも自分の話も聞いて貰はずにはゐられなかつた。かの女はかなりにいろ〳〵なことを話した。とても自分の子だからと言つて自由になるものではないと話した。そのためにその身は何んなに苦しんだらうと話した。娘や子息も子供の中こそ可愛ゆくもあり面

白くもあり力にもなるやうな氣もするけれども、大きくなつてはとても憎い腹立たしいものだと話した。何うして今の年になつて、こんな苦勞をしなければならないのだらう、何もわるいことをした覺えもなければ、他に怨まれるやうなこともしたことはないと思つてゐるのに、何うしてかういふ艱難に逢ふのだらうと話した。世の中のことゝいふのは、皆なさういふものなのだらう、かけた望みなどといふものは一つとして遂げられるものはないのだらう、先から先へと壞れて行くのだらう、それがこの世の中といふものだらうと話した。次第にお糸もそれに引寄せられて行つた。自分のやつて來たこととその夫人のやつて來たこととが丸で判でも捺したやうに同じであるといふことも段々お糸にわかつて來た。その放縱な夫の生活も小鹿野のやつてゐることといくらも違つてゐないらしいのがそれとわかつて來た。男といふものは皆なさういふものかしら？　また女といふものは皆な自分等のやうになるものなのかしら？　つとめて堪へ忍んで、またはさういふことを他の耳に入れるのは家庭の主婦としての耻のやうに思つてゐるので、それで多くは表面にあらはれずにすんで行つてゐるけれども、やはり何處でもさういふ風ではないのかしら？　たとへさうでないにしても、さうしたことが何等か違つた形であらはれて來てはゐはしないのかしら？　お糸はそんなところまで深くその考へを持つて行かせられるのを何うすることも出來なかつた。

『え、さうですとも。私などでもいろ〳〵なことが皆な崩れて壞れて行つて了つたやうなものですとも……。一つとして思ひ通りになつたものなどはございませんですの……。いゝえ、何う致しまして？　それはね、他さまはいろ〳〵なことを羨ましさうに仰しやいますけれど、何う致しまして？　私などつくづくこの世の失敗者と存じますの……』

雪子の母親はそんなところまでその話を持つて行つた。だから、餘り深くお考へにならない方が好い、成行におまかせになる方が好い、さう言ふと、何だか親としての責任の十分をつくさないやうに他の人たちからは言はれるかも知れないけれども、それはさうした經驗をまだ持たない人が言ふことだなどと話した。さうでないと、わるくこぢれて、雪子のやうにならないとは限らないと話した。雪子は二人の兒を抱えてゐるから、今だにその三角關係から離れて來ることが出來ないんですから、だから無理は出來ないと話した。雪子の母親は、お糸などとは違つてその夫の身の上からも、またはその娘の身の上からも、つく〴〵色戀といふ道の恐るべきものであることを理解してゐるらしかつた。

『私、もう、そのことではこりこりしてゐますの。あさましいにも何にも……。私、いつそのこと、尼になつて了はうかと思つたことも何遍かございますの……』こんな風にも話した。

一一四

『だつて、それがつまらなくなれば爲方がないぢやないの？』

春子は平氣で言つた。

『それぢや、お前の戀愛論は極めて初歩だね？』

『さうかしら？』

『つまらなくなつたといふことだけで、戀愛がドシドシ變つて行つて了つては、ちつとも本當の眞面目さなんていふことは味はへないぢやないか。お互に辛抱したり忍耐したりするところに戀愛の意味もあれば本當の面白さといふこともあるものぢやないかしら？』

『男ッていふものは、いつもさう言つて女を引つ張るわね？』

『いつもそれだ。あゝいふ風に反抗的に出て來るのだ。もう少し男に未練を殘すやうな心持にはなれないものかな？』

『未練を殘すくらゐなら、男なんかにラブはしはしないわ』

『男にもさういふ言葉はあるよ。あのサアニンが、言つてゐるよ……』

『だから、それを言ふのよ……。一體、男に未練見たいなものが少しでも見えると、ぐん〳〵それを引張つてやりたくなるのが私の性分よ。そして男が前のめりに小氣味よく倒れて、地べたで顏を打つて、鼻血でも出してゐると、この男もこんな男だつたかな！　といふ氣がして、情ないことがいつもの例よ。男ッて存外意氣地のないものね……』

『……』

『此方が十のものなら』小鹿野が默つてゐるので、春子は言葉をつゞけて、『そつちも十のものッていふやうなものはないものかしら？　それは刹那的には決してないことはないわね。しかしそれが長くつづいて行つたためしがない。一體、可哀相だとか、あれほど思つて呉れるにとか、さういふシンパシク見たいなものが何うしてかうよく伴つて來るんでせうね。もう少しぱきぱき出來ないものかしら？　燃えてゐる間だけで滿足なんだけども……』

『お前見たいにエゴイスチックな女は女の中の女と言つて好いだらうな？』

『惡魔だつて言ふの？』

『兎に角、惡魔だらうな。一歩讓つて惡魔でないとしても、そら下等動物にある雌見たいなもんぢやないかな。そらかまきり――あれはどんどん雄を食つちやうぢやないか？』

『さうよ、それよ……。たしかにそれだと思ふわ』春子は存外眞面目で、『だつて、私はいつもさう思ふんですもの……。役に立たなくなつた男ぐらゐ始末のいけないものはないと思ふんですもの……。私のこれまでの戀愛の歴史は、皆それなんですもの。もう役に立たなくなつた異性などの許に、よく女が忍耐してゐられると思ふんですもの……。それでも、私、始めの時はそんなこと知らなかつたから、女はさうしてゐなくつちやならないものだと思つて、五年の間に、子供を三人まで生せられて、それでも

辛抱したゐたわよ。……さういへば、さういふ女は世の中に澤山あるのね。十のものなら九つまでそれね。しかし私にはそれはとても辛抱しきれなかつたんですもの……。子供はそれは可愛いわ。私だつて子供のことでは涙をこぼしたこともあつたわ。しかし私の戀愛の用にたゝなくなつた男にそのためにくつついてゐるわけには行かないわ。私の家庭でのいくつもの失敗は、皆なそれなのよ。用に立たなくなつた男なんて、壞れたおもちや見たいなもんですからね……。あなたにはそれはわかる筈なんだけども……』

一一五

『それはわからんことはないよ』

『もう用に立たないといふことはすぐわかるのよ……。男といふものは、何うしてもう少し張詰めてゐないでせうね。何うしてすぐ滿足して了ふでせうね。これでもう相手を自分のものにしたと思ふと何うしてあゝ安心して了ふでせうね。もう少し皮肉であつても好いわね？』

例の小川がピンと小鹿野の頭に響いて來た。

『つまり飽きつぽいんだな』

『さうかしら？　それとも違ふところがあるかも知れないけど……』春子は何か言はうとしたがよして傍にあつた卷煙草に火をつけて、それをすぱすぱ吸ひ出した。

『僕が此處に來る前に、誰がゐたかを中てゝ見やうか？』

『……』

何も言はずに笑つたまゝで煙草の煙を吹くやうにした。

『え？』

『男ッていふものも隨分網を張ることは上手ね。蜘蛛見たいね。女はよくその網の糸の中に引つ張り込まれるわね。私、さういふ時にはぢつと見てゝやるわ。何ういふことをするかと思つて……。やつぱり蜘蛛と同じよ。それに、その絲に粘着性があつて、少しまごまごすると、何うしてもそこから出て來られなくなるわね。そしてたうとうしまひに男の餌食になつて了ふのよ。さういふ女を私はよく見るわ——』

『まア、そんなことよりも、誰が來てゐたかを當てゝ見やうか？』

『當てなくつたつて好いわ。あなたはあなただけのことをしてゐれば好いぢやないの？　さういふ風に網を張るからきらわれるのよ。……』

『でも、さうは行かんよ。あべこべに此方が相手の網の中に入れられて了ふからね……』

『もう入れられてゐるわよ、いゝえさうぢやない。自分で無理々々入つて來てゐるぢやないの？』

『今、歸つたばかりだらう？』

『何うだつて好いぢやありませんか。あなたはあなただけのことをなさいよ。すべてを占領しやうと思ふから、いろいろなことが起るのよ。戀愛ッていふものは、その時だけのものよ。總てを占領したり所有したりするといふことは間違つてゐるくらゐのことは、あなただつて知つてゐる筈ぢやありませんか……』

『それはわかつてゐるが、しかし今ではそんな心持ではゐられなくなつて了つたんだ。それほど相手に引張られて了つたんだ。引張られまい、引張られまいと思ひながら、たうとうかういふことになつて了つたんだ……』

『だから意氣地がないと言ふのよ。何故そんな風になつちやつたのかしら？　どつちにしたつて、さういふ慾が出て來てはおしまひよ。慾が出たものの方がまけよ。それよりも、男はさういふ戀愛の對照物をさういふ風でなしに、たゞひとつの物として見てゐることは出來ないものかしら。自分が所有するとか何とかいふ風に考へずに――』

『それは出來ない……人間はそれが出來ない樣に出來てゐる……』

『私はさうは思はないわ。いつでもさういふ風にひとりでゐる。ただひとりだといふ風に考へてゐる。私には戀愛さへあれば好いのよ。戀愛の菩薩境なんていふものに入るのは大きらひよ……。さういふ境

は戀愛といふものの墮落よ……』

一一六

『だつて、お前にだつて、さういふ境が來ないとは限らんぜ！』

『來ないわねえ、もう……』

『そんな立派な口をきいて、あとで思ひ當ることがあるぜ！　あゝあの時、小鹿野さんがかう言つたが、それはかういふことだつたのだといふ時がきつと來るぜ！　その時後悔したつて遲いぜ！』

『それはたしかにない、そのないことだけは誓ふ！』

春子は確信があるといふやうにきつぱり言つた。しばし沈默がつづいた。

『だつて、いつかお前、若い時のことを話したことがあるぢやないか。頭が何うかなりさうになるほど苦しんだことがあるぢやないか』

春子はいきなり頭をあげて、『あゝそれならあるわ。若い時なら？　やつぱり私だつて無邪氣な娘時代があつたにはあつたんですからねえ。人一倍やさしい戀愛の追求者なんですからね？』

『なら、それがもう一度蘇つて來ないとは何うして言へる？』

『さういふ風だつたから、ロマンチストだつたから、センチメンタリストだつたから、今さう言へ

るのよ。それにしてもあの時分の無邪氣が戀ひしいわね。世の中は美しいもの綺麗なものとばかり思つてゐたんですからね。紅葉さんのものなんか讀んで、未來は理想國のやうに思つてゐたんですからね。だから男はこんなものだなどとはちつとも思つてはゐなかつたんですからね。すつかり美化して眺めてゐたんですからね。ところが、何う？　男は卑しいことをするものだつたんですもの……女の前に平氣で頭を下げるものだつたんですもの……。私はあのくらゐ失望したことはありませんでしたね。しかしそれでもまだ無邪氣だつたですからね。さういふ理想國は今は來なくつてもその中には來ると思つてゐたんですからね。そしてその空想を食物にして、十年、もつと長く辛抱してゐたんですからね……。それを思ふと、とても二度とそんな理想國が來るとは思ひませんね。それだけはたしかに來ない……』

『お前はそれだけ強く戀愛といふものを感じたわけだから、さうした境の來る可能はほかの人よりもつと餘計にあるわけぢやないかな？』

『そんなドグマには私はもうだまされはしませんよ』かう言つたが春子はまたその昔を思ひ出すといふやうにして、『娘時代の戀愛なんて、馬鹿々々しいやうなおかしなものね。考へると、いぢらしくもなるけれども、噴き出したくもなるのね。つまらぬことを大問題にしたり、泣いたり笑つたりして……。あれで命がけなんだから……。男が何んなものだかなんていふことをちつとも知らずに、眞心さへつくせば好いものぐらゐに、まア、家庭が皆なさうだから、さういふ風に思ふのかも知れないけども、馬鹿

馬鹿しいと思ふわね。好い加減年を取つた女だつて、そんなことを考へてゐるものはいくらもあるのね。だから、私には心中なんかする人は馬鹿にしたくなるわ。もつと面白いことがいくらだつてあるのにと思ふわ……。何も死ぬことはないと思ふわ。女だつてすぐ男に捨てられて了ふんだから、男もぐんぐん捨てゝ了ふ方が好いのよ。それはちつとはお互にいやな氣がするでせうサ。體の關係ですからねえ。しかしちよつと堪えれば、ぢき元通りになつて了ふわ。だから戀愛にはさういふことはちつとも問題にはならないと思ふわ』

一一七

『それはお前のいふことはわかるよ。戀愛の刹那主義と言つたやうなものだよ。戀愛至上主義といふやつがあるが、あれと正反對を成してゐる形がおもしろくないことはないよ……。しかし、それで滿足してゐられるかね？』

『だから、滿足してゐられなければ、別なことをするといふのよ。何うせ、人間のやることなんですからね。何をやつたところで、大した惡も出來やしませんよ』

『それはさうだらう。さういふ風に底を拔いて置くといふことも好いだらう。少くとも樂には樂だ……？　しかしさういふ狀態にも、もう少し經つと飽きて來るよ』

『それはさうかもしれないわ。しかし兎に角今ではその狀態が一番好いと思つてゐるんですからね。何んなことだつて、滓といふものは出るもんですからね。そんなものには拘泥してゐずに、ドシドシさういふものは捨てゝ行つて了ふのよ。私なんか、これまでその滓の處分で苦しんで來たんですもの…』

『何うしてもさういふことになるな。お前の考へ方では――』

小鹿野はかう溜息をつくやうにして言つた。

『一體、人間のすることの中で、それなら、何が一番好いんでせう。家庭？　私、もうそれには懲りうだけども、私にはさうは單純には思へない。その證據には、いざとなればやつぱり子供は子供、自分は自分ですもの……。子供がいくら親のことを考へて呉れたつてたかがしれてゐるし、親だつていくら子供のことで心配したつて何うにもなりやしない。だから、私はかう考へる時があるわ。子供に對する親の愛なんていふものは、戀愛の滓だツて……。あんなものはあつても好いでせうけども、なくつたツてちつともこまりやしないものぢやないかと思ふわ……。そんな愛見たいなものが生中あるからそれで世の中のことは難かしくなるんぢやないかしら？』

『それはさうだらう？　その代り人間が本能だけで生きることになる？』

と、春子は大きく笑つて、『たうとうあなたも道德家になつたわね？』

『だつて、さうぢやないか？』小鹿野も曾てさうした考へのもとに動いたことがある身なので、ぴたりとその矛盾を衝かれたやうな氣がした。

『道德家！　道德家！』

春子は馬鹿にしたやうな調子で言つた。

小鹿野は忌々しさが急に體に漲つて來るのを感じた。何故と言へば、そこに小川がゐるからである。小川がわるくかの女の頭の中に働いてゐることを感ぜずにはゐられなかつたからである。

『おれが道德家なら、お前は何だ！　淫婦だ……』

『淫婦結構よ……』

『ちつとも結構なことはありやしない……。小川のやうなやつを相手にするから、そんなことになるんだ……。何だ、あいつは？　あまのじやくのやうな、それでゐてわるく狡猾で、そして豪さうな顏をしてやがる！』

『何も小川さんに關係したことぢやないわよ……。小川さんのわる口よりもつと私のわる口をお言ひなさいな、馬鹿々々しい……』

『何方が馬鹿々々しいんだ……』

小鹿野はさすがに打ちはしなかつたけれど、拳を握りしめるやうにした。

一一八

暫く沈默があたりを領した。

昔なら、もつと强く出て行くのだが、そこをいくら押して見たところで何の目も出て來ないのをかれは已によく知つてゐた。自然かれの心持は皮肉にならずにはゐられなかつた。

『つまり、滓になつたわけだね？』

『……』

春子は口を歪めるやうにしたが、やはりその沈默をつゞけた。

『普通なら、それでは！　と言つて僕が出て行かなければならないところかも知れないね。ところが、道德家だから、そんなことをしないよ！』

『……』

『何か言うたら好いぢやないか。道德家だなんて馬鹿にすると、あべこべに何んな眼に逢はされるか知れないぜ！　かう見えても以前の血はまだ流れてゐるんだからね。どんな調子でまたそこに溢れ出して來ないとは限らんからな……』

『何とでもおつしやいよ』

『その内には何うかなる！　それはたしかに何うかなるよ。お前の方で滓になれば、此方だつて燃え殼になつて了ふわけだからね。それはお互ひつこだ……』

『だから好いぢやないの？』

『だから、俺は俺の好きなことを言つて歩くから、さう思ふが好い。兎に角に、お前は俺に取つて一つのめづらしい經驗だつたんだからな……。そのためばつかりに、かうして此處まで——こんなことを言はなければならないところまでくつついて來たんだからな……。馬鹿々々しいや。こんなことはわかり切つてゐることぢやないか。とてもだめならだめで引込むのがあたり前なんだ——しかし行きがかりで何うもしやうがない？』

『まア、何うでも好いぢやないの？　そんなこと？　別に、何うの彼うのつて言つたわけぢやなし……』

『まアたくさん勝手なことをする方が好い。小鹿野の名譽に關係するやうなことをされては、いくら道德家でもだまつて引つ込んではゐられないからな！』

『道德家でわるく氣に障つたのね？』

春子は面倒だと思つたらしく、いくらか氣をかはすやうな調子で笑ひを含んで言つた。

强く出れば弱く出る。弱く出れば强く出る。喧嘩をして見たところで、お互にわる口の言ひ合をする

ぐらゐなもので、あとは何うにもならない。まさかそのまゝ出て行くわけにも行かない。顔を見ては猶更出來ない。よしまた腹を立てゝ出て行つたところで、あとが苦しくつて何うにもならないのはわかり切つてゐる。否、さういふことは、これまでも何遍くり返して來たかわからない……。恐らくかの女にしては、その爭ひを、その喧嘩を、その男性のもだへを、そのもだへの原動力になつたその身の力强さを自分で自覺することを一種の喜びとして——否、むしろさうした嵐のあとに來る快樂を思ふさま享樂したいがために、そのために、さうした第三者をその傍に置いたり、またその第三者がまだそれほどでもないのに、わざとその影を大きく見せて男をその傍に引寄せる材料にしたりする——それがはつきりと小鹿野にはわかるけれども、自分でも自分の年に似合はず愚なことをやつてゐるのがわかるけれども、しかも行がかり上何うすることも出來ないのであつた。

一一九

『何うして男といふものは、さういふ風に物をぴたりときめて了はなければ承知が出來ないのでせう？』

かう春子が言つたのは、それからやゝ暫らく經つてからのことだつた。

『うむ？……』

丸で別なことを考へてじつとして坐つてゐる小鹿野はとんちんかんの返事をした。

『さう底まで押しつめなくつたつて好いと思ふんですけどもね？』

『何が？』

娘のことを考へてゐた小鹿野はかう言つて問うた。

『それでゐて、もうあの通り別なことを考へてゐるんだから……。あなたなんか、こゝに來なくつたつてちつとも不自由はない人なんだから……』

『そんなことはないよ。ちよつと別なことを考へてゐたもんだから？』

『それ御覽なさい……』

『いや、娘のことだよ』

『あの話なんか、何も考へなくて好いぢやありませんか』春子は小鹿野の顔を見て、『そのことなら、さつきも言つた通り、放つて置きなさいよ。何も自分のことに關係したことではないぢやありませんか……？』

『さうばかりも言つてゐられないやうなところもあるからな……』

『だから、さつきのやうなことが私の口から出るのよ。……それぢや昔の道德家の爺とちつとも違はないぢやありませんか？』

『その衝に當らないから、そんなことが言はれるんだよ。もつと細かな機微なものだからな！』

『それはさうかも知れないけども……いつの場合にも、さういふことがあるぢやない……？　あなたはさういふ人ではなかつたのではないの？　やつぱり普通の道德家だつたの？』

『それはお前が、所謂道德家の型をきめてゐるので、それで、さういふ風に見えるんだらう？　親が子供のことを考へたつて、舊式な道德家だつていふことは出來ないぢやないか？』

『だつて、それは違ふわ。私はあなたからいろいろなこともきいたし、書いたものも見たし、さうした感じもよく知つてゐるけども、以前はそんな風ぢやなかつたわ。もつとキビキビしたところがあつたわ。娘のことなぞでぐづぐづしてゐるやうな人ではなかつたわ。だから、私、その話をきいた時から變に思つてゐるのよ。なぜ、そんなものを放つたらかして置かないの？　勝手にさせて置くのに限るのよ、さういふことは——。以前のあなたなら、ちよつと口を曲げたくらゐで、馬鹿々々しいことだとすら思はなかつたかも知れないわ。そこに新しいところがあるんぢやないの？　それをあなたは十分學んで來てゐる筈ぢやなかつたの？　あなたが先に立つてそれを皷吹した筈ぢやなかつたの？　ところが、何うしてそんな風になつたの？　若い人たちが勝手なことをするのは好い事ぢやないの？　だまつて見てゐるさへすればそれで好いんぢやないの？　心配することなどはちつともないわよ……もう一度もとに戻つたら何う？　私のことだつて、何もそんなにわるくこだはらなくつたつて好いぢやありませんか。てんでに好ければ好い、いけなければいけないで好いぢやないの？　私だつてあなたに何ういふ相手があるかなんていふことはちつとも問題にはしなかつたんですもの……。さういふ心持が好いのよ。ビビッドな白紙のやうな心持——』

一二〇

『お前のいふことはわからないこともないな……。つまり嫉妬をやくやうでは、決して張詰めた心持ぢやないと言ふんだな。もつと潑溂とした心境でなくつては、ラブをしたつて本當にピリピリした心持は味はへないといふんだ？』

暫く深く考へてゐた小鹿野は、じつと春子を見詰めるやうにして、

『しかし、さういふ風に刹那的に移つて行く心持に、何等の動搖も感じないといふことはないだらう？』

『それは感じないことはないわ。しかし、それを押してたどつて行けば、私が以前に墮ちて行つたセンチメンタルな心持に歸つて行くより他に路がなくなつて了ひますからね？』

『それでも、それは前のセンチメンタルな心持とは違ひはしないかな？』

『違ふかも知れないけども……さういふことは私にはわからない……。私はたゞ後へは戻りたくない